

NA GA MI NE
長峯古墳群

長野県佐久市内山長峯古墳群発掘調査報告書

1988

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例 言

1 本書は、長野県佐久市開発公社が行う宅地開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2 調査委託者 佐久市開発公社

3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4 発掘調査所在地番 長峯古墳群 (UNM)

佐久市大字内山字長峯 6582-2、6607、6608、6611-1、6624、6714他

5 調査期間 昭和62年3月23日～7月31日、昭和62年8月2日～昭和63年3月31日

6 調査団の構成

事務局

佐久埋蔵文化財調査センター

所長 西沢 正巳

庶務係主査 崎山 俊彦

庶務係 田中 芳美（臨時職員）

調査団

団長 黒岩 忠男（佐久考古学会副会長）

調査指導者 林 幸彦（佐久市教育委員会）

羽毛田卓也（佐久市教育委員会）

調査担当者 三石 宗一（佐久埋蔵文化財調査センター調査係）

調査主任 羽毛田伸博（佐久考古学会員）

高村 博文（佐久埋蔵文化財調査センター調査係主任）

小山 岳夫（佐久埋蔵文化財調査センター調査係）

調査員 井上 行雄、大井今朝太、篠原 浩江（以上佐久考古学会員）

調査補助員 神部 紗子

発掘協力者 北沢千吉、工藤 豊、小林明美、小林幸子、小林宗治、小林全子、高橋牛治郎、平林美津江、宮川百合子、和久井義雄（佐久考古学会員）

整理協力者 小林幸子、平林美津江、宮川百合子、和久井義雄

地形・地質・石質指導 白倉 盛男（佐久考古学会副会長）

人骨鑑定 森本岩太郎（聖マリアンナ医科大学教授）

獸骨鑑定 宮崎 重雄（群馬県立前橋第二高校教諭）

耳環鑑定 狩野 善典（長野県工業試験場）

遺物写真 崎山 俊彦

鉄器X線透視 佐久市立国保浅間総合病院

7 本古墳群の基本層序及び封土等の土層観察における色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」にもとづいて行った。

8 本書の編集は、三石宗一・羽毛田伸博が行い、執筆は第II章第1節長峯古墳群付近の自然環境1) 地形と地質を白倉盛男が、第2節長峯古墳群の歴史的環境を黒岩忠男が担当し、他の章については、三石・羽毛田がそれぞれ分担し、文末に記して文責を明らかにした。

目 次

本 文 目 次

例言

凡例

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機	1
---------------	---

第2節 調査日誌	2
----------	---

第3節 発掘調査の方法	2
-------------	---

第Ⅱ章 長峯古墳群の概観

第1節 長峯古墳群付近の自然環境	3
------------------	---

1) 地形と地質	3
----------	---

2) 生物	5
-------	---

第2節 長峯古墳群の歴史的環境	7
-----------------	---

第Ⅲ章 造構と遺物

第1節 古墳と出土遺物	15
-------------	----

1) 第1号古墳	15
----------	----

2) 第6号古墳	23
----------	----

3) 第5・7・8号古墳の地形	30
-----------------	----

4) 第5号古墳	33
----------	----

5) 第7号古墳	39
----------	----

6) 第8号古墳	48
----------	----

7) 長峯古墳群出土の金属器について	63
--------------------	----

第2節 その他の造構と遺物	64
---------------	----

1) 碠詰め溝	64
---------	----

2) 長峯古墳群内出土遺物	68
---------------	----

第Ⅳ章 調査のまとめ

第1節 造構	73
--------	----

第2節 遺物	75
--------	----

第3節 長峯古墳群周辺における後期古墳について	76
-------------------------	----

引用参考文献	78
--------	----

付 編

森本岩太郎 佐久市長峯古墳群第1号古墳出土人骨について

宮崎 重雄 長野県佐久市長峯古墳群出土の馬歯・馬骨

狩野 善典 長峯古墳群第1・7号古墳出土耳環のX線マイクロアナライザーによる定性分析

挿図目次

第1図	長峯古墳群位置図	1	第30図	第7号古墳石室実測図	41
第2図	長峯古墳群遠景	3	第31図	第7号古墳石室展開図	43
第3図	内山峠付近地形地質略図	4	第32図	第7号古墳石室尖削図	45
第4図	周辺遺跡分布図	8	第33図	第7号古墳前部集石尖削図	46
第5図	周辺古墳及び古墳群分布図	11	第34図	第7号古墳石室内遺物分布図	46
第6図	長峯古墳群発掘調査対象地図	12	第35図	第7号古墳出土土器実測図	46
第7図	長峯古墳群周辺地形図及び古墳分布図	13	第36図	第7号古墳出土器拓影図	47
第8図	第1号古墳基本層序模式図	15	第37図	第7号古墳出土玉類・耳環実測図	47
第9図	第1号古墳石室実測図	17	第38図	第7号古墳出土金属器実測図	48
第10図	第1号古墳石室及び墓込実測図	19	第39図	第8号古墳基本層序模式図	48
第11図	第1号古墳石室展開図	21	第40図	第8号古墳石室尖削図	49
第12図	第1号古墳石室内人骨及び歯骨分布図	23	第41図	第8号古墳石室実測図	51
第13図	第1号古墳出土耳環・玉類実測図	23	第42図	第8号古墳石室展開図及び遺物分布図	53
第14図	第1号古墳出土刀子実測図	23	第43図	第8号古墳IV区填施遺物出土状況実測図	55
第15図	第6号古墳基本層序模式図	24	第44図	第8号古墳出土器拓影図(1)	57
第16図	第6号古墳石室尖削図	25	第45図	第8号古墳出土土器尖削図(2)	58
第17図	第6号古墳石室展開図	27	第46図	第8号古墳出土土器拓影図(1)	61
第18図	第6号古墳石室尖削図	29	第47図	第8号古墳出土土器拓影図(2)	62
第19図	第6号古墳石室内遺物分布図	29	第48図	第8号古墳出土金属器・石器実測図	62
第20図	第6号古墳出土土器実測図	30	第49図	第1号古墳出土泥炭	65
第21図	第6号古墳出土土器拓影図	30	第50図	第3号古墳出土泥炭	67
第22図	第6号古墳出土金属器尖削図	30	第51図	第2号古墳出土泥炭	68
第23図	第5・7・8号古墳地形図及び墳丘想定図	31	第52図	第4号古墳出土泥炭	68
第24図	第5・7号古墳基本層序模式図	33	第53図	長峯古墳群出土石器尖削図(1)	68
第25図	第5号古墳石室実測図	35	第54図	長峯古墳群出土石器尖削図(2)	69
第26図	第5号古墳石室展開図及び遺物分布図	37	第55図	長峯古墳群出土石器実測図(3)	70
第27図	第5号古墳石室実測図	38	第56図	長峯古墳群出土土器実測図	72
第28図	第5号古墳出土土器実測図	38	第57図	長峯古墳群出土骨質拓影図	72
第29図	第5号古墳出土金属器実測図	38			

付表目次

第1表	長峯古墳群発掘調査作業工程表	2	第8表	第7号古墳出土玉類・耳環觀察表	47
第2表	内山峠の地質時代とその成り立ち	4	第9表	第8号古墳出土土器觀察表(1)	59
第3表	周辺遺跡一覧表	9	第10表	第8号古墳出土土器觀察表(2)	60
第4表	周辺古墳及び古墳群一覧表	10	第11表	長峯古墳群出土金属器觀察表(1)	63
第5表	第6号古墳出土土器觀察表	30	第12表	長峯古墳群出土金属器觀察表(2)	64
第6表	第5号古墳出土土器觀察表	39	第13表	長峯古墳群出土石器觀察表	71
第7表	第7号古墳出土土器觀察表	47	第14表	長峯古墳群調查古墳一覧表	74

写真図版目次

国版	一 長峯古墳群付近航空写真		3 第1号古墳玄室内人骨・歯骨出土状況	
国版	二 長峯古墳群航空写真		4 第1号古墳頭蓋骨出土状況	
国版	三 1・2 長峯古墳群遠景		5 第1号古墳耳環出土状況	
国版	四 1 第1号古墳全景	国版 六 1 第6号古墳全景		
	2 第1号古墳調査前	2 第6号古墳調査前		
	3 第1号古墳	3 第6号古墳天井石		
	4 第1号古墳I区墓込及び外周列石	4 第6号古墳玄室内棺床		
	5 第1号古墳石室	5 第6号古墳玄室内棺床除去後		
国版	五 1 第1号古墳玄室内棺床	国版 七 1 第6号古墳玄室内棺床除去後		
	2 第1号古墳玄室内棺床除去後	2 第6号古墳玄室内棺床		
		3 第6号古墳裏込め断面		

	4・5 第6号古墳磁刀出土状況	5 第7号古墳前庭部集石
	6 第6号古墳全景	6 第7号古墳出土状況
図版 八	1 第8号古墳全景	1 第7号古墳小刀出土状況
	2・3 第8号古墳調査前	2 第7号古墳鐵綱出土状況
	4 第8号古墳玄室内椁床	3 第7号古墳耳環出土状況
図版 九	1 第8号古墳玄室内椁床	4 第7号古墳骨出土状況
	2 第8号古墳玄室内椁床礎除去後	5 第5・7号古墳
	3 第8号古墳底丘東側断面	1 第1号鍬込溝
	4 第8号古墳底丘北側断面	2 第1・2号鍬込溝
	5 第8号古墳石室	3・4 第3号鍬込溝
	6 第8号古墳玄門	5 第4号鍬込の溝
	7 第8号古墳IV区外周列石	6 第5・7号古墳、第1号鍬込溝
図版 十	1・2 第8号古墳遺物出土状況	1・2 第6号古墳出土土器
	3・4 第8号古墳IV区埴輪遺物出土状況	3・4 第5号古墳出土土器
	5 第5号古墳全景	5~13 第8号古墳出土土器
図版 十一	1 第5号古墳石室内磚割落状況	1 第8号古墳出土土器
	2 第5号古墳石室	2 第7号古墳出土玉頸
	3 第5号古墳玄室内椁床	3 第1・7号古墳出土玉頸・耳環
	4 第5号古墳玄門	4 第1・7号古墳出土耳環X線写真
	5・6 第5号古墳遺物出土状況	5 第6号古墳出土直刀
図版 十二	1 第7号古墳全景	1 第6号古墳出土刀鋸具
	2 第7号古墳石室内椁床	2 第7号古墳出土帶
	3 第7号古墳玄室内椁床礎除去後	3 第5・7・8号古墳出土小刀・刀子
図版 十三	1 第7号古墳石室	4 第5・7・8号古墳出土小刀・刀子X線写真
	2 第7号古墳底丘西側溝込め	5 第5・7・8号古墳出土鉄綱
	3 第7号古墳IV区外周列石	6 第5・7・8号古墳出土鉄綱X線写真
	4 第7号古墳IV区外周列石	1~5 長竿古墳群出土石器

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機

長峯古墳群は、佐久市内山地籍に所在し、荒船火山より流出した溶岩によって形成された西方に伸びる幾状もの丘陵形山塊の一つの南斜面に位置しており、標高は約720~735mを測る。南方には、荒船山塊に源を発する滑津川が東西に流下し、その間には水田地帯が広がっている。

長峯古墳群には、今まで7基の古墳が確認されており、その周辺には、東方に隣接する大間古墳で7基、南東に觀音堂古墳・塚田古墳、さらに南西に、西和田古墳群で3基、月崎古墳群で19基、東姥石古墳群で5基など多數の古墳が確認されている。また滑津川南岸には、松井東古墳、松井日影古墳群(4基)、萩元古墳などが存在する。

今回、本古墳群内において、佐久市開発公社により宅地開発事業が計画され、その予定地内に存在する5基の古墳の破壊が余儀なくされる事態となり、緊急に記録保存する必要が生じた。そこで、佐久市教育委員会が佐久市開発公社より委託を受け、佐久市教育委員会からの委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施する運びとなった。



第1図 長峯古墳群位置図 (1:50,000 國土地理院地形図による)

第2節 調査日誌

第1表 長峯古墳群発掘調査作業工程表

月 別	第1号古墳	第6号古墳	第8号古墳	第7号古墳	第5号古墳	櫛詰め溝
3						
4						
5						
6						
7					 	

 : 挖り下げ

 : 実測・写真撮影

第3節 発掘調査の方法

本古墳群を発掘調査するにあたり、次の調査方法を基本として実施した。

- 古墳の名称は、『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』の名称を基本として用いた。
- 本古墳群は、荒船火山の溶岩によって形成された西方にのびる丘陵形山塊の南斜面に古墳が存在しているため、全体を網羅するように国家座標を組み、グリッドを設定した。
- 墳丘の調査は、耕作土を除去した後、トレンチによって封土及び裏込めの状態を確認した。
- 遺物の出土位置は、墳丘部は各区毎に、石室内では全てを記録した。また石室内の覆土は全てふるいにかけ、エラーした遺物の検出にとめた。
- 墳丘は、石室の中軸線とそれに直交する軸にそって四分割し、北側から反時計回りにI区・II区・III区・IV区に区画した。
- 遺構の実測は、平板実測・造り方実測を併用して行った。
- 古墳周辺の遺構の存在は、トレンチによって確認した。

第II章 長峯古墳群の概観

第1節 長峯古墳群附近の自然環境

1) 地形と地質

I 地形

佐久平は千曲川の上流沿岸平地で標高700m付近を中心として北は小諸市、南は南佐久郡佐久町を長軸として南北約18km、東西は佐久市中心部で幅約10kmの長菱形をなしている。この長菱形の長い対角線上を千曲川が北に向って流れ、短い対角線は佐久市地域で幅の最も広い部分が、その東縁の佐久山地に交叉する佐久市大字内山字長峯付近に当り長峯古墳群はここに立地している。

佐久山地とは秩父多摩国立公園が長野県界を越えて佐久地方に入り込む関東山脈の最西北端部と妙義・荒

船佐久高原国定公園の接点にある群馬・長野両県境分水嶺をなしている山地を総称している。佐久市内におけるこの山地の主峰は荒船山(1422.5m)でこの外に兜岩山(1368m)・物見山(1375m)・八風山(1315m)などが県境に連なっている。これらの山みなみの間から流れる内山川・志賀川・香坂川はゆるやかに西流して、佐久平で千曲川に合流している。荒船山は第三紀の古い火山で解折が極端に進み地塊運動と風化作用のために原初の火山形態の復原が不能な状態の火山で全山体が老年期の地形をなしている。佐久平に向っては数条の尾根状支脈をのばしているが、内山川两岸にも火山噴出物溶岩の尾根は佐久平東縁までとどいており、雨川・志賀川などとの分水嶺となっている。この内山川北側尾根の西末端部に長峯古墳群が分布している。

長峯は低い溶岩台地の裾が平坦水田面に下るゆるい傾斜面で北部には佐久平カントリーゴルフ場が佐久地方では最も古く開発されている。そこからは豊かな佐久平を隔てて八ヶ岳夢科の連山や日本北アルプスも遠望でき、北面には活火山浅間山の噴煙も展望できる。

II 地質

荒船火山の最下部の基盤は関東山地主軸の延長である中古生層であることは初谷鉱泉より相立までの内山川沿い河床に中生層の砾岩・砂岩・粘板岩・頁岩・硬砂岩層が露出し、初谷の谷入口崖くずれ個所から白亜紀に属すると考えられる貝化石の産出したことによって証明され内山中生層と命名されている。これがこの地域の基底岩層である。その上部には内山層と呼ばれている第三紀層が不整合に重なり相立以東の内山川两岸の山腹から頂上までの大部分を覆っている。この層からは分布地帯の数カ所から多量の海棲貝化石マコマ・クラミス・ルシナ等を産出している。荒船火山はこの第三紀層を貫いて噴出した火山であって、噴出物は長期に亘って広範囲に堆積しており妙義山麓一帯西上州にも分布していることから噴出中心は本宿付近が中心であろうと推定した学者もある。長野県側には南駒井沢から南へ平尾山周辺、志賀川内山川流域、田口雨川、佐久町抜井川北岸まで佐久平周辺山地一帯に分布する溶結凝灰岩は全て荒船火山の噴出に基く熱火山灰の再溶融し固結したものであると考えら



第2図 長峯古墳群遠景（西方より）

れ古くから“佐久石”と呼ばれる採石され建築材・土木工事用・石造建造物・彫刻材として佐久地方では広く活用され他地方にも移出されている。この採石場は佐久平東縁の山裾には佐市東部安原・平賀・内山・臼田町田口・青沼・佐久町平林等に散在して多座することは小海線の車窓東側から眺められる。またこの岩石には柱状節理の発達が美事に見られ、浸食風化の結果奇岩絶景を形成している所も多く、その代表が内山峡である。内山峡には長峯附近から相立部落近辺では内山川两岸には蓬来岩・屏風岩・だんご岩・ローソク岩・行人岩・お姫岩などと名づけられた大規模の奇石が見られ、信州那馬渓と称されている。これに似た風景が志賀駒込・香坂閣御流山付近にもある。

荒船火山は活動の最末期に塩基性の強い岩漿を流出して溶結凝灰岩の上部を10cm内外の厚さで被った。これが荒船玄武岩で現在山嶺尾根の最上部表面に分布している。この玄武岩は不規則な板状節理が頗るよく発達し平にはげる性質があり造園用敷石・野

畠の笠や台として近頃珍重されて
いる。学者は“うづまき石”と呼
んでいる。

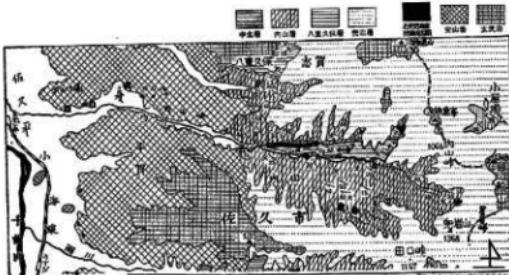
以上長峯附近的地質の概要を記
載したが次の地質図を参照され
たい。

長峯古墳群はこの溶結凝灰岩地
域斜面に立地し、古墳築造には
殆んど全てこの岩石が利用されて
いた。溶結凝灰岩は一部板状には
げの特性もあり厚く平にはげた大
塊は石室は石室天井・側壁に活用
されていた例が多く、石室実測図
にある径1m以上の大塊が全部
これにあたる。ただし石室内數
石・棺床敷パラスには内山川河床
礫を利用しているもののが多かった。
内山川上流の中生層や内山第三紀
層の凝灰岩・砂岩・礫岩・粘板岩
の河水に流磨された美しい礫が數
かれていた事は古代人の深い心づ
かいであろう。

南向の長峯の斜面は陽あたりも
よく斜野裾野には自然湧水も所々
に見られ、冬の寒冷な北風をさえ
ぎる山なみに守られ居住地としても古墳構築にも好適地であり大形石材もこの付近で容易に得られるためであろ
うか佐久平東縁部としてはここが最も古墳の密集地となっている。長峯古墳群の外にも大間古墳群・觀音堂古墳・
塚田古墳・西和田古墳群・月崎古墳群等々この地域に数十の古墳が見られる。何れも溶結凝灰岩による石室が破
壊されて風雨にさらされている姿は寂しい限りである。

第2表 内山峡の地質時代とその成り立ち(1971.白倉)

	第四紀	沖積層	内山川谷底部 扇状地	植作り	歴史時代	有史時代 古墳時代 弥生文化時代 新石器時代 縄文文化時代
新生代	洪積層	内山川河岸段丘	人類出現	旧石器時代		
第三紀	兜岩層 岩	凝灰岩・頁岩 アブ、蛭	広葉樹、蝶 アブ、蛭	荒船火山	(玄武岩 溶結凝灰岩)	
	八重久保層 頁岩	グリーンタフ 頁岩	クラミス	陸化		
	内山第三紀層 粘板岩	砂岩、礫岩 粘板岩	マコマ ルシナ	内山新層		
中生代 ジュラ紀	内山中生層	チャート 砂岩、粘 板岩	トリゴニカ 貝化石	深海		
古生代						



第3図 内山峡付近地形地質図

(白倉盛男)

2) 生物

長峯古墳群の立地は、荒船火山によって形成された、幾筋かの山麓のうちの志賀川と内山川に挟まれた平坦地に向て、馬蹄形に開かれた南斜面上の最深部に位置する。気候は冬期において北風を送ることと、太陽エネルギーを南斜面上にいっぱい浴びることから、酷寒の佐久地方においては、比較的暖かい場所である。長峯古墳群とその周辺に生息する生物を季節を追って記することにする。

三月下旬は雜木林の下のイチャク草、日溜りにオオイヌノフグリが咲き、クヌギの枝には住民のいないトクリバチの巣を見ることができ、まだ肌寒さを感じさせる時期である。

四月に入ると、氷河期からの生残りのルリタテハが古墳の天井石の上で羽根を休め、フキノトウ、ツクシ、オオイタドリ（スイバ）などが各所に散見できる。山麓周辺では黃金色のダンコウバイ（ジイシャ）、銀緑色のヤマネコヤナギが咲き、カラマツ、クヌギなどの生える雜木林は、一雨ごとに若緑の色を増すようになる。またシノダケの茂った藪からウグイスが鳴き始め、キジが飛び立った跡は、地膚が凹状になっていることから、砂浴びをしていたことが推察できる。下旬になると、クヌギの芽を食料にするマヒワの群れが早朝、數十羽、セイヨウタンボボに群がるモンシロチョウ、モンキチョウ、白い錦毛で覆われた銀緑色に輝くモモギ（モチグサ）の新芽などを見ることができ、やや小ぶりのキアゲハは春型の特徴である。また、長峯古墳の南側、現代版条里制の田の上には、ツバメが到来を始め、雜木林の周縁部、日当りの良い所にはヤマブキが咲き始める。畑や村落ではコウメ・ブンゴウメの花が咲き、農民の収穫を占うコブシが山にたくさん白い花をつける時期もある。

五月に入ると、墳丘疊下にシマヘビ・ヤマカガシ・ヒナタヘビ、枯れ草の積んである下にはジモグリなど冬眠から醒めたヘビ類が見られる。家に植えると火事になると言い伝えられているクサボケ（ジナシ）が朱色の花をつけ、第1号古墳脇のシダレザクラが満開になる。周囲に眼を転じると山は若葉色に変わり、ヤマザクラが灰桜色に、また、道端には小さな星形をしたホタルカズラが瑠璃色に咲いている。中旬に入ると山の中で4歳を迎える成虫になる日間近いハルゼミの幼虫、ヒダリマキマイマイの貝殻が腐殖土の中で見られた。五月晴れの暖かい日には、アカマツの木からハルゼミが群れをなして鳴き、また、南斜面のやや水はけの良い所には暗赤色の花をつけたヤマシャクヤクが二・三株ずつ散在している。下旬になると平坦部の水田では田植えの準備が始まり、やがて青田に変って行く。林の周縁では葉を焦げ茶の毛で覆ったウグイスカズラの小さな薄紅色の花が下を向いて咲き、樹木に食い込み、からまりつく五葉掌状のアケビ、三葉掌状のミツバアケビが雄雌異花の淡紫色と黒紫色の小さな花をつけ、右巻きに巻つく特性をもつヤマフジの房状に垂れさがって咲く花は甘い香りを漂わせ、その蜜を求めてクマバチなども現われる。恐ろしそうな名だが人を襲うことのない性質の種やかなハチである。

六月に入ると、梅雨期に入る。湿った大気が荒船山塊に当たり、時々、内山峰に露がたちこめる。そしてどんよりと曇ると、周囲の環境により保護色に変わらるアマガエルが鳴き始める。こういった雨天に変わりそうな状況下での佐久地方では、雲が「平尾冠、浅間帶」の場合、雨が止むという古来からの言い伝えがあり、これにより天気を知ることができる。中旬になると、春型のキアゲハが産卵した幼虫は、ヤマゼリ、シシウドの葉を食べて5歳を越え、浅緑を地に黒色の中に朱の点を持ったストライプ模様で、触れるといやな臭いと共に、鮮やかな黄色い触角をだす。下旬に至ると、昆虫の活動が活発化し、クヌギの樹液も甘ずっぱい臭いを発散させ始める。日当たりの良い道端は、ハルジオン（鉄道草）、シロツメグサ、ムラサキフメクサなどの帰化植物が優勢となる。帰化植物が群生する中では昔の良食として利用された飼牛の飼であるクサフジも赤紫色の花を上に向けて咲いており、その傍ではベニヒジミ（蝶）、ミツバチも目立つようになる。

七月は落雷が頻繁におきる時期である。俗に当地方では「浅間雷り音ばかり、荒船雷り氣をつけろ、蓼科雷り鳴の土産より早い」といわれ、荒船山からきた雷には注意しなければならない。昔の人達が稻妻の光が稻の穗になるとえたように、自然の現象に親近感を持ち、美しい言葉で呼ぶ姿勢は尊重されて然るべきである。日射し

の強い晴れた日には六月より昆虫の活動が活発になり、クヌギの樹液にむらがって来る。ハチ類では、頭の非常に発達した黄色と黒色のタイガーモードのオオスズメバチ、これよりやや小ぶりのモスズメバチ、全体に黄色味の強いキイロスズメバチ、これらスズメバチは同種の仲間同志でも、他の種が来ると追い払う。その間隙をくぐって小型のクロスズメバチ(ジバチ)もやって来るが大型のスズメバチに駆散らされる。チョウ類では、ルリタテハ、シオドシチョウ、エルタテハ、オオムラサキ、コムラサキ、スミナガシ、クロヒカゲチョウ等タテハチョウ科のチョウが増える。コムラサキの雄は光線によって紫色に輝き、第5・7号古墳の周りでも良く見られた。近くに食草のヤナギが群生している可能性が大きい。国譜として知られているオオムラサキは、クヌギの木の高い所に座を占める特徴があり、侵入して来た昆蟲類を激しい羽音を立てて追撃する性の激しい一面をもつ。雌は腹部が大人の小指程にふっくらと肥り、雄よりも一回り大きく、黒ずんだ色で七月中旬頃にクヌギの木に姿を見せ始める。飛行が速いスミナガシも繩張り領域に侵入すると昆蟲類を矢のように追飛し、再び元の木に戻る。この他、ハネカクシ科のシラオビンシデムシモドキ、コガネムシ科のアオカナブン、ムラサキツヤハナムグリ、カブト虫などがやって来る。カブト虫は俗称「弁慶」と言われているカブトムシや、「義経」と呼んでいる雄のミヤマクワガタ(ミミツカブト)などが見られ、ノコギリクワガタは幼虫時の成育により非常に個体差が生じ、同一のものとは思われない変化を示す。

中旬になると、原野にはノアザミ、ヤブカンゾウ、北アメリカからの帰化植物オオマツヨイグサ、ヒメジョンが咲いており、半日陰の所々には朝靄を葉に受け緑色の輝きを持って咲くツユクサが群生する。道端にはキイチゴの実が小さな核果を球形に集め橙黄色に熟していた。この頃になるとトンボが一気に増え始める。赤色化のまだ始まらないアカネの仲間、ミヤマアカネ(オチャガラトンボ)、ナツアカネ(タダトンボ)、ノシメトンボ(クルマトンボ)、ヒメアカネ等が主体である。複眼は翠玉色、体色は黒地に黄紋の入る日本最大のトンボ、オニヤソマも現われる。オニヤソマは飛行するために、すべてのわだを省いたスマートなプロポーションをもつ。特に中・近世を中心とした時代には後退しない勝軍虫として武士に好まれ、日本書記では日本をトンボの飛びかう鳥と記載され、原始・亦生時代の銅鐸にも图案として用いられ、日本の古文化と密接な関係をもってきた。また、今日でも益虫として慣れ親しまれている。

下旬に入ると秋の七草が点々と咲き始める。クズが草木を覆い甘い香りを放ち、赤紫色の花を、ワレモコが暗赤色の獨得の花を、カクラナデヒコが頗りない薄紅色の花をつけ、スキ(カヤ、オバナ)の茎が天に向って伸びている。ヤマハギの小さな赤紫色の花がボツボツと咲き始めた雑木林の木影ではオオバキボシの花が淡い紫色で咲き、クリガネニンジンの花が小さな薄青紫色で輪になり、シャンデリアの様になって咲いている。アブラゼミやミンミンゼミが盛んに鳴き続けるのもこの時期である。

以上、約半年間の調査の中で、動物が昆蟲類(蝶・トンボ・甲虫類・ハチ類・セミ類等)39種、両生類2種、鳥類7種、爬虫類4種、その他が見られ、植物では47種余等の生物が多種多様な営みを繰り広げる状況が観察できた。

発掘調査を実施した三月から七月までの季節を追って長峯古墳群とその周辺地域の生物を記してきた。古代、これらの古墳群が構築された当時は、今よりも多くの様々な動植物の営みが繰り広げられたと考えられるが、緑の生育範囲が急速に縮小されつつある現代にあって、比較的恵まれた自然環境にある長峯古墳群と周辺地域におけるこれらの記録は、古墳群築造当時の景観を復元する有効な手掛りになることが考えられる。

(羽田)

第2節 長峯古墳群の歴史的環境

長峯古墳群は、佐久市内山地区に所在し、群馬県界の熊倉峠より西方に伸びる尾根が内山峡谷入口付近の佐久平に近い南向き斜面に位置する。標高720~735mを測る。

佐久市教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査によると、長峯古墳群を中心に約2.5km内外の湯川左岸台地・志賀川沿岸・内山川沿岸には102遺跡を数える埋蔵文化財の濃密分布地域である。

本古墳群（1）の北部、湯川左岸台地には蛇塚B遺跡群（3）が所在し、昭和54年度新子田蛇塚B遺跡第1次発掘調査により、平安時代国分期の堅穴住居址5棟が検出され、土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄器・石器等が出土したが、大半は土師器でしかも供膳形態の杯形土器が占めていた。昭和58年度第2次発掘調査では、平安時代堅穴住居址16棟、昭和59年度第3次発掘調査で、平安時代堅穴住居址2棟を検出している。隣接する蛇塚A遺跡（2）からは平安時代の土器片が多量に表採されている。野馬鹿遺跡（4）は昭和56年度発掘調査により弥生時代堅穴住居址2棟を検出し、弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代等の土器が出土している。また、野馬鹿古墳（5）も所在している。猫保遺跡群（6）は、昭和60年度西御堂遺跡発掘調査により土坑1基が検出されたが、遺構よりの遺物が全くなく、その性格及び所産期は不明である。筒畠遺跡群（7）は、昭和60年度筒畠遺跡発掘調査により弥生時代終末期～古墳時代初頭期の堅穴住居址2棟・時代不明の溝状遺構2基・9世紀代の土坑1基を検出している。堅穴住居址から出土した土器のなかには弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器編年の上で貴重な資料と思われる高杯が出土している。また、土坑より獸骨が土師器・須恵器とともに出土した。獸骨は馬・牛の骨で、1歳前後の馬の上顎骨、12歳前後の馬の上顎骨、10歳前後の馬の下顎骨、13~14歳前後の馬の上顎骨、15~18歳前後の馬の下顎骨、6歳位の牛の上顎下顎骨・中足骨・距骨・頭蓋骨・踵骨・足根骨等がばらばらの状態で出土している。北東には、玄室に側室のある安原大塚古墳（8）も存在する。すぐ隣りの宿上屋敷遺跡（9）は、昭和60年度の発掘調査により、古墳時代前期堅穴住居址2棟・後期堅穴住居址1棟・平安時代堅穴住居址3棟・特殊遺構3基・土坑9基を検出し、織文土器・弥生土器・土師器の壺・甕・台付甕・杯・高台付甕・高杯・鉢・器台・羽釜・須恵器の甕・杯・灰釉陶器の皿・中世以降の陶器・磁器・石鎧・打製石斧・砥石・勾玉等を出土している。隣接する下川原・光明寺遺跡（10）は昭和60年度の発掘調査により、中世の堅穴状遺構1基・溝状遺構3基・近現代の井戸址2基・土坑4基を検出し、須恵器・土師器・土師質土器等の破片・石器・金属器等を出土している。東方には入大久保古墳群（11）も存在する。高師町遺跡（15）は、昭和61年度に発掘調査が実施され、平安時代堅穴状遺構1基・特殊遺構2基・時期不明柱穴址1基・土坑3基・近世～近代の溝状遺構2基を検出し、平安時代土師器の甕・杯・弥生時代中期の土器片・陶磁器・打製石斧を出土している。

志賀川沿岸には、戸坂遺跡（13）が所在し、昭和46年度発掘調査により、弥生時代堅穴住居址1棟・平安時代堅穴住居址4棟・掘立柱遺構1基を検出し、弥生土器・土師器・須恵器・工具状石器等が出土している。また、昭和59年度発掘調査で、縄文時代堅穴住居址1棟・平安時代堅穴住居址4棟を検出している。和田上遺跡群（17）は、明治年間に坪井正五郎氏外の探査により約4haの広範囲より、縄文時代下島式・勝坂式・加曾利E式・掘之内式・加曾利B式土器・掘之内式土偶・土鍬・石鎧・打製石斧・磨製石斧・石匙・敲石・凹石・石皿・石鍬・石棒・滑石製垂玉・弥生時代の百瀬式・箱清水式土器・磨製石鎧・太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石庵丁・勾玉・土師器等で前期甕・甌・後期甕・須恵器等が多量に出土していることは周知のとおりである。隣接する和田上南遺跡（17）は昭和54年度の発掘調査により、弥生時代堅穴住居址5棟・平安時代堅穴住居址2棟を検出している。また、和田上古墳（18）も存在している。西方に所在する深堀遺跡群（19）は、昭和40年度に深堀遺跡の発掘調査が行われ、弥生時代中期堅穴住居址2棟を検出し、小型壺・甕・甌・深鉢・高杯等の土器・打製石器・磨製石器・石庵丁等が出土している。



第4図 周辺遺跡分布図（1：25,000 國土地理院地形図による）

内山川流域には、本古墳西方1.5～2kmに樋村遺跡（36）が存在し、昭和57・58年度の発掘調査により、弥生時代中期（栗林式比定）竪穴住居址5棟・後期（吉田式比定）竪穴住居址17棟、環濠と考えられる溝2基、その他の溝状遺構3基、古墳時代後期竪穴住居址233棟、奈良時代竪穴住居址7棟、平安時代竪穴住居址7棟、竪穴状遺構2基、掘立柱建物址19基、特殊遺構3基等の大集落址が検出され、多量の鬼高期の土器類、白玉・小玉・管玉・切子玉・勾玉・丸玉等の玉類も数多く出土した。石材は滑石が主体を占めるが、管玉・切子玉は碧玉岩を素材とし、丸玉は土製品が多く、全体の25.6%の住居址から出土している。尚、石器類も多數出土した。

その他周辺遺跡分布図に示すごとく、未発掘調査遺跡が数多く分布している。

本古墳群に接する周辺には、大間古墳群（27）7基・觀音堂古墳（28）・西和田古墳群（30）3基・月崎古墳群（31）19基・東施石古墳群（32）5基・大日山古墳（20）・屋敷古墳群（35）2基・後家山古墳（33）・東久保古墳群（34）5基・下屋敷古墳・上屋敷古墳・萩元古墳・松井日影古墳群4基・松井東古墳（29）等数多くの古

第3表 周辺遺跡一覧表

No	佐分No	遺跡名	所 在 地	立地	時 代					備 考	
					縄	古	新	平	中		
1	368	長峯古墳群	内山字長峯	山麓		○				本調査	
2	119	蛇塚A遺跡群	安原字蛇塚、西大久保・北御原・南御原	台地				○			
3	120	蛇塚B遺跡群	新子田字蛇塚、内池・北野馬久保・野鳥久保	台地				○		昭和54年度・58年度発掘調査	
4	122	野馬塚古墳群	東久保字野馬塚	台地	○	○	○	○	○	昭和56年度発掘調査	
5	125	野馬塚古墳	東久保字野馬塚	台地		○					
6	128	東久保遺跡群	安原字鶴塚・西御原	台地				○		昭和60年度発掘調査	
7	130	鶴塚遺跡群	安原字鶴塚・池畠・下池 新子田字田端	台地	○			○		昭和60年度発掘調査	
8	141	安原大塚古墳	安原字城前	台地		○					
9	133	宿上屋敷遺跡	安原字宿上屋敷	台地			○			昭和60年度発掘調査	
10	135	下川原・光明寺遺跡	安原字下川原・光明寺	傾斜地				○		昭和60年度発掘調査	
11	140	入大久保古墳群	喜板字入大久保	山腹		○				6基	
12	276	瓦神古墳群	新子田字氏神	山麓		○				2基	
13	263	戸坂遺跡群	戸坂字平坂、可見0・5、久昌・家後・草谷、道場、郡、反田、供養堂	段丘	○	○	○	○	○	昭和46年度・59年度発掘調査	
14	552	四つ塚古墳	新子田字四つ塚	台地		○					
15	129	高崎町遺跡群	新子田字高崎町・稚荷反り・松ヶ池・松・池下	台地				○		昭和61年度発掘調査	
16	121	東内池遺跡	新子田字東内池	台地				○		昭和60年度発掘調査	
17	252	和田上遺跡群	鷹戸字和田上・鷹戸 新子田字御荷神・下原	台地	○	○	○	○	○	昭和54年度発掘調査	
18	261	和田上古墳	鷹戸字和田上	台地			○				
19	255	深堀遺跡群	瀬戸字深堀・堀坂・浅堀・下原・西原・弘上・八反田上・櫻山・笠宮	台地	○	○	○	○	○	昭和40年度発掘調査	
20	351	大丸山古墳	瀬戸字中条平	山腹		○					
21	258	中条峯古墳群	瀬戸字中条峯	台地			○			7基	
22	262	寄古塚	志賀字寄山	台地			○				
23	292	小曾塚古墳群	志賀字下小曾	山麓		○				3基	
24	293	本霧古墳群	志賀字本霧下北側	台地		○				2基	
25	294	鶴巣氏古墳	志賀字鶴巣氏	台地		○					
26	277	笠石塚古墳	志賀字笠石	台地		○					
27	369	大間古墳群	内山字大間	山腹		○				7基	
28	370	鶴巣當古墳	内山字坪ノ内	山麓		○					
29	448	松井東古墳	内山字松井東	台地		○					
30	367	西内田古墳群	内山字西和田	山腹		○				3基	
31	366	月崎古墳群	平賀字月崎	台地		○				19基	
32	365	東内石古墳群	平賀字東延石	台地		○				5基	
33	353	後山山古墳	平賀字後家山	山麓		○				昭和49年度発掘調査	
34	354	東久保古墳群	平賀字東久保・開戸田・後家山	台地		○				5基	
35	352	屋敷古墳群	瀬戸字屋敷	台地		○				2基	
36	344	鏡村遺跡群	平賀字鏡村・上吉田・山崎・翠田・後家	段丘	○	○	○	○		昭和57年度・58年度発掘調査	
No	佐分No	遺 跡 名	No	佐分No	遺 跡 名	No	佐分No	遺 跡 名	No	佐分No	遺 跡 名
37	127	戸坂敷遺跡群	54	336	中反遺跡群	71	269	志賀神明の木遺跡	88	362	内山香坂A遺跡
38	132	荒庭遺跡群	55	348	城山城跡	72	281	本郷上北側遺跡	89	361	内山安坂遺跡
39	139	南城跡	56	339	宮の橋遺跡	73	282	本郷上北側遺跡	90	360	大間遺跡
40	134	岩久保遺跡	57	338	南帝道遺跡	74	283	星谷形遺跡	91	359	坪の内遺跡
41	138	東久保遺跡	58	337	中条街遺跡	75	291	御源氏遺跡	92	440	松井東遺跡
42	137	鏡原平遺跡	59	257	中条塚遺跡	76	285	聖堂遺跡	93	358	東和田遺跡
43	265	池端遺跡	60	256	寄山遺跡群	77	286	下向遺跡	94	357	西和田遺跡
44	551	泡鳴遺跡	61	271	清水座遺跡	78	288	ボウガヤ遺跡	95	364	内櫛城跡
45	266	鏡内遺跡	62	272	匂曳遺跡	79	289	上向遺跡	96	342	東久保遺跡
46	264	新子田神明の木遺跡	63	273	上南和田遺跡	80	377	五本松城跡	97	340	宮田遺跡
47	275	鳥坂城跡	64	274	安坂遺跡	81	372	内山香坂B遺跡	98	341	後家山遺跡
48	545	浅井城跡	65	270	老毛在池遺跡	82	378	内山城跡	99	343	開戸田遺跡
49	267	家之翁城跡	66	268	石田遺跡	83	456	土井口遺跡	100	430	川原田遺跡
50	251	小泊遺跡	67	278	金井遺跡	84	374	寺澤遺跡	101	432	平賀中屋敷遺跡
51	253	和田遺跡	68	279	下小倉A遺跡	85	455	御室遺跡	102	356	長峯遺跡
52	250	馬鹿山遺跡群	69	280	下小倉B遺跡	86	373	城下遺跡群			
53	254	笠宮の宮遺跡	70	291	志賀貯跡	87	363	法被寺遺跡			

第4表 周辺古墳及び古墳群一覧表

古墳名	佐分名	所在地	立地	備考
長峯古墳群	368	内山字長峯6714、6608、6607、6624、6611-1、6582-2	7基	山麓 本調査 明治22年10月、直刀・小刀・耳環・銅鏡、 鐵劍・土師器・須恵器出土
大間古墳群	369	内山字大間6466、6457、6456、6431-1、6421-1	7基	山麓 明治22年9月、銅・鐵鏡・耳環・勾玉、 切子玉・丸玉出土
轟音堂古墳	370	内山字坪ノ内6744		山麓
塙田古墳	371	内山字塙田6909		
西和田古墳群	367	内山字西和田7606(?)、7500、7667	3基	山麓
月崎古墳群	366	平賀字月崎3933、3934	19基	〃
東姥石古墳群	365	平賀字東姥石3918-2、3927-1	5基	〃
大日山古墳	351	鶴戸字中条平749		〃
屋敷古墳群	352	鶴戸字屋敷1972-2、1976-3	2基	山麓
後家山古墳	353	平賀字後家山3000		〃 昭和49年度発掘調査、宅地により消滅
東久保古墳群	354	平賀字東久保3399、3290、 〃 開戸田3248-1、3119(?) 〃 後家山3139-2	5基	〃
下屋敷古墳	435	平賀字下屋敷5392		直刀・鉄・埴輪出土
上屋敷古墳	436	平賀字上屋敷5221		
萩元古墳	453	平賀字萩元4551		山麓
松井日影古墳群	449	内山字松井日影8106、8121 平賀字庵4283-1、4298	4基	山麓

墳が分布しているが、主に円墳で石室主体部は開口され、墳丘は崩壊し、石室の天井石・側壁石も露出し、或るいは天井石が取られたり、破壊が著しく原形を留めている古墳は稀となっている現状である。

南佐久郡の考古学的調査によると、大間古墳群の大間塚は明治22年小間沢太司氏外6名により発掘され、鉄1・
鐵鎌多数・勾玉6・切子玉1・丸玉2・耳環2が出土したとある。また、長峯古墳も明治22年前記7名にて発掘、
大刀1・小刀3・耳環2・銅鏡3等が出土したとされている。

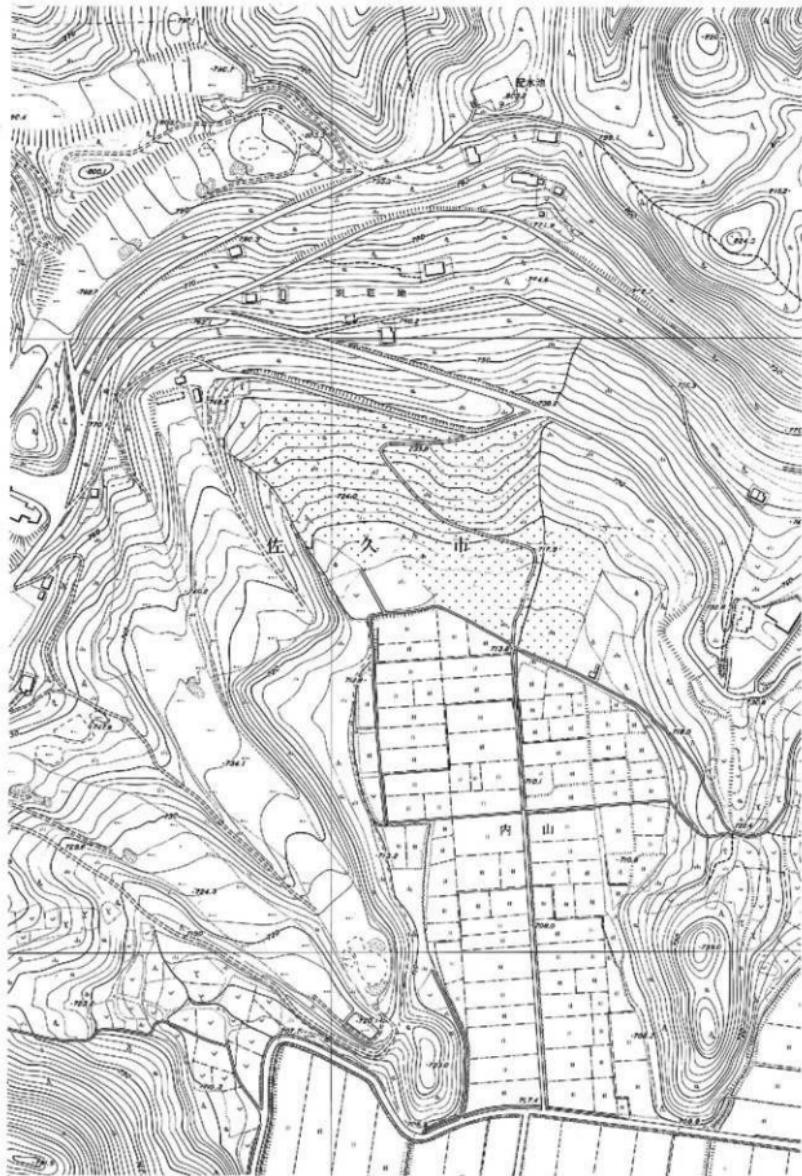
後家山古墳は、昭和49年度佐久市教育委員会が発掘調査を行った。調査前は破壊が著しく、石室主体部が露出し、天井石・奥壁も取り除かれていた。検出された石室主体部の規模は、石室全長4.8m、玄室及び羨道幅2.3m、
玄室の長さ2.9mを計り、石室プランは長方形で、主軸方位をN-25°-Eに置き、胴張りは見られず、袖石もなく玄室・羨道は同幅で大形な権石で境となっている。遺物は、盗掘を受けていたが、直刀1・切子玉8・勾玉5・
ガラス小玉11・鐵鎌12・直刀片5・刀子2・鐵片多数・土師器・須恵器等であった。玉類は古墳末期のもの
であった。また、信濃考古叢覧によると、平賀下屋敷古墳から直刀2・土師器・須恵器が出土し、屋敷古墳から
直刀・須恵器・形象埴輪等が出土している。

以上、長峯古墳群の立地・環境を概観してきたが、内山川に沿って上野国に通する古道も存在し、中世古城址等が多く、繩文時代から中・近世時代までの複合遺跡地帯であり、特に古墳時代の遺跡が濃密な地帯である。地方に王が割拠した時代には、それ等の仲間達の連合のあかしとしてパターンの同じ前方後円墳が造られたと言う説があるが、屯倉が設置されたのはその灼衝がくすぐれたからである。地方では、王の頭越しに大和に結びつくもののが出てくる。御名代を管理し、統率した刑部も佐久の豪族として勢力を得て来る。地方の村落有力グループにまで「ヤマト」の身分秩序が及んできた。こんな状勢の中で群集墳が造られるようになった。長峯古墳群もこうして造られた群集墳の1つである。

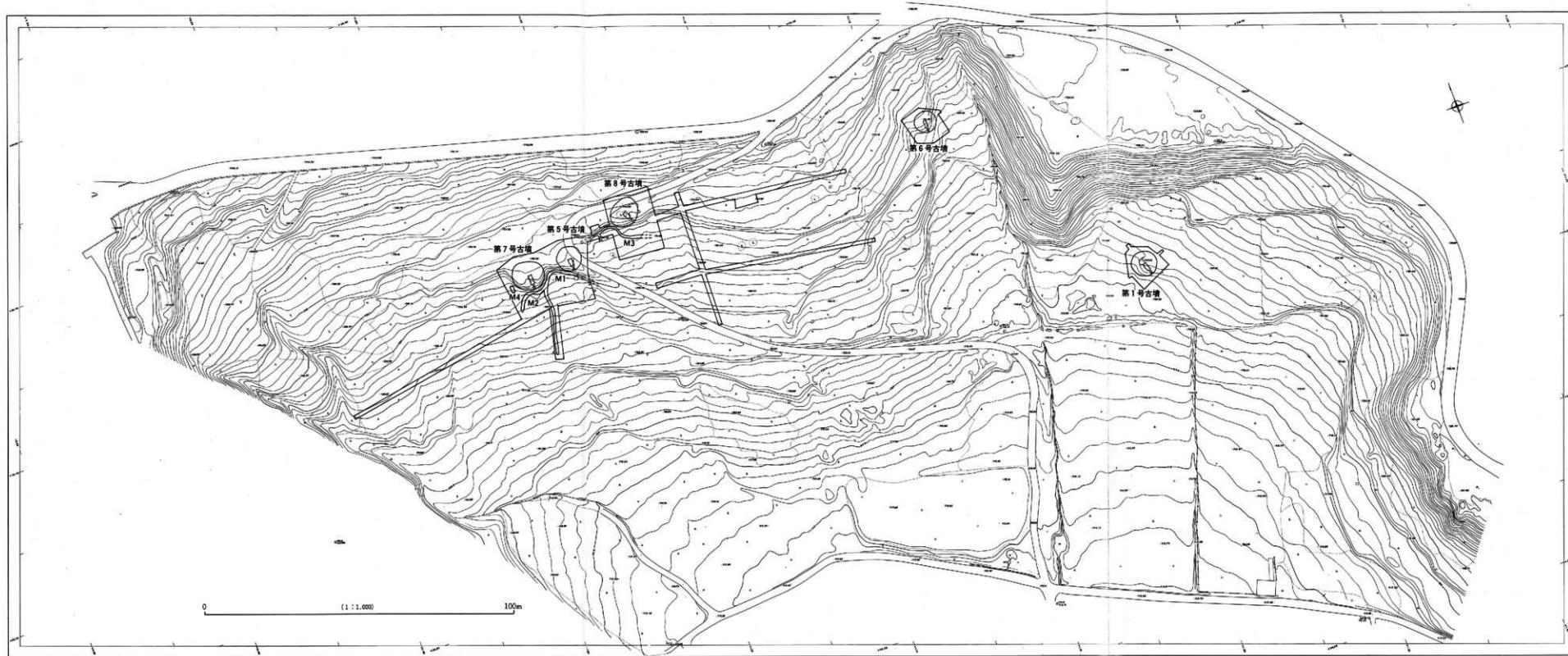
(黒岩 忠男)

第5図 周辺古墳及び古墳群分布図 (1 : 15,000)





第6図 長峯古墳群発掘調査対象地（1：4000 佐久市基本図29による）



第7図 長峯古墳群周辺地形図及び古墳分布図

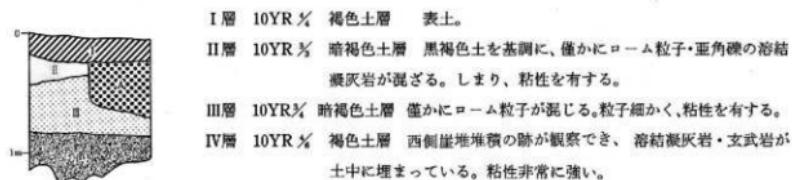
第III章 遺構と遺物

第1節 古墳と出土遺物

1) 第1号古墳

本古墳は南斜面上の平坦地に向けて馬蹄形に開かれた「U」字状の右側最深部に位置する。山地開墾のためと、畠地境界の土手及び柵等により、埴丘は旧状を留めず、外周の列石を一部残し、石室は崩落が著しく、天井石・奥壁・側壁等露出していた。

基本層序（第8図）



第8図 第1号古墳
基本層序模式図

本古墳において、西側に浅い沢があるため、東側と西側ではIV層において僅かな違いがある。古墳の構築面は第II層暗褐色土層面上を整地し構築したと考えられる。

外部構造（第9・10図、図版 四）

規模形態は、列石がほぼ円形に配置されていることから円墳と考えられ、主軸長9.10m、直交軸長7.94mを有し、残存埴丘高2.16mを測る。封土は5層に分かれる。構築順序は僅かな南傾斜面上のため、第8層（基本層序第II層）を振り込み、第7層黒褐色土を埋め整地し、石室奥壁・側壁に板状の石、埴丘外周に根石を設置、その後、石室裏込めに第2層黄褐色土と亜角礫の溶結凝灰岩（山石・割石）の混ざりを使用、埴丘外周根石の間にもやや小ぶりの亜角礫の溶結凝灰岩（山石）を設置、外周列石の裏込めには円・角礫の溶結凝灰岩（山石・割石・河原石）を使用。石室と外周列石を固定した後、第3・4層黒褐色土を間に盛っていったと現況では考えられ、葺石、周溝の痕跡は認められなかつた。

内部構造（第11図、図版 五）

石室・裏込め等が露出するなど崩壊が進んでいた。石室形式は横穴式両袖型玄門付石室で、主軸方位はN-15°-Wを指す。石室は第7層整地面上に構築されている。平面形は羽子板状を呈し、断面形は、上面が旧状を留めないものの箱状を呈したと推定される。石室の規模は、右側3.99m・左側3.88m、玄室長右側壁2.36m・左側壁2.33m、玄室幅は奥壁で1.37m・中央1.43m、玄室高は現状で1.58m、羨道長は1.65m、羨道幅は奥で1.22m・入口1.09m、羨道高は現状で0.54mを測る。奥壁から入口に25cmの比高差を有し、緩やかに傾斜している。奥壁には1枚の鏡石が用いられ、板状の溶結凝灰岩（山石）で大きさは144×170cmを側り、縦積みである。側壁は現状から推定して、玄室内は2段以上の石積みと考えられるが、現状では1段のみ残存し、板状の溶結凝灰岩を縦積みに用いていた。羨道部側壁は玄室内で用いた石より、やや小ぶりの溶結凝灰岩を3段以上の横積み、あるいは小口積みにしたと考えられる。棺床は玄武岩・溶結凝灰岩・砂岩・粘板岩・僅かに輝綠岩・頁岩・玢岩等の

手に収まる大きさの滑津川の河原石を平坦に敷きつめてある。その棺床敷石下には亜～角礫の溶結凝灰岩(山石・割石)を用いて粗い平坦面を作り、棺床は二重構造になっていた。天井石は溶結凝灰岩の山石が奥壁の上に接して1個残存し、大きさは184×156cmを測る。玄門には板状の溶結凝灰岩(山石)が立脚し、玄門から50cm前方に張り出し、溶結凝灰岩(割石)を用いた樋石が、玄室と羨道とを区切っていた。羨道底面は棺床敷石下の状態より粗い平坦面を亜～角礫の溶結凝灰岩を用いて作っていた。

閉塞方法は、以前本古墳が畠地の境界上に位置していたため破壊を受け、さらに周囲に散在している礫が投げ込まれており、旧状を留めないが、礫による積み込みと考えられる。

玄室内セクションは2層に分割でき、第1層は盜掘時と山地開墾の折の跡の積み込みと考えられ、黒褐色土と礫の混ざり、第2層は黒褐色土主体で、僅かに円～亜角礫の握り拳大の石の混ざりであった。

遺物(第12～14図、図版五・十七)

石室内より、人骨・獸骨・耳環・臼玉・刀子等が出土した。

耳環13-1、刀子14-3は玄室内右袖石コーナー付近棺床面上より、2個体の頭蓋骨No.11・20は玄室内右袖石コーナーの右側壁に接し、棺床面より21～25cm浮いた状態で検出された。

副葬品としての遺物は盜掘により極めて少なく、耳環13-1は外径3cm、内径1.45cmのφ0.7×0.8cmの楕円形の鋼の延棒に銀の含有量の多いアマルガム法によるめっきで、重さ22.4gを測る。刀子14-3は刃部が残存しており、残存長4cm、残存幅1.1cmを測る刃刀である。臼玉13-2はφ1.1cmの円形を呈し、厚さ0.5cmを測り、中央にφ2.5mmの穿孔を有し、石質は風化が著しく不明である。

人骨・獸骨について、本古墳より馬の下顎骨No.12⁽¹⁾・13⁽²⁾と、2個体分の人の頭蓋骨(No.11・20)・大腿骨・上腕骨等、さらに別個体の人骨1個体(No.21・22・23)の計3個体の人骨が検出された。

馬の下顎骨No.12・13については玄室内セクション第2層上面で検出され、棺床面より15～23cm浮いた状態で、2個体の人骨とほぼ同レベルである。第2～4臼歯が残存し、乳歯が残っていることから、1～2歳の馬の下顎骨と考えられよう。詳細は、付編「長野県佐久市長峯古墳群出土の馬歯・馬骨」を参照されたい。

頭蓋骨No.11・20は玄室内セクション第1・2層境目付近、右袖石より25cm離れ、玄室右側壁に接して検出され、他の人骨もほぼ同レベルで玄室中央から南半分に集中し、頭蓋骨No.11は羨道方向、No.20は奥壁方向と向きが相反していた。No.5・7・8・9は頭蓋骨No.11に帰属し、No.7の右大腿骨断面に突起があることから繩文人的形質を受け継いだ骨であり、頭蓋骨の形状から女性であることが推定された。No.14・17・18は頭蓋骨No.20に帰属し、No.17の大腿骨、No.18の上腕骨が太く、頭蓋骨の形状から男性であると推定された。No.20の個体は棺床面上より20～30cm上のところに集中し、No.11の個体は棺床面上より20～50cm上の位置で検出され、No.20の個体の上にNo.11の個体が重なった状態で葬られたことが看取できる。またNo.21・22・23は玄室左側壁棺床面に接して検出された。No.22は大腿骨と考えられよう。

また、No.20・21・23の個体の埋葬の後、No.20・No.11の個体が追葬されたと考えられ、尚、No.20・No.11の2個体は合葬された可能性もある。以上本古墳の所産期については、時期を決定する遺物の出土がなく、1枚の鏡石を奥壁に使用する横穴式石室を新しい要素とするならば7世紀後半と考えられよう。(羽田)

註(1) 付編 小野善典 「長峯古墳群第1・7号古墳出土耳環のX線マイクロアナライザーによる定性分析」 参照

註(2) 付編 宮崎重雄 「長野県佐久市長峯古墳群出土の馬歯・馬骨」 参照

註(3) 付編 藤本岩太郎 「佐久市長峯古墳群第1号古墳出土人骨について」 参照

註(4) 佐久市教育委員会 1972 「佐久市岩村田東一木前古墳緊急発掘調査報告」

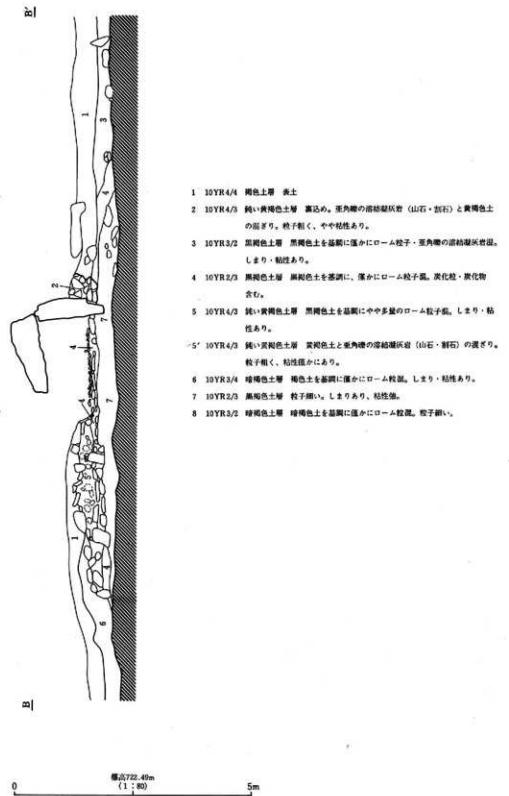
竹内 哲・土屋長久氏により、「側壁、奥壁の鏡石等、1枚の比較的大きな板状石を以ての構築技法は、美術的には古墳終末期に位置している」とされている。

註(5) 小林秀夫氏の御教示による。

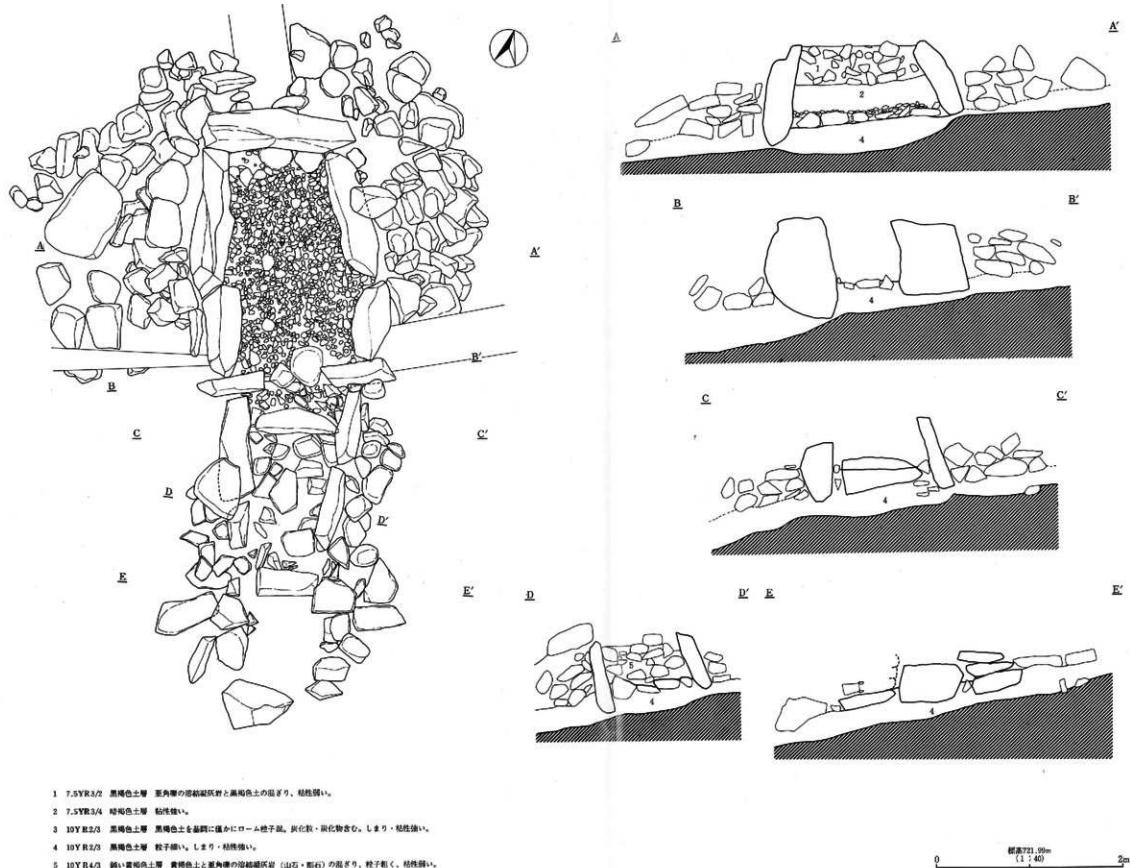


第9図 第1号古墳横丘実測図

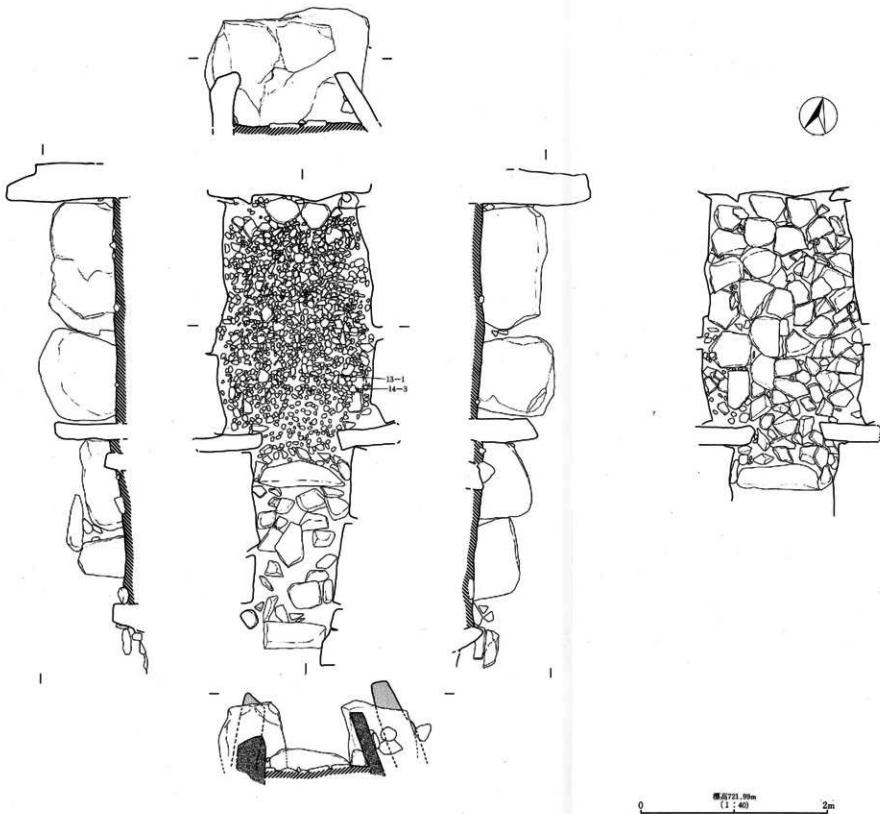
-17-



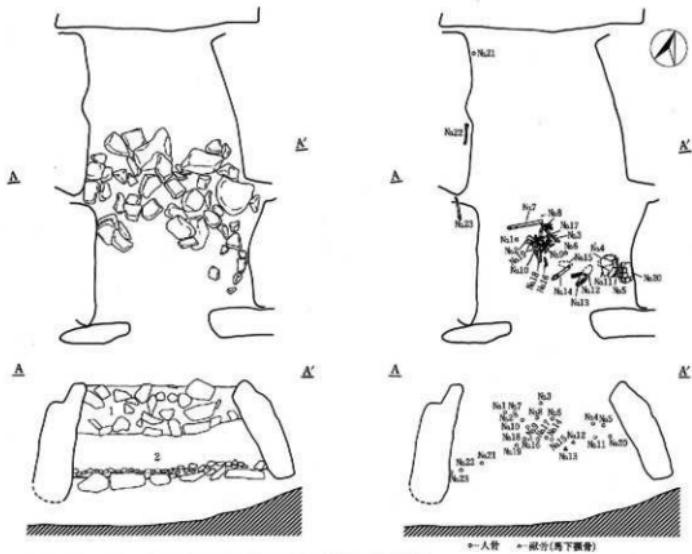
-18-



第10図 第1号古墳石室及び溝込め実測図



第11図 第1号古墳石室裏開図

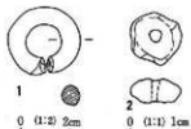


1 7.5YR 3/2 黒褐色土層 南側の詰積凝灰岩(山石、斜石)と無色土の混、粘性強い。

2 7.5YR 3/4 棕褐色土層 墓底から底、粘性強い。

第12図 第1号古墳石室内人骨及び歯骨分布図

標高721.90m
(1:40)
1m



第13図 第1号古墳出土耳環・玉類実測図



第14図 第1号古墳出土刀子実測図

2) 第6号古墳

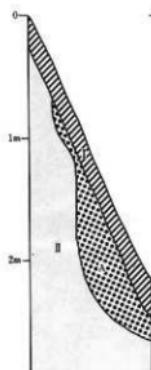
本古墳は、馬蹄形に開かれた「U」字状の南傾斜面中央右側最深部に位置しており、標高は約731mを測る。山地開墾・盜掘等のため墳丘は旧状を留めず、天井石・石室が露出し、石室内はわずかに空間がみられるものの径5~20cmの礫を多量に含む土砂が約1m堆積した状態であった。また東側に向って傾斜し、約2mの比高差をもって小さな沢が存在している。そのため北側と西側は墳丘とほぼ同高であり、本古墳はその傾斜地に構築されたものである。

基本層序（第15図）

I層 10YR 4/4 褐色土層 東側に向って傾斜し、小さな沢がつくられている。粘性非常に強い。

II層 10YR 4/6 褐色土層 粒子細かく、粘性非常に強い。

以上、本古墳は基本層序第II層褐色土層の傾斜面を掘り込んで、埋め土を行い平坦にした後、石室及び墳丘を



第15図 第6号古墳
基本層序模式図

-12m 構築したものと考えられる。

外部構造（第16図、図版 六・七）

本古墳の形態は、外周の列石が円形に配置されていることから円墳と考えられ、規模は主軸長6.56m、直交軸長7.50m、残存高1.7mを測り、他の4基と比較するとやや小型である。南側・東側に向かう傾斜地に位置しているため、構築は基本層序第II層褐色土層を掘り込み、第5・6層を埋め戻し、平坦に整地することから行われ、この上に石室の壁体及び裏込め等が設けられた。墳丘の構築順序は整地された平坦面上に石室の壁体となる石材を設置し、石室外側に裏込めの砾を詰め、幅約50~60cmのところに40~60cm大の溶結凝灰岩を用いて裏込め被覆の石組みが設けられ裏込めを覆っていた。この石組みは石室の左壁側はほぼ垂直に積み上げ、右壁側は約70°の傾斜で石室側に傾いている。

封土は径2~20cm大の円錐作用を受けた砾（溶結凝灰岩・玄武岩）を詰めた第2層とにぶい黄褐色土の第4層の2層に分割され、さらにその上に約20cmの厚さで表土（第1層）が堆積している。第2層は右壁側で約60cm、左壁側で約40cmの厚さでみられ、積石塚的な形態を示している。周邊は認められなかった。

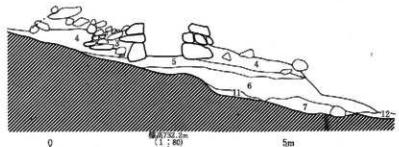
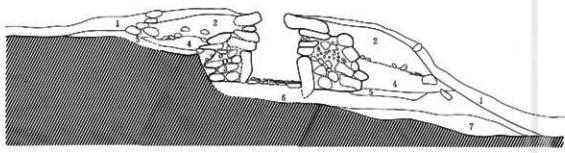
内部構造（第17・18図、図版 六・七）

石室は溶結凝灰岩の自然石を使用した横穴式両袖形玄門付石室で、主軸方位はN-4°-Wを示す。現状は石室が露出し、天井石の一部を欠いているが、壁体は比較的良好に残っている。壁体はローム層上に約40cmの厚さで埋土された第6層上に構築されており、平面形は羽子板状で、断面形は箱状を呈する。規模は、石室長は右側で3.00m、左側で3.35m、玄室長は右壁が1.96m、左壁が2.22mと左壁が若干長い。玄室幅は奥壁部分で1.30m、中央部で1.21m、残存高は1.59mを測る。羨道部は幅0.84m、残存長は0.78mを測る。奥壁は大石2石を縦積みにし、上段の石材は内側に45°傾いている。左右壁は根石に各々2枚の大石を用い、特に奥壁側のものは奥壁に匹敵するものが用いられているが、上半は小ぶりの石材を用い、2~3段を横積み、4段目を小口積みにし、壁面全体を10°前後内傾させている。羨道側壁は石材を横積みに用い、右壁で3段、左壁で2段残存している。棺床面は第6層上に並べて溶結凝灰岩を敷いて粗い平坦面をつくり、さらに砂岩・玄武岩等の河原石を平坦に敷きつめて構成している。玄室と羨道は板状の樋石によって区画され、玄門は柱状の溶結凝灰岩が立脚し、その上に同質の樋石が架設されている。天井石は樋石の上に180×110cmの同質の大石が残存している。

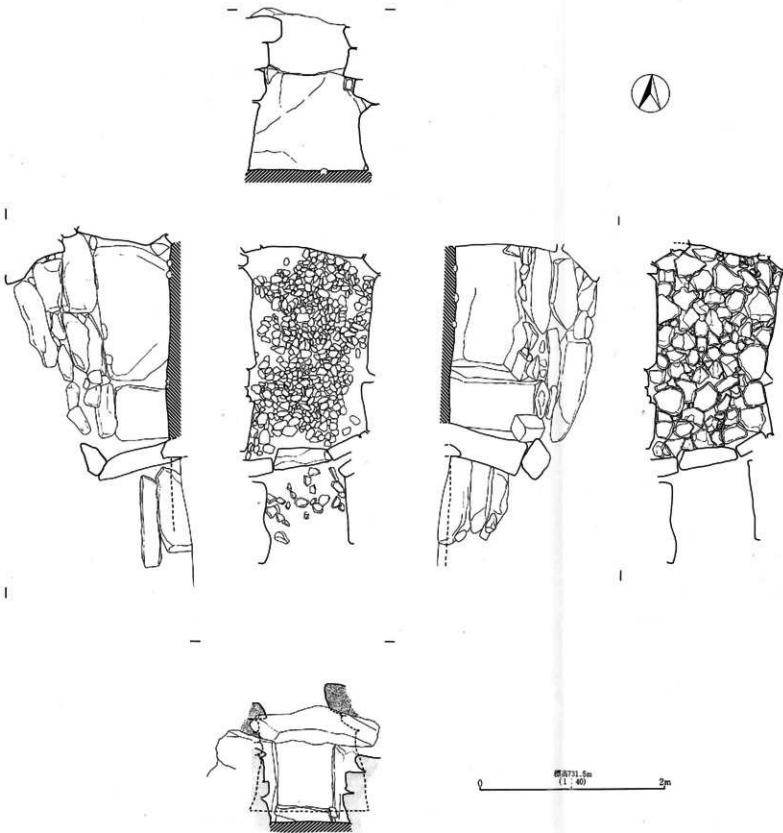
遺物（第19~22図、図版 七・十七・十八）

本古墳の出土遺物には、須恵器・直刀及び刀装具・刀子があり、須恵器の器種には、長頸壺・杯がある。20-1は、須恵器長頸壺の颈部片で、玄室内棺床上及び墳丘IV区より出土した。颈部中位と、肩部との接合部に1条の沈線が廻り、調整は内外面ともにロクロヨコナデが施される。自然釉の付着が観察され、色調は灰白色を呈しており、美濃系の可能性も考えられる。須恵器杯は、羨道部右壁直下と墳丘IV区より3点出土した。20-2・3は、底部周縁部から中央に向けてやや突出する丸味を帯びた平底を呈し、回転ヘラキリの後、ナデ調整が施される。20-4は平底で、底部はヘラケズりが施される。

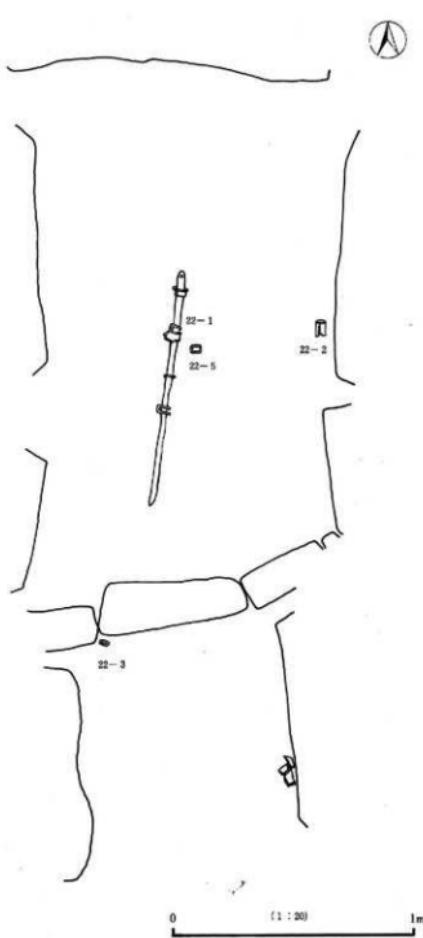
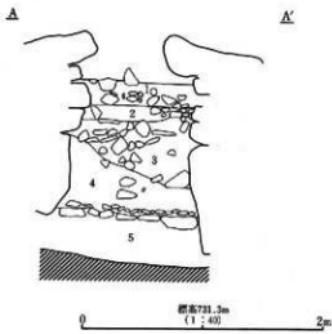
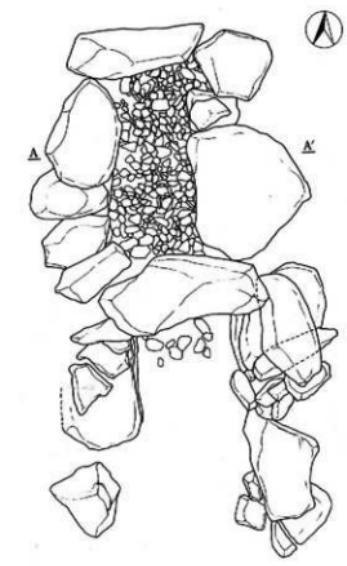
直刀(22-1)は玄室内棺床上のはば中央より、鋒を玄門側、刃部を右壁側に向けた状態で出土した。全長100.3cm、刃部長87.3cm、刃部最大幅3.3cm、茎部長13.0cm、茎部幅2.3cm、峰厚0.9cmを測り、今まで佐久市内において出土した直刀のうち最長のものである。遺存状態は良く、鈎・紐・銅製の鞘元金具・資金具・足金具を装着している。刀身は鏽をもたない平造りで、刃闊・背闊を有し、茎頭から1.9cmの位置に径3mmの目釘穴を有する。鈎は鉄製無窓倒卵形の鈎で、5.8×3.0cm、厚さ0.5cmを測る。銅製の鞘元金具・資金具・足金具は、鍍金の痕跡を残さず、銀錯の付着が著しい。足金具は2個存在し、その間に、4.7×2.05cmの長梢円形を呈する資金具が1個存在する。



第16図 第6号古墳頂丘実測図



第17圖 第6號古墳石室展開圖



- 1 7.SYR2/2 黒褐色土層 稲木の根が頃り、径5~20cmの円錐~亜角錐の溶結凝灰岩(山石・鉄石)混。炭化物含む。粘性・しまりあり。
- 2 7.SYR4/3 暗褐色土層 暗褐色土と径5~20cmの円錐~亜角錐の溶結凝灰岩(山石・鉄石)混。炭化物少量含む。粘性・しまりあり。
- 3 7.SYR3/4 暗褐色土層 径5~20cmの円錐~亜角錐の溶結凝灰岩(山石・鉄石)混。粘性弱い。
- 4 7.SYR3/4 暗褐色土層 暗褐色土を基盤に、わずかに円錐~亜角錐の溶結凝灰岩(山石・鉄石)混。炭化物・炭化物多量に含む。粘性・しまりあり。
- 5 7.SYR4/3 黄褐色土層 暗褐色土主体。粘性あり、堅くしまる。

第18図 第6号古墳石室実測図

第19図 第6号古墳石室内遺物分布図

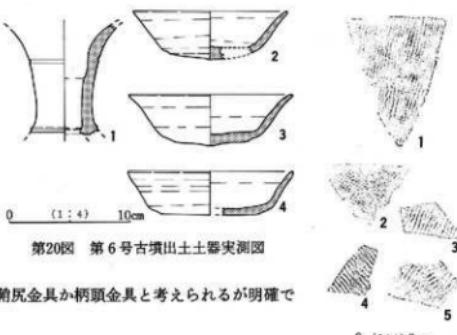
22-3の鉢は墓道内左側玄門下より出土し、 $5.3 \times 4.0\text{cm}$ 、厚さ 0.4cm を測る鉄製無底倒卵形の鉢である。

22-4は銅製の責金具で、玄室内棺床直下より出土した。緑銅の付着が著しく、 $4.4 \times 1.7\text{cm}$ の長橢円形を呈する。

22-2は玄室内右壁中央下より出土した。 $3.7 \times 2.1\text{cm}$ の長橢円形を呈し、幅 4.0cm を測る鉄製の把元金具と考えられ、また、22-5は玄室内中央、22-1の右側より出土し、22-1に装着されていた銅製の輪軸金具か柄頭金具と考えられるが明確ではない。

刀子1(22-6)は、玄室内棺床直下より1点出土した。刃部・茎部の先端を欠損しており、残存長 5.9cm 、刃部残存長 3.6cm 、茎部残存長 2.3cm 、刃部最大幅 1.1cm 、茎部幅 0.7cm 、峰厚 0.3cm を測り、背闊を有する。

以上、側壁・奥壁等、壁体に大きな板状石を用いる構築技法は、築造的には古墳終末期に位置するものであるとされ、また、底部切り離し手法が回転ヘラキリによる須恵器杯(20-2・3)がみられることから、本古墳は、7世紀代から8世紀前半まで何らかの形で使用されたものと考えられる。(三石)

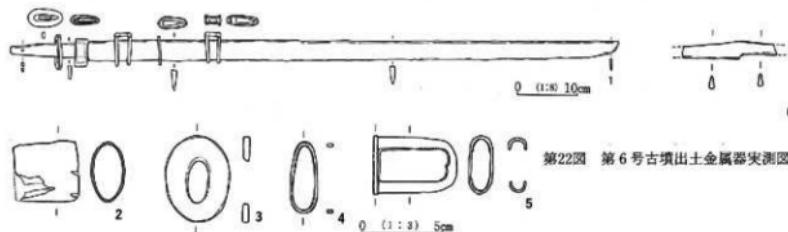


第20図 第6号古墳出土土器実測図

第21図 第6号古墳出土土器拓影図

第5表 第6号古墳出土土器観察表

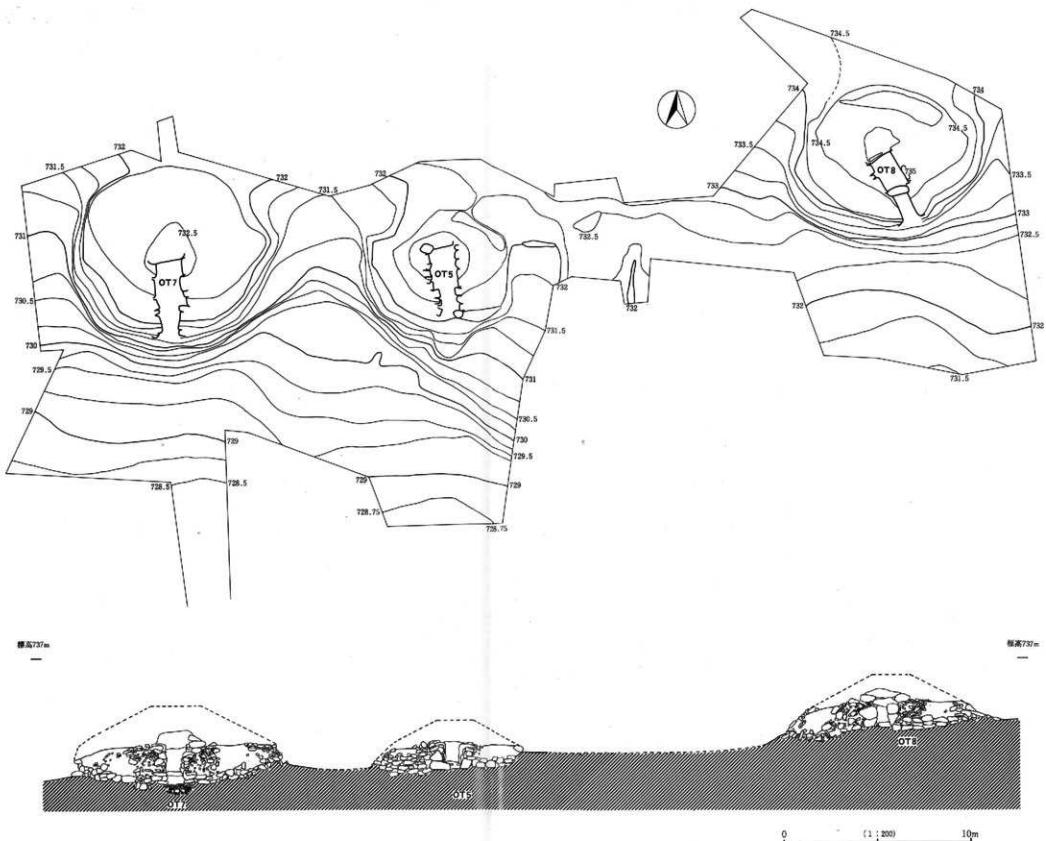
辨別番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調査	備考
20-1 馬頭 輪軸 金具	(8.6) —	—	頭中位と頭部と翼部の接合部にそれぞれ1条の沈線を有する。	内・外表面にロクロヨコナザ。	回転実測A. No.3・IV区 松子尾、動土色調暗白色(2.5B4/2), 失溝無の可能性あり。
20-2 須 恵 器 杯	12.7 — 6.5 (7.3)	—	底部丸底風平底。口辺部やや外反する。	内・外表面にロクロヨコナザ。 底部回転ヘラキリの後ナダ調整。	回転実測A. No.8・IV区 動土色調暗紫灰色(SRP4/1),
20-3 須 恵 器 杯	(13.6) — (7.3)	—	底部丸底風平底。口辺部外反する。	内・外表面にロクロヨコナザ。 底部回転ヘラキリの後ナダ調整。	回転実測B. No.8・IV区。 船上色調暗青灰色(SB4/1),
20-4 須 恵 器 杯	(13.6) — (7.3)	—	底部平底。口辺部僅かに外反する。	内・外表面にロクロヨコナザ。底部ヘラケズリ。	回転実測B. No.18・IV区 動土色調暗青色(5B4/1),



第22図 第6号古墳出土金属器実測図

3) 第5・7・8号古墳の地形

第5・7・8号古墳は山麓部、平坦面に向かって馬蹄状に開かれた最深部に位置し、第8→第5→第7号古墳と西側に傾斜をもち、東西にはほぼ一直線に配置され、標高731m~733.75mの間に構築され、比高差は約2.75mを測る。第8号古墳と第5号古墳との距離約16m、第5号古墳と第7号古墳との距離1.5mを測る。主軸方位は第8



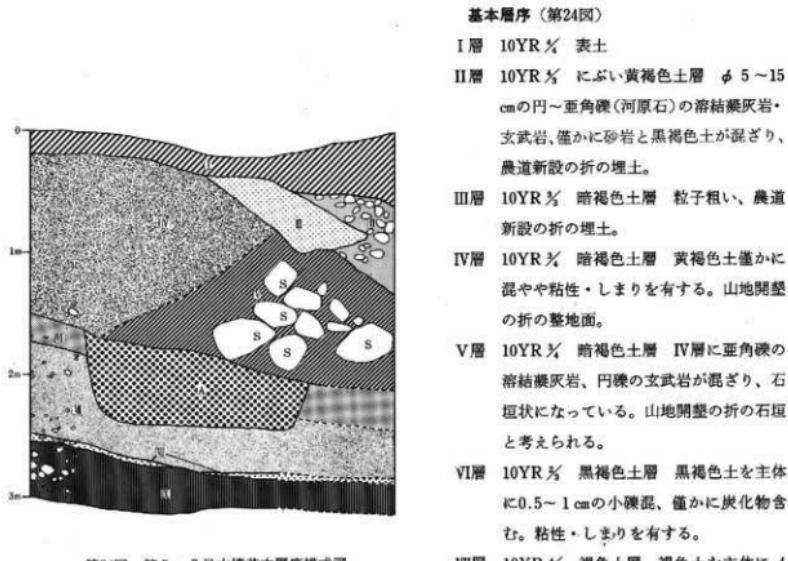
第23図 第5・7・8号古墳地形図及び埴丘想定図

号古墳がN-27°-Wと北北西を向き、第5号古墳がN-5°-W、第7号古墳がN-1.5°-Wとほぼ真北を向いています。非常に隣接している第5号古墳と第7号古墳は規模の大小・石室内部構造に少差があり、検出された遺物が少なく比較検討が困難であるが、開口方位が共に真北を向いていることから、埋葬者どうしに因果関係が強いと思われる。なお、第8号古墳にも同様なことが感じられるが、墓道等が検出されず、今の段階では資料不足であり今後の研究を待ちたい。また、第8号古墳IV区墳壇の多量の祭祀供奉用須恵器の出土は、本調査において、第1・6・5・7号古墳には見られず、その特異性から、本調査の古墳の中で中核的存在の可能性があり、墓前祭とも考え合せ留意したい。

(羽田)

4) 第5号古墳

本古墳は第8・7号古墳の間、第7号古墳に近接する位置で検出された。山地開墾と農道の新設により、墳丘は平坦に削平され、当初、本古墳の存在を確認できなかったが、第7号古墳基本層序を調べている折、全体層序第IV層黒褐色土に当たり、他の本調査古墳の構築面と類似していることから、拡張を行い確認した結果、本古墳が検出された。



以上、5号古墳は基本層序VI層黒褐色土層上を整地し、掘り込んで構築したと考えられる。VI層に炭化物が含まれていることは、旧地表面を焼き払って整地したことを暗示するものと思われ、本調査の第7・8号古墳にも類似性が認められ留意したい。

外部構造 (第25図、図版十)

本古墳は上述してあるうえに、畠地境界の石垣に利用されており、外周が完全な形で旧状を留めていないが、

その外周列石が円形を呈していることから、円墳と考えられる。主軸長6.88m、直交軸長8.62mを有し、残存高1.80mを測る。封土は16層に分かれる。構築順序は緩やかな南傾斜面上に構築されているため、基本層序第VI層黒褐色土層を振り込み、第6・9・11・12・14・15・16層黒褐色土・褐色土・暗黒褐色土を用い整地し、石室奥壁・側壁に板状の溶結凝灰岩（山石）と墳丘外周に列石を配置する。その後、石室外側には第4層暗褐色土と亜角礫の溶結凝灰岩（山石・割石）の混ざりの被覆する形で裏込めとして使用。墳丘III・IV区据部外周は外護列石風に板状の溶結凝灰岩（山石・割石）を2~4段横積みに積まれているのが観察でき、他区は大きな亜角礫の溶結凝灰岩（山石）が根石として円形に配置され、根石間にやや小ぶりの同質の石が設置されている。これらのことから、石室と墳丘外周の石を固定しながら、段々と第8→7→6→5→3→1層と埋めていったと考えられ、現状では版築されたか判明が困難であった。なお、墳丘がほとんど破壊されていたため、葺石の有無は判明できず、また、周辺は検出されなかった。

内部構造（第26・27図、図版十一）

新設農道を設置する折、石室の上段は削平を受けたと考えられる。天井石等は畑地境界の土手に散在していた。石室形式は横穴式両袖型玄門付石室で、主軸方位はN-5°-Wを指す。石室は第11層整地面上に構築されていた。右側壁はほぼ直線上、左側壁は左玄門で屈曲し、羨道側壁で挟まる。断面形は箱状を呈していたと推測される。規模は、石室長は右側で4.08m、左側4.35m、玄室長は右側壁で1.06m、左側壁1.30m、玄室幅は奥壁で1.30m、中央1.53m、玄室残存高は1.18m、羨道長は1.41m、羨道幅は奥で1.25m、入口1.16m、羨道高は現状で1.68mを測り、玄室から羨道に向かって緩やかな傾斜面を作っていた。残存している部分において、奥壁には144×150cmの板状の溶結凝灰岩が1枚縦積みに残存していた。玄室側壁は左・右側壁の石積みの形状がやや異なり、右側壁は奥壁に接し、1枚の板状の溶結凝灰岩（山石）を縦積みにし、玄門に接する側は、同質の石を三段横積みにし、奥壁側は縦積みの上に、水平を保つため、やや小ぶりの亜・角礫の溶結凝灰岩（山石・割石）を乱積みにした様子が窺われる。左側壁は1段目2枚の板状の溶結凝灰岩（山石）を縦積みにし、玄門との間を右側壁の長さとはほぼ等しくするため、亜・角礫の溶結凝灰岩（山石・割石）を乱積みにし、また、1段目縦積みの上には玄門との間と同様な乱積みが施されている。棺床は他の本調査古墳とは異なり、河原石を敷き詰めておらず、扁平な溶結凝灰岩を平坦に敷き詰め、隙間にφ5~10cmの円礫の玄武岩・溶結凝灰岩（河原石）が詰められており、二重構造にはなっていなかった。羨道側壁は1段目は板状の溶結凝灰岩（山石）を横積みにし、その上にやや小ぶりの亜・角礫の溶結凝灰岩を乱積みにしたと思われる。玄門には柱状の溶結凝灰岩が立脚し、玄門の間には2枚の板状の溶結凝灰岩（割石）が框石として、玄室と羨道との間を区切っていた。羨道底面は大旨、第6・11層の土面であった。

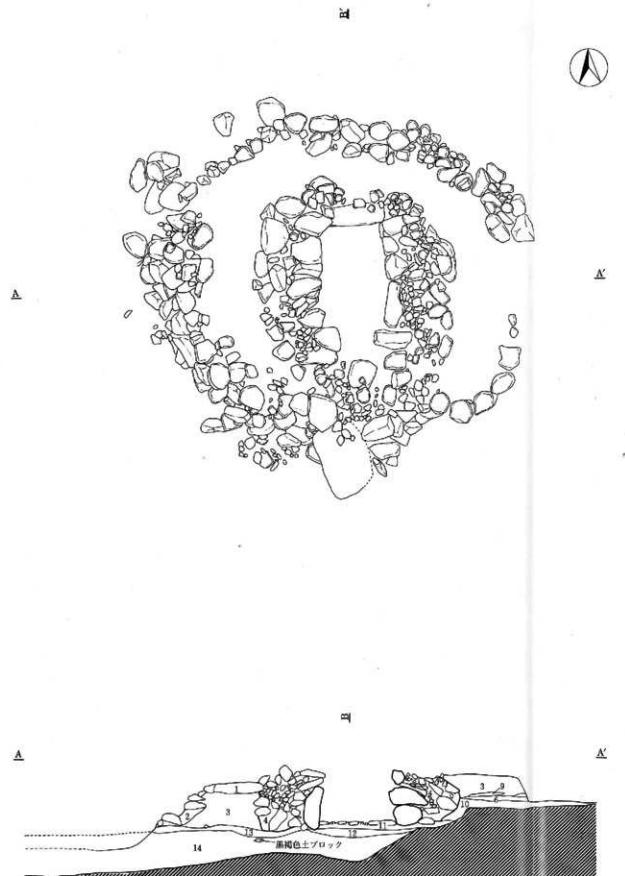
閉塞方法は以前、畑地の石垣に本古墳羨道部が利用されていたため、破壊がひどく、旧状を留めないが、他の本調査古墳と同様と考えられ、磚の積み込みと考えられる。

玄室のセクションは2層に区分でき、第1層は農道新設の折りの埋土・第2層は玄室内に遺物が少ないとから盜掘時の堆積と考えられる。

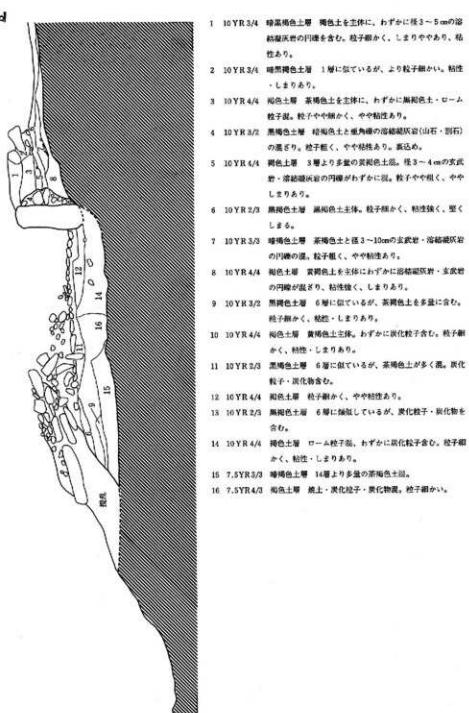
尚、本古墳は他の調査古墳の棺床面下の堆積状態が異なり、第16層褐色土層は焼土と炭化粒・炭化物の混ざる層である。また、棺床面に張りついて、種名・部位の判明できない骨は、細かいひびが入っており、火熱を受けたことを物語り⁽¹⁾、速断ではあるが、埋葬方法⁽²⁾に変化の生じた証しとも考えられ、類例の増えるのを待ちたい。

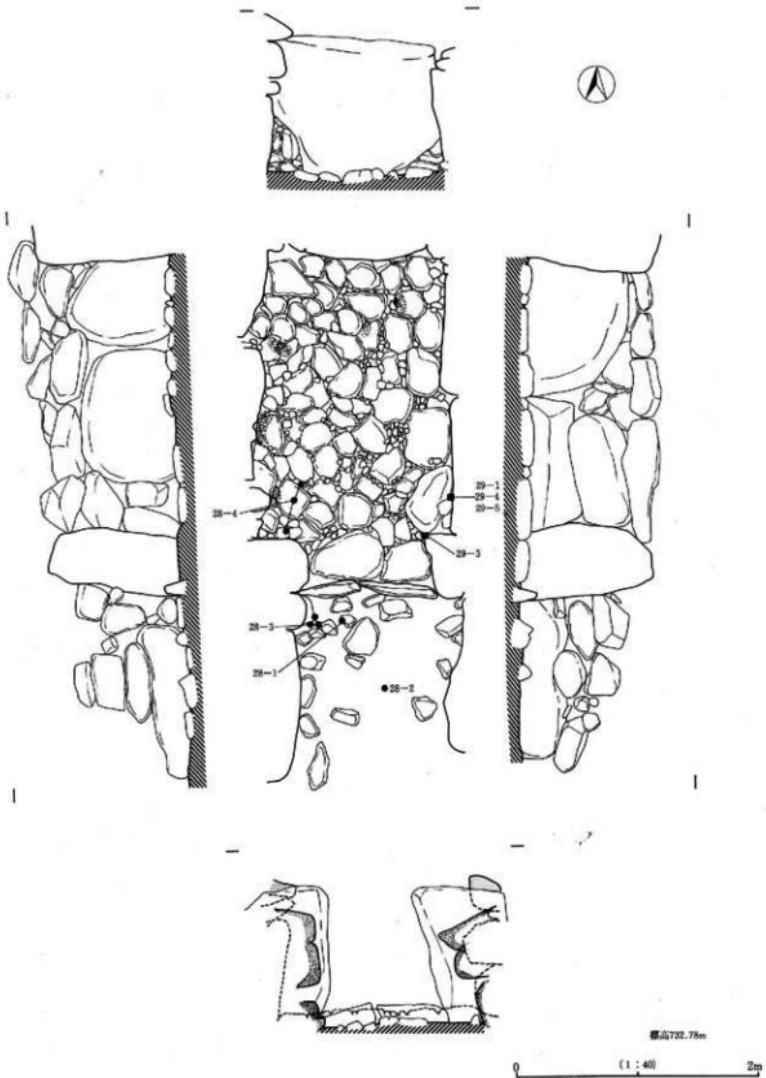
註(1) 宮崎重雄氏のご教示による。

註(2) 前川実知雄 1984 「律令官人の墓（奈良時代）」『季刊考古学 第9号』

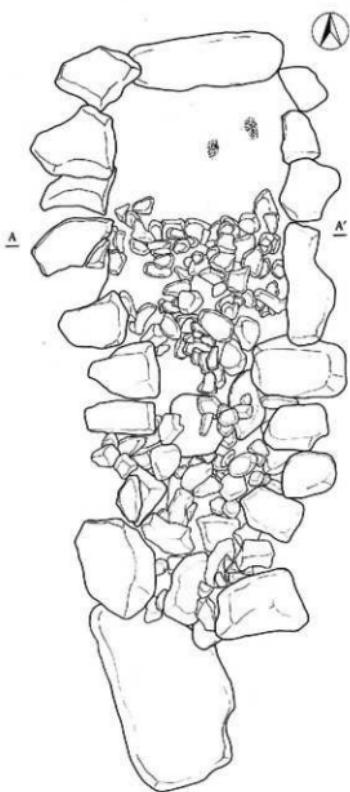


第25図 第5号古墳墳丘実測図





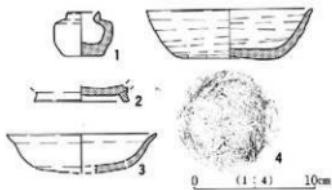
第26図 第5号古墳石室展開図及び遺物分布図



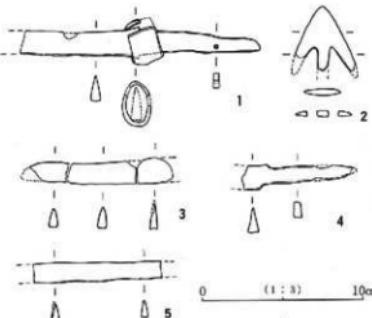
第27図 第5号古墳石室実測図

1 10YR 3/4 新聞色土層 ローム粒子混。粘性粗い。粘性強く、しまりあり。
2 7.5YR 3/4 陶色土層 1層より多くローム粒混。炭化物含む。
粘性粗い。粘性強く、しまりあり。

遺物（第28・29図、図版 十一・十六・十八）
石室内遺物には、骨・刀子・小刀・鉄鎌・土師器・須恵器がある。副葬品としては少なく、盜掘にあった可能性が考えられる。須恵器杯28-4は玄室左玄門コーナー、棺床面上に正位の状態で出土し、刀子29-3は玄室右玄門コーナー、棺床面上より、小刀29-1、刀子29-4・5は3より20cm奥の右側壁に接し、棺床面上から出土した。小型短頸壺28-1は羨道底面、左袖石の近くで正位の状態で出土した。又、鉄鎌29-2は羨道より、他の須恵器片・土師器片は羨道底面に散在していた。須恵器小型短頸壺はヤッコ型を呈し、28-3は土師器杯で、底部丸底気味平底、口縁部で外反し内稜を有する。28-4は底部糸切り、周縁ヘラケズリが施されている。29-1は残存高14.8cmを測り、茎部には目釘孔を1孔有し、刃関背闊を有する。刃部平刃であり、鍔が残存している小刀である。29-3は8.8cmの刃部残存を測り、平刃の刀子、29-4は6.9cmの基部残存を測り、刃関・背闊



第28図 第5号古墳出土土器実測図



第29図 第5号古墳出土金属器実測図

第6表 第5号古墳出土土器觀察表

標印番号	器種	法位	成形及び器形の特徴	調査	備考
28-1	須恵器 蓋付 手捏成形	2.7 3.4 3.1	小型短頸壺、ヤコ型を呈する。 手捏成形。	外) ヘラケメリの後ナダ調整。	完全実測。Na35. 胎土色調紫灰色(SPB5/1)。
28-2	須恵器 (1.2) (7.8)		貼り付け高台が施される。	内・外面共にロクロヨコナダ。	回転実測B。Na15 胎土色調青灰色(SPB6/1)。
28-3	土器 蓋付 手捏成形	(12.3) (3.2) (7.8)	底部丸底気味の平底。口辺部内窓外傾、 ロ繩部外反し、内縫を有する。	内・外面磨滅著しく調査不明、底部ヘラケメリ。	回転実測B。Na19 + 29 + 21* 胎土色調青灰色(7.5VR5/6)。
28-4	須恵器 蓋付 手捏成形	13.6 4.2 8.0	底部平底。口辺部内窓外傾、 ロ口部で僅かに外反。	内・外面共にロクロヨコナダ。 底部回転糸切りの後、周縁ヘラケメリ。	完全実測。Na30 + 31 + 32 胎土色調紫灰色(SPB6/1)。 内面火漆が残る。

を有する刀子、29-5は刀子の刃部片で平刃である。29-2は茎部と僅かに両逆刺の先端が欠損している腸抉平造正三角形鎌である。以上、本古墳の所産期の決定は遺物が少なく困難であるが、28-4が棺床面から出土していることから、少なくともも8世紀後半までなんらかの形で使用されたことが窺われる。

(羽田田)

註① 美 隆 1987 「佐久地方における奈良時代を中心とした土器様相」『長野県考古学会誌 55・56号』

シンボジウム特集号 信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相】

5) 第7号古墳

本古墳は第8・5号古墳と横一列に並び、山麓が「U」字状に開かれた最深部に位置する。山地開墾と畑地境界の石垣に利用され、また、盗掘等により墳丘は旧状を留めず、石室の天井石は露出し、石室内は空間を残すものの、だいぶ土砂で埋まっていた。構築面は第24図第5・7号古墳基本層序模式図で示してある、第VI層黒褐色土層であり、第5号古墳と近接していた。

外部構造（第30図、図版 十二・十三）

本古墳は上述してある上に、周囲に散在している石（古墳構築用材・崖堆堆積によって押し出された砾）を本古墳に積みこんであるため、上面はほぼ浮き石であった。それを除去した結果、外周に列石が積まれており、その形状から円墳と考えられる。主軸長10.03m、直交軸長11.56mを有し、残存高は2.8mを測る。封土は12層に分かれれる。構築順序は僅かに西側に向かっての傾斜面上の構築のため、基本層序第VI層を掘り込み、第5・6層黒褐色土を用いて整地し、石室奥壁・側壁と墳丘外周列石を設置、その後、石室外側には第2層黒褐色土にローム粒子の混ざった土と、φ 5~15cmの円礫（河原石）の砂岩・粘板岩・頁岩・玄武岩・溶結凝灰岩とやや大きめの亜・角礫の溶結凝灰岩（山石・割石）を互層に埋め、その外側を50×30cm前後の溶結凝灰岩（山石・割石）を用いて被覆する形で裏込めを行ったと考えられる。墳丘III・IV区外周は外護列石風に亜角礫の板状の溶結凝灰岩を2~3段横積みにし、他区外周は大きな同質の石を根石とし、粗い積み方で残る。以上のことから、石室と外周の石を裏込めによって固定しながら、第3・4層を盛土していくと考えられる。尚、II区墳丘袖部にφ10~15cmの円礫の砂岩・玄武岩・溶結凝灰岩が集石しており、葺石の痕跡とも思われるが速断は避けたい。また、周邊は検出されなかった。

内部構造（第31~33図、図版 十二・十三）

石室の天井石は露出していたが、石室の形態はほぼ良好な形で旧状を留めていた。石室形式は横穴式両袖型玄門付石室で、主軸方位はN-1.5°-Wを指す。石室は第5層整地面上に構築されている。平面形は土圧のため、玄室がやや屈曲しているが、羽子板状を呈し、断面形は箱状を呈する。規模は、石室長は右側で4.73m、左側4.48m、玄室長は左右側壁が1.73m、玄室幅は奥壁で1.95m、中央1.97m、玄室高は現状で1.55m、羨道長は2.01m、羨道幅は奥で1.15m、入口0.98m、羨道高は残存部で2.32mを計測する。棺床面と羨道底面との間には10cm前後の比高差を測る。

奥壁には2枚の板状の溶結凝灰岩（割石）を縦積みに用い、玄室側壁は1段目左右それぞれ2枚の板状の溶結

凝灰岩（山石）を縦積みに使用し、その上に2～3段、板状の溶結凝灰岩（山石・割石）を横積みにし、その隙間に角礫の溶結凝灰岩（割石）を壁面を平滑にするため、補強材として用いている。羨道側壁は1段目玄門に接する両側は板状の溶結凝灰岩（山石）が縦積み、その他は乱積みと、2～3段の横積みに使用している。棺床面北半分は盗掘時において破壊を受け旧状を留めず、なお、棺床下まで掘り込まれていた。南半分は砂岩・玄武岩・硬砂岩・溶結凝灰岩・粘板岩・頁岩等の滑津川の河原石を平坦に敷き詰めて、その下に亜～角礫の溶結凝灰岩を用いて粗い平坦面を作る二重構造であった。天井石は玄室の上に、奥壁・両側壁の上に接し、亜角礫の溶結凝灰岩（山石）が残存し、玄室内に1個崩れ落ちていた。羨道の天井石は墳丘Ⅲ区上に他の礫と共に崩れ落ちていた。玄門は柱状の溶結凝灰岩（山石）が立脚し、玄門の間に板状の溶結凝灰岩（割石）を框石として、玄室と羨道とを区切っていた。羨道底面は玄室棺床面下の形状と同類し、粗く亜～角礫の溶結凝灰岩が敷かれていた。

閉塞方法は以前、畠地の石垣に羨道部付近が利用されていたため、周囲に散在している礫が相当投げ込まれ、旧状を留めないが、礫による積み込みと推定される。

玄室内セクションは、ほぼ半分空洞になっており、3層に区分できる。第1・2・3層は盗掘時の人为堆積と考えられる。

尚、前部には本調査古墳とは異なる施設が付属しており、その形状は1.20×1.30mの長方形、深さ15～20cmを測り、中には円礫の溶結凝灰岩・砂岩等がぎっしりと詰め込まれ、開口部真下から外に向かって伸びていた。このことを推測すると、石室の排水に用いた施設とも考えられ、この様な類例を持ちたい。

（羽毛田）

遺物（第34～38図、図版 十三・十四）

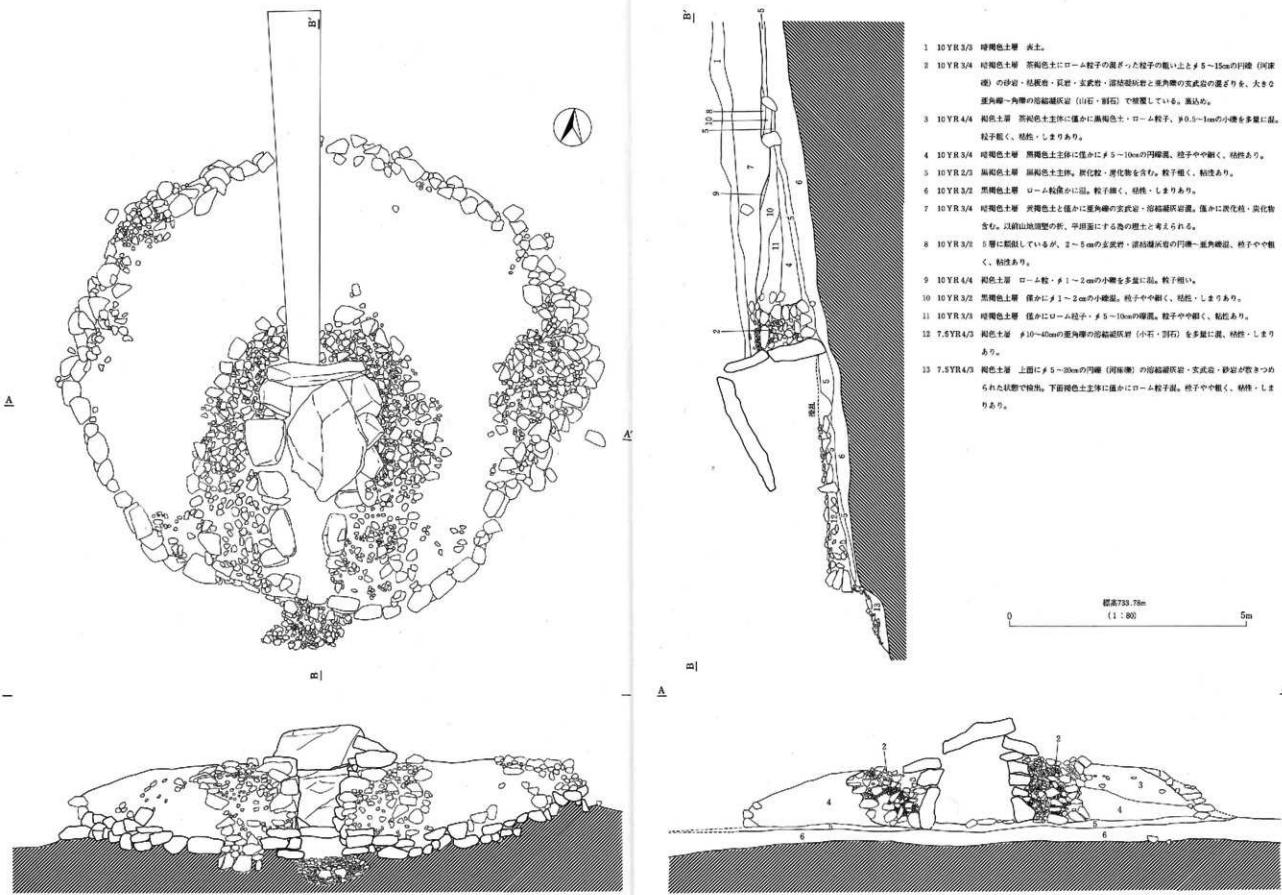
本古墳からは、須恵器・鉄製品・玉類・耳環が出土した。須恵器は墳丘上より、鉄製品・玉類・耳環は主に玄室内南半分、特に南西隅より集中して出土した。

須恵器の器種には甕があり、その他平瓶・壺と思われる破片がある。35-1は甕の底部片であるが、調整及び全体の器形は不明である。35-2・3、36-1～3は同一個体で平瓶と考えられる。35-2は頸部が垂直気味に立ち上がり、35-3は「U」字状の把手を有するが全体の器形は不明である。調整は頸部ロクロヨコナデの後、2条の沈線が廻り、胸部は外面にナデ調整、内面に叩きによる同心円文が観察される。35-4は甕の底部片で、高台が貼付される。自然釉の付着がみられ、色調から美濃系の可能性も考えられる。

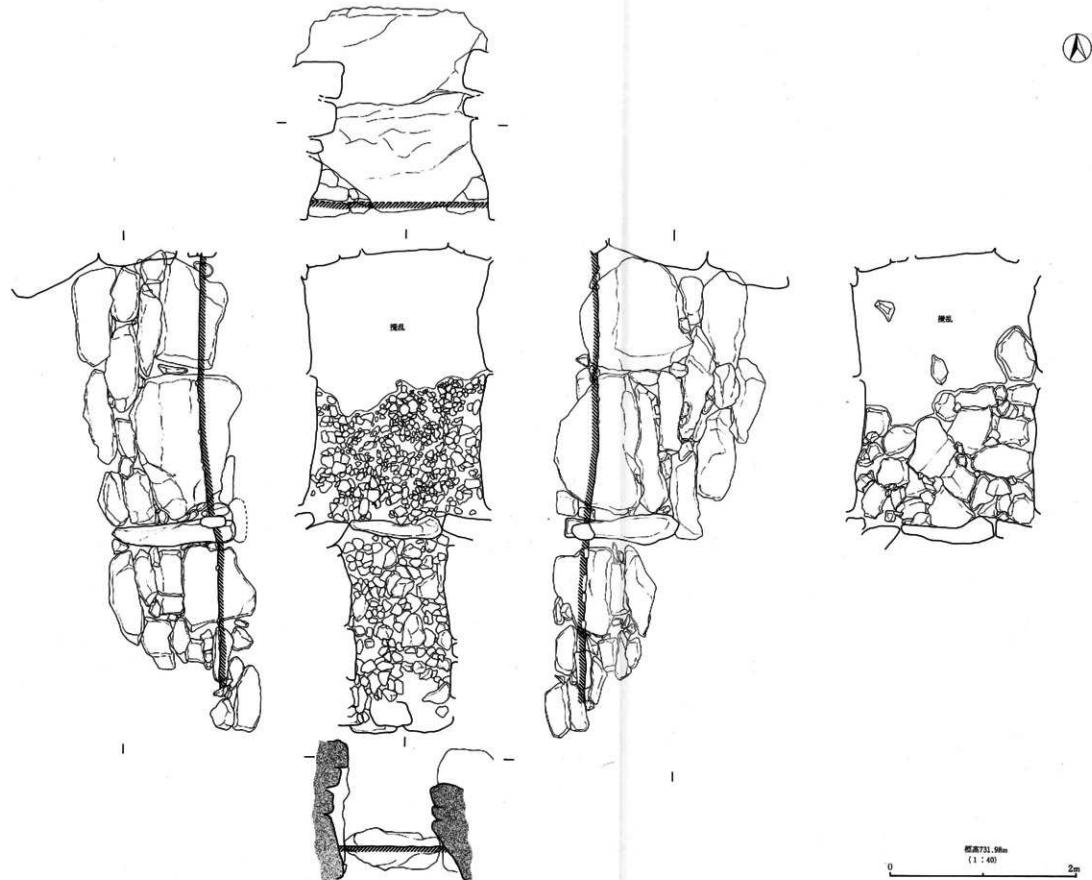
鉄製品には小刀・鉄鎌・轡・鉄釘等があり、玄室内南西限の棺床上及び棺床面直下より出土した。小刀は鋒を北東、刃部を左壁に向けて棺床より出土した。全長24.1cm、刃部長17.5cm、刃部最大幅2.2cm、茎部長6.6cm、峰厚0.4cmを測る。刀身は鏽をもたない平造りで、刃闊・背闊を有し、茎頭から1.4cmの位置に径2mmの目釘穴を有し、さらに5.5cm離れた刃部中央に径1.5mmの孔が観察される。

鉄鎌は総数で8点あり、38-2・3・4は玄室内左側玄門直下より出土した。38-2・3は刃部先端と茎部先端を欠損しているが、各々残存長14.4cm・15.7cm、笠被部長10.4cm・12.7cmを測り、長い頸部をもち、笠被部と茎部との境に棘状の突起を有している。関は観察されない。このことから棘笠被関無片刃箭式の長頭鎌であり、刃部は欠損しているため明確ではないが、鎌身の先端部のみにある端刃になると考えられる。38-4～8はいずれも長頭鎌の笠被部及び茎部の欠損品で、残存長は7～10cmを測る。全体の形状は不明であるが、38-5は関無の片刃箭式と思われ、38-6～8は笠被に棘状突出部を有する。また38-7は茎部に木質が残存する。38-9は残存長3.7cm、残存幅1.8cm、厚さ0.2cmを測り、平面形は五角形を呈する。刃部は平造りで勝抉を有する。また鎌身部の中央に径2mmの穿孔が観られる。五角形式の鎌においては長頭の類は見ないとされており、短頭勝抉平造五角形式の鎌であると考えられる。以上鉄鎌8点のうち7点が長頭鎌であり、棘笠被関無片刃箭式であると思われる。棘笠被片刃箭式の長頭鎌は古墳時代後期から奈良時代に多くみられるものであり、さらに端刃の片刃箭式は、古墳時代の片刃箭式の最終型式に属するものである。

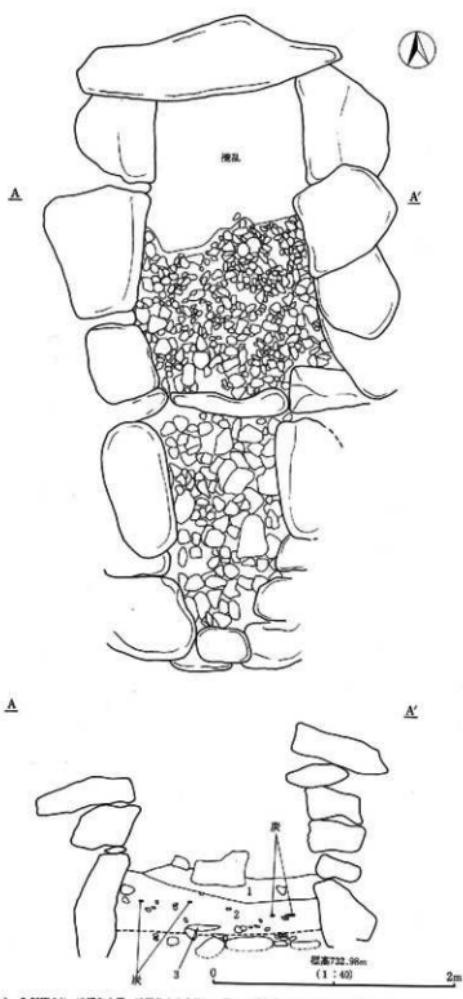
轡は、玄室内南西隅棺床上より出土した。いずれも柄は途中で欠損しており長さは不明であるが、先端の環に



第30図 第7号古墳墳丘実測図



第31圖 第7号古墳石室断面図



- 1 7.5YR3/4 暗褐色土層 砂質粘土を主体に、僅かに風化の溶結凝灰岩混入。僅かに炭化物含む。
粒径・しまりなし。玄武岩質石転写している。
- 2 7.5YR3/3 暗褐色土層 $\delta 2\sim 8\text{ cm}$ 円錐(河床堆)・東側の沿縁堆灰岩層。僅かに炭化物含む。
粒径・しまりあり。造形時に埋められた土。
- 3 7.5YR4/3 黄色土層 砂質主体でブロック状。

第32図 第7号古墳石室実測図

は鏡板と引手が連結されている。引手の長さは38-10が15cm、38-11が10.7cm、鏡板は10が7.2×6.2cm、11が7×6.1cmの楕円環式で、引手の手鋼側の環は10が46°、11が30°曲げられている。また、2点とも鏡板には鉤具部の痕跡が認められる。本資料は、断面円形の鉄棒によって作られており、佐久地方において出土した轡はほとんどが断面円形の鉄棒を使用しているが、佐久市家地原1号墳出土の轡は断面方形の鉄棒を使用している。³¹⁾

鉄釘と思われるものは38-12~15の4点が出土した。いずれも欠損品であり、残存長3~4cm前後を測るのみで全体の形状は不明であるが、12~14の3点には木質が残存している。

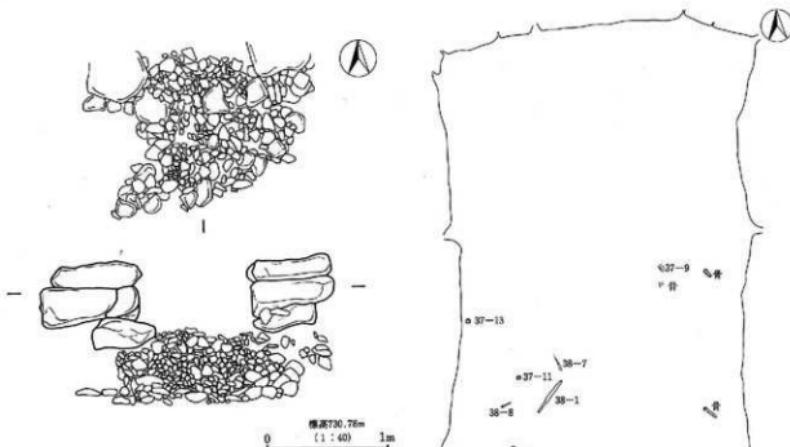
玉類はガラス小玉2点、丸玉1点、管玉1点、切子玉2点、勾玉2点が出土した。ガラス小玉(37-1・2)は径8×6.5mm、厚さ6mmの大型品と径4mm、厚さ2.5mmの小型品があり、色調は淡紺色を呈する。

丸玉(37-3)は素焼きの土器に炭素吸着により黒色に仕上げたもので、さらに表面は漆黒色の光沢があるが、磨滅が著しい。径7mm、厚さ5mmで両面からの穿孔による径1.5mmの孔を有する。また37-4は穿孔はみられないものの、土製丸玉の可能性がある。

管玉(37-5)は滑石製で、長さ12mm径7×6mmの円柱状を呈する。穿孔は両面からで、孔径は2×3mmを測る。

切子玉(37-6・7)は透明水晶製で2個出土した。形状は截頭六角錐を2つあわせた形で、6は長さ18mm、幅14mm、重さ4.0g、7は長さ17.5mm、幅12mm、重さ3.6gを測る。穿孔は片面からで、下面の孔の周辺は抉ってある。また7の孔の内面に朱の付着が観察される。

勾玉(37-8・9)は瑪瑙製で2個出



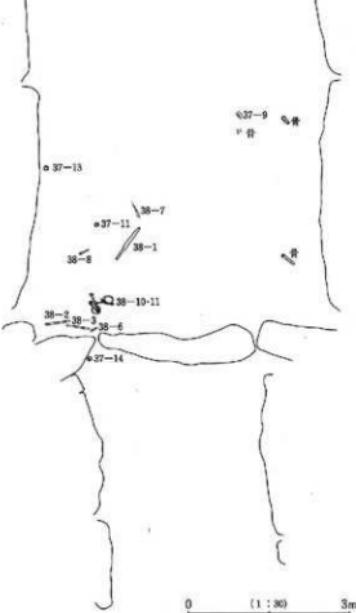
第33図 第7号古墳前庭部集石実測図

土した。大きさに差異が認められるものの、形状は古墳時代後期的な「コ」の字状を呈する。穿孔は片面から行われており、裏面は孔の周辺を抉ってある。

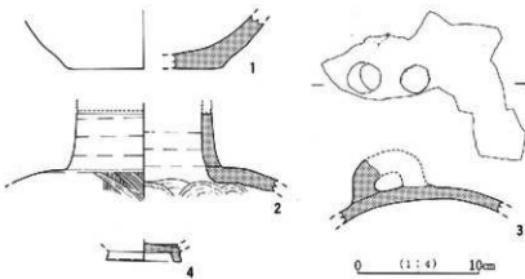
耳環（37-10～14）は総数で5点出土した。形状はいずれも正円形に近い梢円形であるが、銅芯が延棒状のもの（10・11）と中空のもの（12～14）とに大別される。また表面の鍍金は、中空のものが金を主成分とするものであるのに対し、延棒状のものは、銀あるいは金と銀の合金によるものである。なお詳細は、付録「耳環のX線マイクロアナライザによる定性分析」に記した。

以上、本古墳の石室の壁
体に大きな板状石を用いる
構築技法と、出土遺物に、
兼冠被片刃箭式の長頸鏡、
「コ」の字状を呈する瑪瑙
製の勾玉、銅芯金張の耳環
があることなどを考え合わせると、本古墳の築造年代
は7世紀代と想定すること
ができる。

（三石）



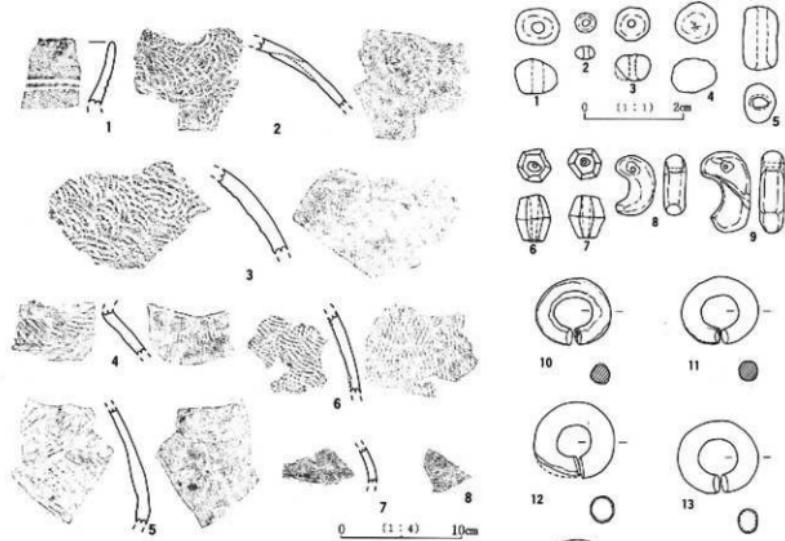
第34図 第7号古墳石室内遺物分布図



第35図 第7号古墳出土土器実測図

第7表 第7号古墳出土土器観察表

番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調査	備考
35-1	壺	— (4.3) (12.2)		内・外表面著しく調整不規則。	回転実測B。II区表土。 胎土色薄青灰(5BS/1)。
35-2	壺	— (6.8) —	頸部直立気味に立ち上がる。	内) 頸部ロクロヨコナゲ、肩部同心円文(印き目文様) 外) 頸部ロクロヨコナゲ、肩部打正成形(印き目成形) の後ハケメ調整。	回転実測B。I区表土。 胎土色薄青灰(5BS/1)。 拓影図36-1・2・3と同一個体。
35-3	壺	— (6.8) —	「U」字状の把手を有する。	内) 同心円文(印き目文様)、上部ナデ調整。 外) ナデ調整。	破片実測。I区表土。 胎土色薄青灰(5BS/1)。 2と同一個体。
35-4	壺	— (1.5) (6.1)	底部貼付け高台。		回転実測B. IV区。 胎土色薄青灰(5BS/1)。 自然釉付着。美品。



第36図 第7号古墳出土土器拓影図

註(1) 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983 「埼玉県における古墳出土遺物の研究 I—一枚絵について—」『研究紀要』

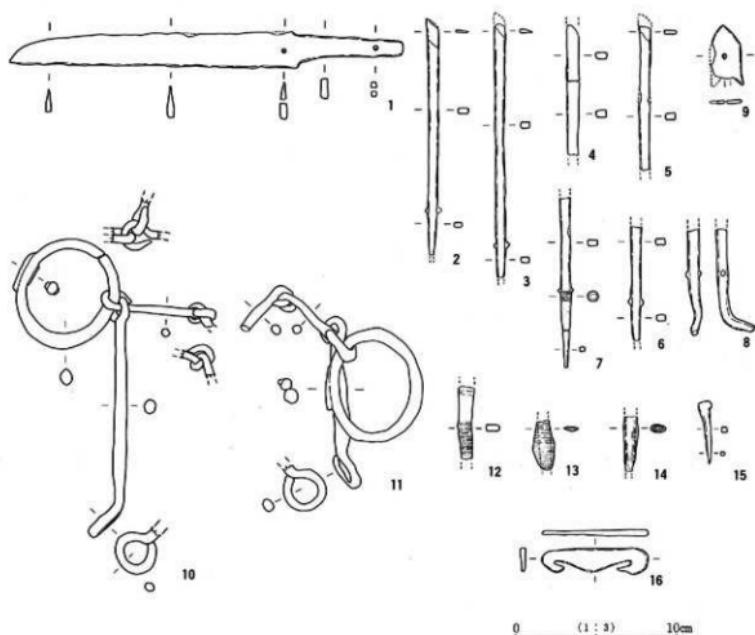
註(2) 前掲註1

註(3) 佐久市教育委員会 1976 「家地原第1号古墳発掘調査報告書」

第37図 第7号古墳出土玉類・耳環実測図

第8表 第7号古墳出土玉類観察表

番号	名称	材質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	色調	穿孔状態	欠損状態	備考	
37-1	小玉	ガラス	0.8	0.65	0.6	—	淡褐色	φ2.5mm	完存	断面倒卵形を呈する。玄室内。	
37-2	小玉	ガラス	0.4	0.4	0.25	—	淡褐色	φ1.5mm	完存	断面椭円形を呈する。玄室内。	
37-3	丸玉	玉髓	0.7	0.7	0.5	—	淡黒色	φ1.5mm	両折り	一體 大鏡	
37-4	丸玉	玉髓	0.9	0.9	0.7	—	黒褐色	φ2.5mm	—	模り玉。黒漆(?)。玄室内。	
37-5	管	瑪瑙	1.2	0.7	0.8	1.0	グレー	φ2.0×3.0mm	両折り(?)	完存	穿孔断面漏斗状になる。玄室内。
37-6	切子玉	水晶	1.8	1.4	1.3	4.0	透明	φ5mm, 2mm	片折り	完存	穿孔断面漏斗状になる。玄室内。
37-7	切子玉	水晶	1.75	1.2	1.5	3.6	透明	φ4mm, 1.5mm	片折り	完存	片折りで他面凹状になる。石室内。
37-8	勾玉	瑪瑙	2.5	1.5	0.9	3.9	半透明	φ3.5mm, 1.5mm	片折り	完存	片折りで他面凹状になる。石室内。
37-9	勾玉	瑪瑙	3.3	1.9	0.9	7.85	半透明	φ2mm, 1.5mm	片折り	完存	片折りで他面凹状になる。玄室内。No.4



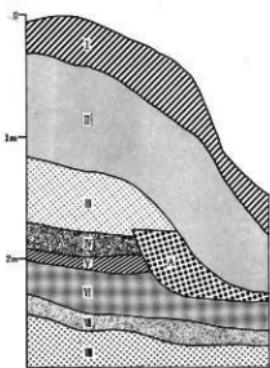
第38図 第7号古墳出土金属器実測図

6) 第8号古墳

本古墳は第5・7号古墳とほぼ横一列に並び、南傾斜面上、平坦地に向て「U」字状になった山麓の最深部に位置し、山地開墾と畑地境界の石垣・土塁に利用されていること、柵掘等により、墳丘は旧状を留めず、石室の天井石が露出し、墳丘の上には礫が投げこまれていた。

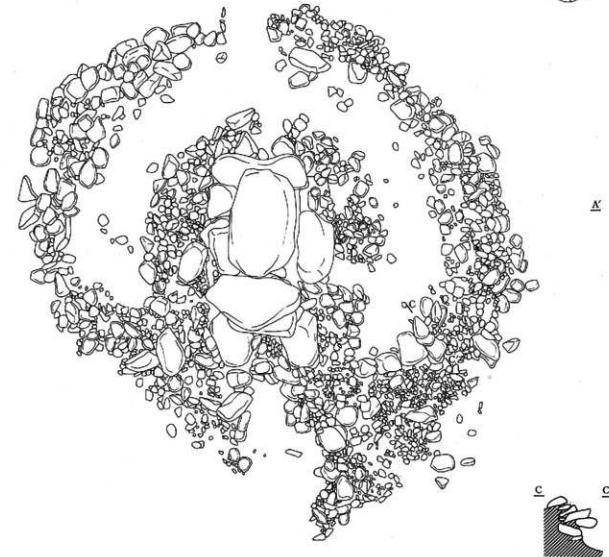
基本層序（第39図）

- I層 10YR 5/6 褐色土層 表土。
- II層 7.5YR 5/6 褐色土層 ϕ 2~5 cmの溶結凝灰岩・玄武岩の円礫が混ざり、粒子粗く、粘性を有する。山地開墾の整地面である。
- III層 10YR 5/6 黒褐色土層 粒子細かく粘性を有する。炭化粒・炭化物・須恵器・土師器・鉄鏃等出土。
- IV層 10YR 5/6 にぶい黄褐色土層 褐色土を主体に黄褐色土混ざり、粒子細かく、粘性・しまり強い。
- V層 2.5YR 5/6 にぶい赤褐色土層 粘土化している。



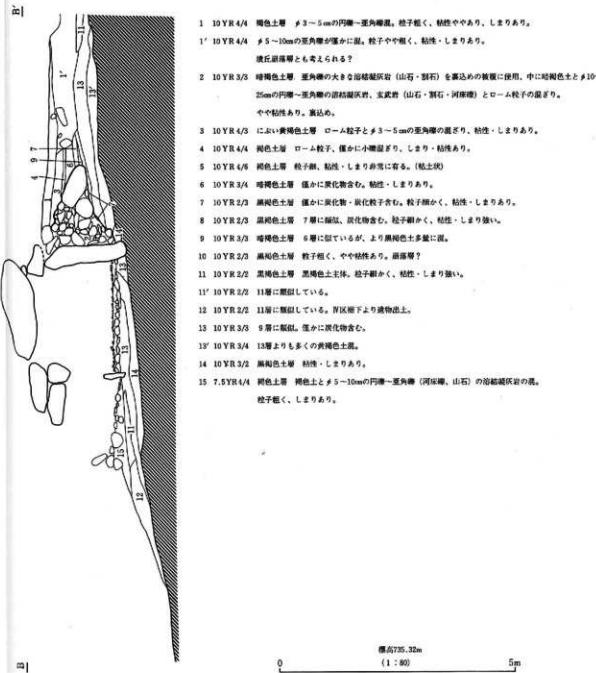
第39図 第8号古墳基本層序模式図

△

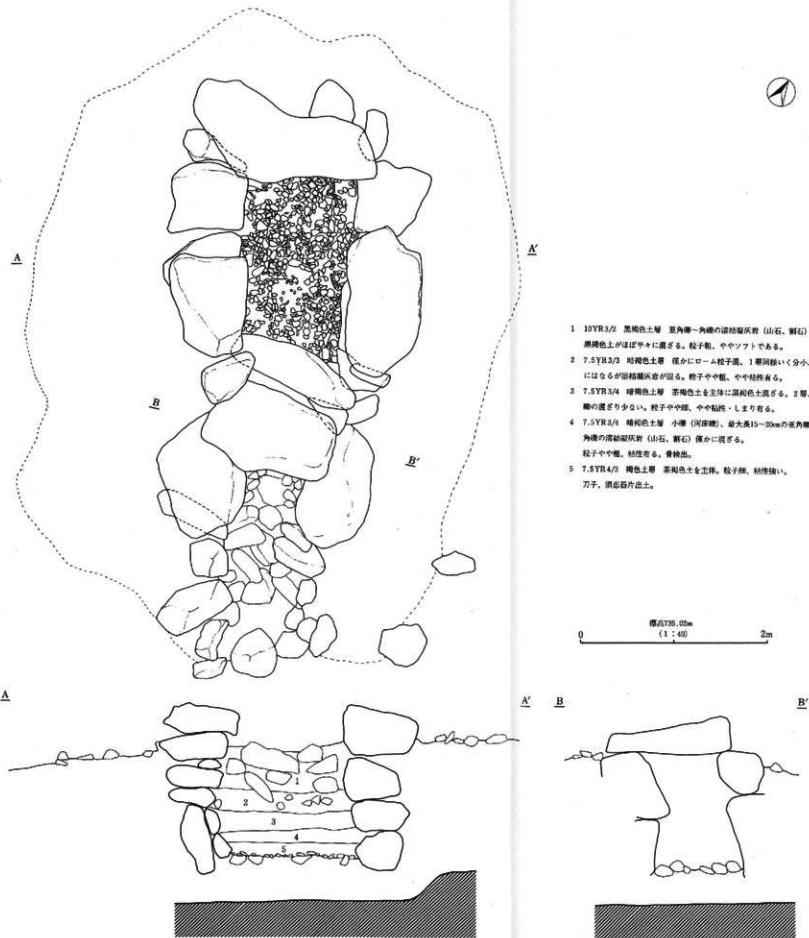


第40図 第8号古墳横丘実測図

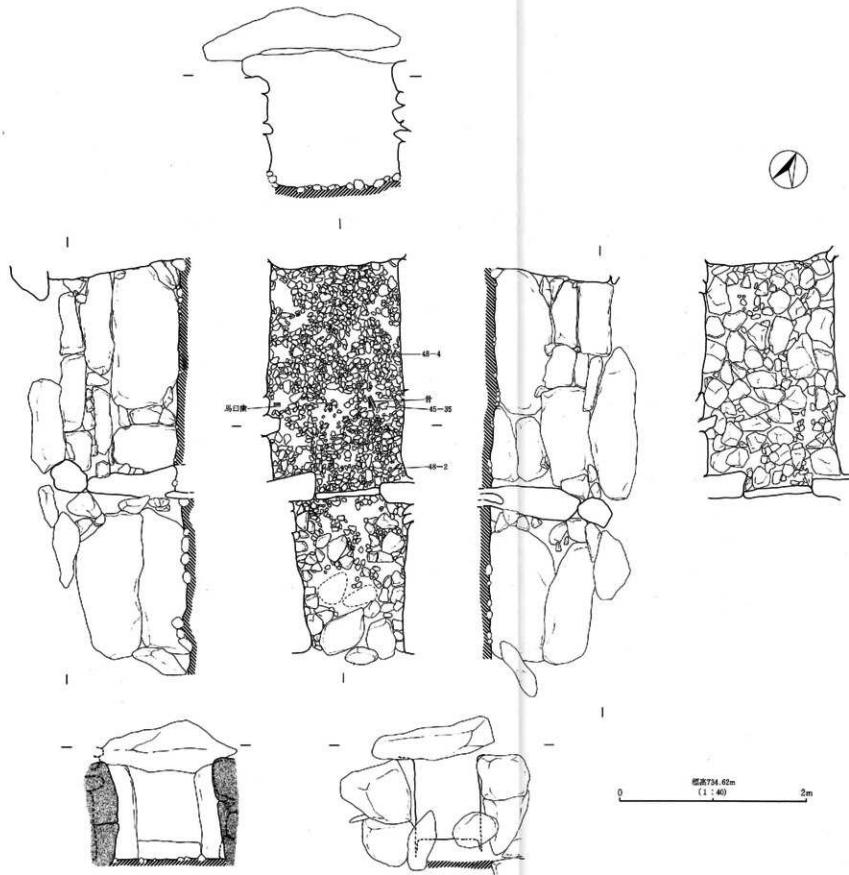
—49—



—50—

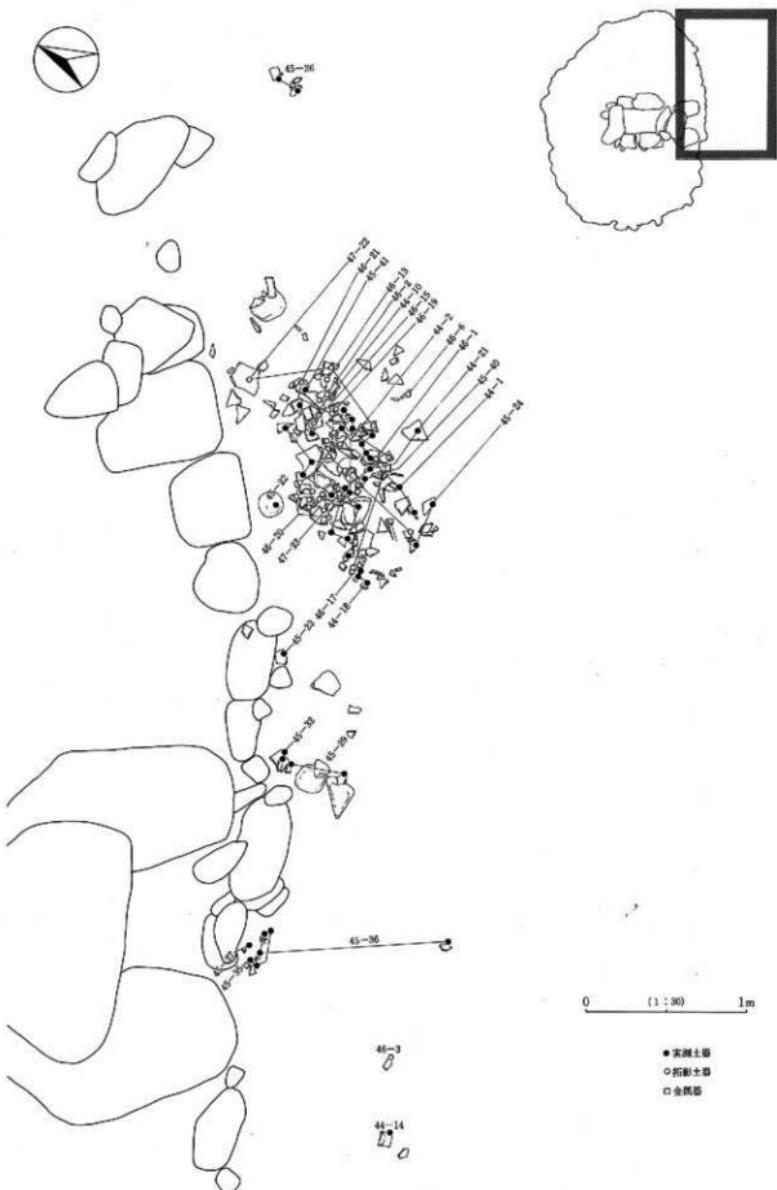


第41図 第8号古墳石室実測図



第42図 第8号古墳石室展開図及び遺物分布図

第43图 第8号古坟N区埴生遗物出土状况示意图



VII層 10YR 5/6 褐色土層 V層に砂粒が混ざり、流水層をなしている。

VIII層 2.5YR 5/6 にぶい赤褐色土層。VII層 2.5YR 5/6 灰赤色土層 粘土が白土化し粒子細かく、粘性強い。
以上、第8号古墳は基本層序第III層黒褐色土層を整地し構築したと考えられる。

外部構造（第40図、図版 八・九）

規模形態は浮き石を除去すると、外周の列石がほぼ円形を呈して表われたことから円墳と考えられ、主軸長は7.88m、直交軸長は10.28mを有し、残存高は2.76mを測る。封土は16層に分かれ、構築順序は緩やかな南斜面上に構築されたため、基本層序第III層黒褐色土層を掘り込み、第13・14層暗褐色土と黒褐色土を用いて整地した後、石室奥壁・側壁石と埴丘外周列石を設置、その後、石室外側には第2層暗褐色土と円～亜角礫の溶結凝灰岩・玄武岩（山石・割石・河原石）を裏込めとして使用した。尚、埴丘IV区外周は外護列石風に亜角礫の板状の溶結凝灰岩（山石）を3段横積みに用い、他区は現状では大きな亜角礫の溶結凝灰岩（山石）を根石として使用した。根石間ににはやや小ぶりの同質の山石を設置し、外周列石の裏込めには円～亜角礫の玄武岩、溶結凝灰岩（山石・割石・河原石）を使用、III区外周は崩落が激しく形状は不明であった。これらの裏込めによって、石室と外周列石を固定しながら段々と第11→15→9→7→6→5→7→3層と盛っていったものと考えられるが、版築を行ったかどうかは判明できなかった。I・II区埴丘裾部に円礎の集石の箇所が見られるが、蓋石の跡とは認めがたく、また、周辺は検出されなかった。

内部構造（第41・42図、図版 八・九）

石室・裏込め・天井石等が露出しているが、ほぼ良好な形で残存していた。石室形式は横穴式両袖型玄門付石室で、主軸方位はN-27°-Wを指す。石室は第13層整地面上に構築されており、平面形は右側壁はほぼ直線で、左側壁は左支門と左羨道部側壁で屈曲して異なる。断面形は箱状を呈したと推測される。規模は石室長右側で4.15m、左側4.08m、玄室長は右側壁で2.36m、左側壁2.23m、玄室幅は奥壁で1.37m、中央1.43m、玄室の残存高は1.58m、羨道長は1.65m、羨道幅は奥で1.22m、入口1.09m、羨道残存高1.50mを測る。また、玄室棺床面と羨道底面との間に5cm比高差を測るが、ほぼ水平と言えよう。奥壁には176×170cmの板状の溶結凝灰岩（割石）を鏡石として縦積みに使用し、その上に天井石と接する同質の石を横積みに積んである。玄室側壁は4段の石積みが観察でき、1段目は左右側壁にそれぞれ2枚の板状の溶結凝灰岩（山石・割石）を用い、奥壁側は縦積み、玄門側は横積みに用い、2・3・4段目は小口積みに同質の石を使用、隙間にも同質の小さな亜～角礫の石を詰め込み、補強している。羨道側壁にも溶結凝灰岩を2段の横積みに使用していた。

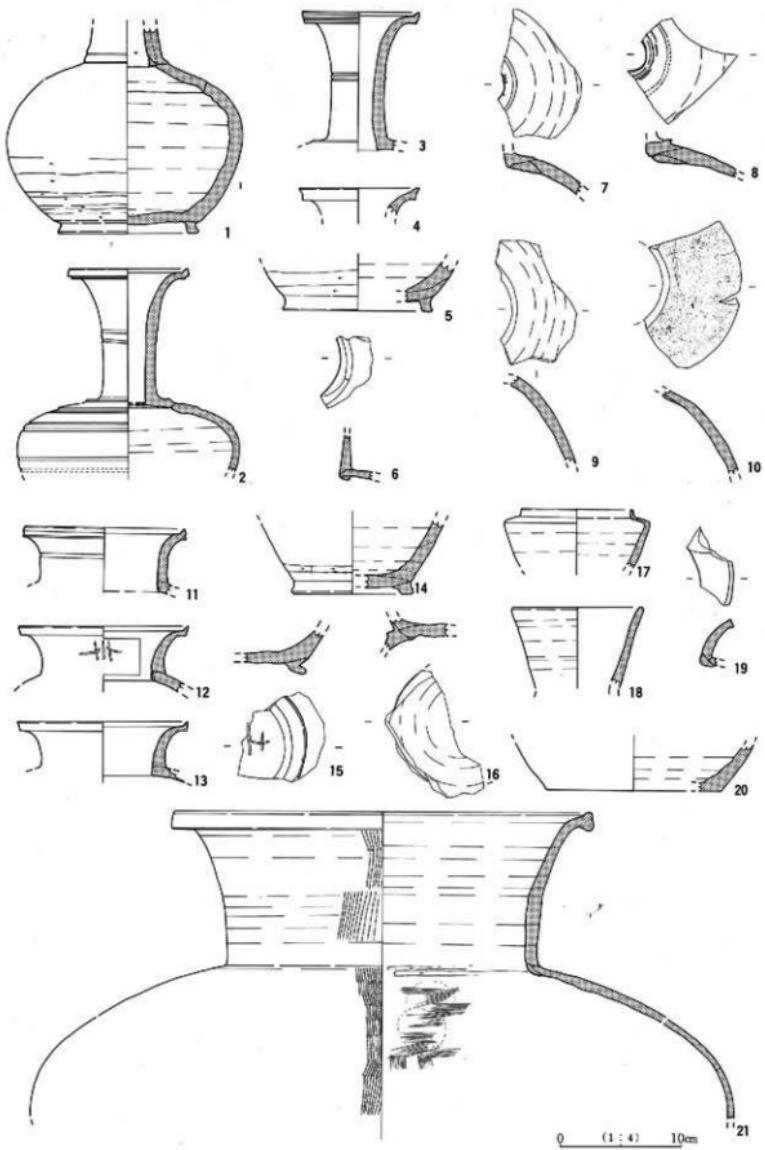
棺床面は玄武岩・溶結凝灰岩・砂岩・僅かに閃綠岩・粘板岩・頁岩等滑津川の扁平な握り拳大の河原石を平坦に敷きつめられていた。その棺床面下は他の第1・6・7号古墳同様、二重構造になっており、亜～角礫の溶結凝灰岩（山石・割石）を用いて粗い平坦面を作っていた。天井石は玄室の上に奥壁・両側壁に接し228×140cmの溶結凝灰岩（山石）が1個、棺石の上に同質の石が1個乗っており、また、羨道両側壁と樋石に接して1個の計3個残存した。玄門には柱状の溶結凝灰岩（山石）が立脚し、玄門の間には板状の同質の割石が樋石として、玄門と羨道とを区切り、玄門の上には同質の山石が樋石として乗っていた。羨道底面は棺床敷石下の状態より雑に亜～角礫が敷かれていた。

閉塞方法は盜壠と周囲に散在している礫の投げ込み等により旧状を留めないが、礫の積み込みと考えられる。

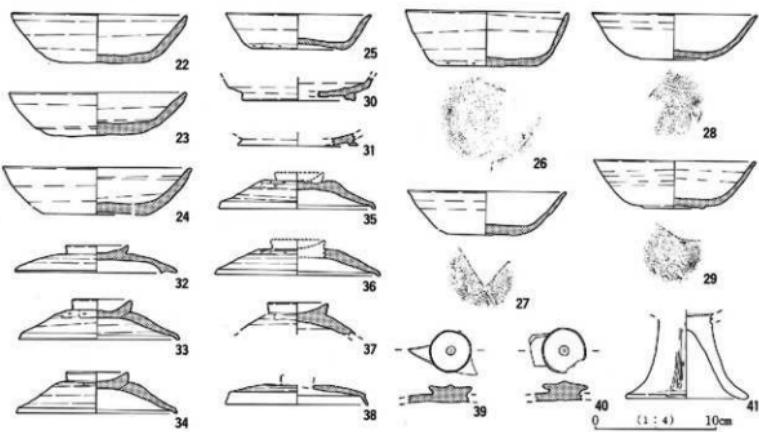
玄室セクションは5層に分割でき、第1層は山地開墾の折の礫の投げ込みと考えられ、第2→3→4→5層と下面にいくにしたがい、礫の混ざりが少なくなるが、盜掘時の人為堆積と考えられる。

遺物（第43～48図、図版 十・十六～十八）

石室内の遺物は盜掘等によったものか極めて少なく、玄室内より刀子・骨、僅かに須恵器1片が出土した。刀子48-2はほぼ原形を留め、右側壁と右玄門とのコーナー、棺床面上より出土した。形態は背闊・刃闊を有し、茎部に柄の木繊維が観察でき、茎部6.0cmで残存高10.2cmを測り、刃部平刃である。刀子48-4は玄室右側壁中程



第44図 第8号古墳出土土器実測図(1)



第45図 第8号古墳出土土器実測図(2)

に接し、棺床面上から出土、形態は背闊・刃開を有し、茎部柄との装着痕（木織維）が観察でき、残存長9.4cmを測る。骨は玄室左側壁ほぼ中央、棺床面上から5cm上の位置で、馬の臼歯が検出され、その他、右側壁中央より50cm内側、棺床面より5cm上で検出されたが、骨粉状態になっており種名・部位共に不明である。

本古墳で特筆されるのは土器の出土状態で、IV区埴籠第13層黒褐色土層中に須恵器破片が密集して出土しており、完形品は45—22杯のみであり、他は第43図IV区埴籠遺物出土状況実測図でも看取できるように、粉碎廃棄したように思われる。器種は長頸瓶・短頸壺・甕・壺・蓋と土師器高杯脚部、鉄鎌が出土している。

長頸瓶は10点図示し得たが、全器形を知り得る個体は無かった。しかし、胎土において2つに大別できた。44—1・5は粒子細かく胎土色調灰白色(2.5YR 1/2)を示し、いずれも貼り付け高台で自然釉が縁が付いて付着、美濃須衛産の可能性も考えられる。1はフラスコ型を呈し、胴下部回転ヘラケズリ、頸部と肩部の接合部に2条の微隆起帯を有する。44—2・3・4は胎土色調暗赤灰色(7.5YR 1/2前後)で、小さなガラス質の黒斑胡麻状の自然釉の付着が観察でき在地のものと考えられる。2は口唇部に1条の沈線、3は2条の沈線を有し、外縁を有する。頸部は中央に2本の平行沈線を有し、頸部と肩部の接合部に微隆起帯を有する。2は胴上部に2本一組の平行直線文が3带残存し肩部が張っている。以上、2・3・4は口部の形状・寸法・胎土等に共通性が認められる。44—6は胎土色調暗紫灰色(5RP 1/2)で小さなガラス質の黒斑を有し、上記の2・3・4に類似性があるが、形状が違うため留保したい。44—7・8・9・10はいずれも頸部との接合部分の破片であり、ガラス質の黒斑を有する。7・8は頸部との接合のため、接合面に凹凸をもうけた例として、7は放射状の刻目、8は同心円状の刻目が観察でき、また、肩部で粘土板をもって塞ぎ、その後、頸部の径に合せ、粘土板をヘラケズリし接合した様子が認められる良好な資料である。9・10はそれらの痕跡が認められず、他の器種とも考えられる。

短頸壺は44—11・12・13・14・15の5点図示し得た。11は口唇部に1条の沈線を有し、頸部中央にも1条の沈線を有する。胎土色調は暗赤灰色(7.5R 1/2)で小さなガラス質の黒斑を有し、胡麻状の自然釉が付着する。12・13は同一個体の可能性が強く、口唇部断面三角形を呈し、12は頸部に「巣」の範記号を有する。14は胎土色調暗青灰色(5B 1/2)で内面底部胡麻状の自然釉が付着、小さなガラス質の黒斑を有し、粘土經輪積痕の跡が観察でき、貼り付け高台である。15は胎土色調灰赤色(7.5YR 1/2)で胡麻状の自然釉が付着、小さなガラス質の黒斑を有し、貼り付け高台、底部外面に「土」の刻書が見られる。

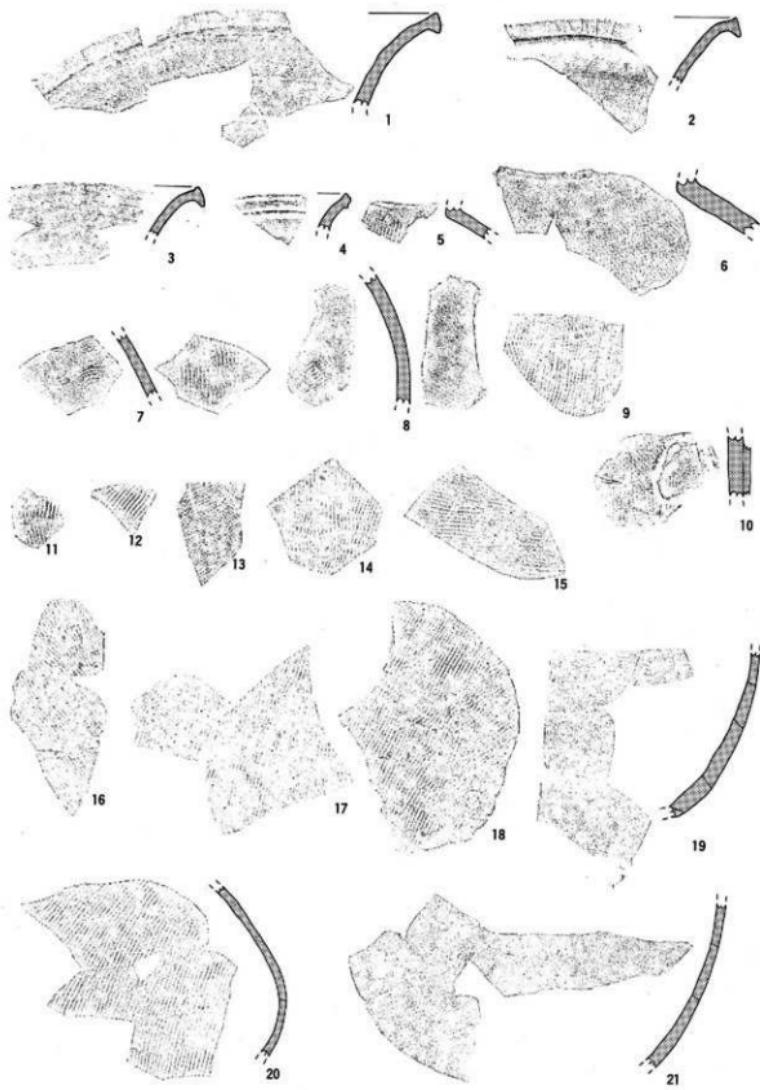
第9表 第8号古墳出土土器観察表(1)

序号番号	種類	洗量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
44-1	直筒 縦長 腰部 側面	— (16.5) (11.8)	粘土底覆み上げ成形。貼り付け高台でフタ スコ型を呈し、最大径(19.4cm)が腹中央に 位置する。頭部と翼部の接合部後方を有す る。	内) 頭部ロクロヨコナデ、頭部との接合部ヘラケズリ。 外) 翼下位より中位まで凹軸ヘラケズリ、中位から上位ナ ゲ調整、底部周縁ナゲ調整。	回転実測B、No.53-57-95-99- 101-102-104-105-123-162-IV区。 胎土色調赤灰色(2.5YR8/2)。自 然輪存感。美濃窓の可能性有り。
44-2	直筒 縦長 腰部 側面	9.7 (16.5) —	最大径(18.3cm)肩部に有し、口縫部大きく 外反し、口縫部2段の外縫を有する。	内) 頭部ロクロヨコナデ、頭部との接合部ナゲ調整。 外) ロクロヨコナデ。 文) 腹中央2条の平行縫線、頭部と翼部の接合部に段を 有する。翼部2条の平行縫線が3帯残る。	完全実測。No.75-103。 胎土色調赤褐色(7.5YR5/2)。 小さなガラス質の黒斑を有する。
44-3	直筒 縦長 腰部 側面	— (11.5)	口唇部2段の外縫を有する。	内・外縫共にロクロヨコナデ。 文) 翼部中央2条の平行縫線、頭部と翼部の接合部に段を 有する。	完全実測。石室内。 胎土色調赤灰色(7.5R4/1)。 小さなガラス質の黒斑を有する。
44-4	直筒 縦長 腰部 側面	(9.8) (2.2)	口唇部外縫を有する。	内・外縫共にロクロヨコナデ。	回転実測B、IV区。 胎土色調赤灰色(7.5R4/1)。
44-5	直筒 縦長 腰部 側面	(4.1) (12.2)	貼り付け高台。		回転実測B、IV区。 胎土色調灰白色(2.5Y8/2)。 美濃窓の可能性有り。
44-6	直筒 縦長 腰部 側面	(3.6) —	粘土板で塞がず、頭部と直筒接合。	内・外縫共にロクロヨコナデ。	破片実測。III区。 胎土色調暗赤灰色(5RP4/1)。 小さなガラス質の黒斑を有する。
44-7	直筒 縦長 腰部 側面	(3.0)	基土板を用いて、頭部との接合において、割 目を行なう。	内・外縫共にロクロヨコナデ。	破片実測。IV区。 胎土色調綠赤色(5G6/1)。 小さなガラス質の黒斑を有する。
44-8	直筒 縦長 腰部 側面	(2.8)	粘土板を用いて、頭部との接合において、同 心円状の割目を行なう。	内・外縫共にロクロヨコナデ。	破片実測。IV区。 胎土色調灰白色(7.5R7/2)。 小さなガラス質の黒斑を有する。
44-9	直筒 縦長 腰部 側面	(7.1) —		内・外縫共にロクロヨコナデ。	破片実測。IV区。 胎土色調赤色(7.5R4/1)。 自然物、ガラス質の黒斑を有する。
44-10	直筒 縦長 腰部 側面	(7.0)		内) ロクロヨコナデ。 外) 翼部ナゲ調整、叩き目文が残る。	破片実測。No.112-127。 胎土色調赤色(7.5R4/1)。 ガラス質の黒斑を有する。
44-11	直筒 縦長 腰部 側面	(13.2) (2.5)	口唇部外縫を有する。	内・外縫共にロクロヨコナデ。 文) 口唇部に1条の沈縫を有し、頭部中央にも1条の沈縫 を有する。	回転実測B、IV区。 胎土色調赤色(7.5R4/1)。 小さなガラス質の黒斑を有する。
44-12	直筒 縦長 腰部 側面	(13.9) (5.3)	口唇部外縫を有し立ち上がる。 ヘラ記号「押」を頭部に有する。	内・外縫共にロクロヨコナデ。	回転実測B、IV区。 胎土色調赤灰色(7.5R4/1)。 胡麻状の自然釉、小さなガラス 質の黒斑を有する。
44-13	直筒 縦長 腰部 側面	(14.6) (4.9)	口唇部外縫を有し立ち上がる。 頭部に巻かにヘラ記号が残る。	内・外縫共にロクロヨコナデ。	回転実測B、IV区。 胎土色調赤灰色(7.5M4/1)。 羽根状の自然釉、小さなガラス 質の黒斑を有する。12と同一團 体の可能性有り。
44-14	直筒 縦長 腰部 側面	(6.0) (9.2)	粘土底覆み上げ成形が顯著。 貼り付け高台。	内) ロクロヨコナデ。 外) 底部周縁回転ヘラケズリ、後、高台ナゲ調整。	回転実測B、No.2。 胎土色調青灰色(SB4/1)。 羽根状の自然釉、小さなガラス 質の黒斑を有する。
44-15	直筒 縦長 腰部 側面	(—) (11.8)	貼り付け高台。底部刻書「土」が剥離して いる。	内・外縫共にロクロヨコナデ。	破片実測。IV区。 胎土色調赤灰色(7.5R4/2)。 羽根状の自然釉、小さなガラス 質の黒斑を有する。
44-16	直筒 縦長 腰部 側面	(—) (1.8)		内・外縫共にロクロヨコナデ。	破片実測。III区。 胎土色調青灰色(5B6/1)。
44-17	直筒 縦長 腰部 側面	(9.0) (4.8)	小型知頭窓。マッコ型を呈する。最大径 (12.0cm)を肩部に有し、鋸く屈曲し、口縫 部屈かく立直気味に立ち上がる。	内・外縫共にロクロヨコナデ。	回転実測B、IV区。 胎土色調青灰色(5B4/1)。
44-18	直筒 縦長 腰部 側面	(10.6) (6.8)	深い口縫を持った环(カッペ型)の可能性 も有る。	内・外縫共にロクロヨコナデ。	回転実測B、No.24-25-26-30-IV 区。胎土色調青灰色(5BG4/1)。
44-19	直筒 縦長 腰部 側面	(13.4) (3.2)	口縫部大きく外反、口縫部外縫を有する。	内・外縫共にロクロヨコナデ。	破片実測。石室内。 胎土色調紫褐色(SB2/1)。 胡麻状の自然釉。
44-20	直筒 縦長 腰部 側面	(3.9) (14.2)	粘土底覆み上げ成形が顯著に残る。	内) 同心円の叩き成形の後ハケ目調整を部分的に行い、そ の後ナゲ調整、口縫部ロクロヨコナデ。 外) 口縫部底板子目状の叩き目成形の後ナゲ調整、 頭部底板子目状の叩き目成形。	回転実測B、III区。 胎土色調青灰色(5B3/1)。
44-21	直筒 縦長 腰部 側面	(34.2) (25.6)	粘土底覆み上げ成形。口縫部外反し、口縫 部底面三角形で、最大径(57.9cm)を底部に 有する。	内) 同心円の叩き成形の後ハケ目調整を部分的に行い、そ の後ナゲ調整、口縫部ロクロヨコナデ。 外) 口縫部底板子目状の叩き目成形の後ナゲ調整、 頭部底板子目状の叩き目成形。	回転実測B、No.32-33-65-75- 86-87-100-116-149-158。 胎土色調暗赤灰色(5P4/1)。 羽根状の自然釉、ガラス質の黒 斑を有する。

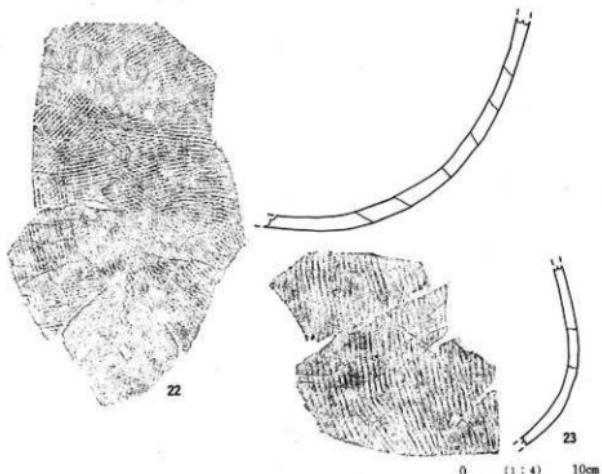
第10表 第8号古墳出土土器観察表(2)

辨別番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調査	備考
45-22	直筒 壺	14.4 4.0	底部丸底扁平底。口辺部器身厚く、底部周縁部を有する。	内) ロクロココナデ。 外) ロクロココナデ。底部回転ヘラキリの後ナゲ調整。	完全実測。No.83。 胎土色調にぶい黄褐色(10YR7/4), 鮫成不良。
45-23	直筒 壺	14.4 7.8	底部丸底扁平底。口辺部や内窓外傾。底部周縁部を有する。	内) ロクロココナデ。 外) ロクロココナデ。底部回転ヘラキリの後ナゲ調整。	回転実測。No.22-IV区。 胎土色調にぶい黄褐色(10YR7/4), 鮫成不良。
45-24	直筒 壺	(15.4) 3.5	底部平底。器肉厚い。口辺部内外外傾、口唇部極端か外反する。	内) ロクロココナデ。 外) ロクロココナデ。底部回転ヘラケズリ。	回転実測。No.45・55。 胎土色調暗白色(5G7/1)。
45-25	直筒 壺	(11.4) 2.9 (7.6)	底部あげ底気味。胎形を呈する。	内) ロクロココナデ。 外) ロクロココナデ。底部回転ヘラキリの後、底部周縁2段の回転ヘラケズリ。	回転実測B. IV区。 胎土色調暗灰色(5G6/1)。小さな黒斑を有する。
45-26	直筒 壺	(13.2) 4.5 (8.3)	底部平底。底部周縁器肉非常に薄い。口辺部内外外傾する。	内) ロクロココナデ。 外) ロクロココナデ。底部回転ヘラキリの後ナゲ調整。	回転実測B. No.153-154-IV区。 胎土色調暗灰色(5P6/1)。
45-27	直筒 壺	(13.1) 2.9 (5.5)	底部平底。底部器肉厚く、口辺部内外外傾する。	内) ロクロココナデ。 外) ロクロココナデ。底部回転糸切り。	回転実測B. No.7-IV区。 胎土色調暗灰色(10BG6/1)。火摩残る。
45-28	直筒 壺	(13.1) 2.9 (5.5)	底部平底。器肉薄く、口辺部内外外傾、口唇部外反する。	内) ロクロココナデ。 外) ロクロココナデ。底部回転糸切り。	回転実測B. No.169-IV区。 胎土色調暗灰色(5BG6/1)。火摩残る。
45-29	直筒 壺	(13.3) 3.9 (5.2)	底部平底。底部周縁部を有する。口辺部内外外傾。	内) ロクロココナデ。 外) ロクロココナデ。底部回転糸切り。	回転実測B. No.17-18-IV区。 胎土色調暗灰色(5BG6/1)。火摩残る。
45-30	直筒 壺	— (5.0) (5.2)	貼り付け高台。	内・外面共にロクロココナデ。	回転実測B. IV区。 胎土色調暗灰色(5G6/1)。火摩残る。
45-31	直筒 壺	(1.1) (9.0)	貼り付け高台。	内・外面共にロクロココナデ。	回転実測B. IV区。 胎土色調にぶい黄褐色(10YR5/4), 鮫成不良。
45-32	直筒 壺	13.3 2.3 (1.5) (4.0)	満み部微状を呈し、かえりを有する。	内・外面ロクロココナデ、外面天井部回転ヘラケズリの後、満み部貼り付け。	回転実測A. No.15-16-IV区。 胎土色調暗白色(S7Y7/2)。外面胡麻状の自然剥離付着。
45-33	直筒 壺	13.1 2.3 (1.5) (4.0)	満み部微状を呈し、器端部屈曲する。	内・外面ロクロココナデ、外面天井部回転ヘラケズリの後、満み部貼り付け。	回転実測A. No.169-IV区。胎土色調明暗灰色(5B7/1)。
45-34	直筒 壺	(13.5) 3.6 (4.0)	満み部微状を呈し、器端部屈曲する。	内・外面ロクロココナデ、外面天井部回転ヘラケズリの後、満み部貼り付け。	回転実測B. No.169-IV区。 胎土色調明暗灰色(5P7/1)。
45-35	直筒 壺	13.1 2.3 (1.5) (4.0)	満み部微状を呈すると思われ、器端部で屈曲する。	内・外面ロクロココナデ、外面天井部回転ヘラケズリの後、満み部貼り付け。	完全実測。No.4-5-10-169。 胎土色調暗青灰色(5B7/1)。
45-36	直筒 壺	(2.1) (4.7)	満み部微状を呈すると思われ、器端部で屈曲する。	内・外面ロクロココナデ、外面天井部回転ヘラケズリの後、満み部貼り付け。	回転実測B. No.8-9-11-IV区。胎土色調暗青灰色(5B7/1)。
45-37	直筒 壺	(2.1) (4.7)	満み部微状を呈する。	外面天井部回転ヘラケズリの後、満み部貼り付け。	回転実測B. 混合。
45-38	直筒 壺	(1.6) (1.6) (2.8)	天井部から腹部にかけ平底で、器端部長く屈曲する。	内・外面ロクロココナデ。	回転実測B. IV区。 胎土色調暗青灰色(5PB6/1)。
45-39	直筒 壺	(1.5) (1.6) (2.8)	満み部宝珠形を呈する。		破片実測。IV区。 胎土色調暗青灰色(5PB4/1)。
45-40	直筒 壺	(1.6) (2.5)	満み部宝珠形を呈する。		破片実測。No.67。 胎土色調暗青灰色(5PB5/1)。
45-41	直筒 壺	(8.0) (9.9)	器底「ハ」の字状に外反する。	内) 不規黑色研磨、肩部磨拭を著しく調整不明。 外) 器部底面のヘラミガキ。	完全実測。No.129。 胎土色調深褐色(7.5YR6/6)。

脚付壺と思われる44-16は小片であり、完全に還元焼成がなされず器面青灰色(5B%)、芯灰赤色(7.5R%)で全容は知り得ない。小型短頸壺44-17はヤッコ型を呈し、肩部強い屈曲を持って張り出す。胎土色調暗青灰色(5B%)であり、44-18は胎土色調暗青灰色(5BG%)で直口壺、もしくはカップ型壺の口縁部である。壺44-19・20・21はいずれも全器形を知り得ないが、19は縁口縁部で、口縁端部に面取りが施され、焼成が甘い。20は底部周縁の破片である。21は口縁部・胴上部片で、口唇部断面三角形を呈し、頭部外面振格子状の叩き目整形の後ロクロココナデ、胴部振格子目状の叩き目整形が施されている。ここで須恵器の壺と壺の区別の不鮮明さを痛感する次第で、從来の器種名に依存する所が多く、用途・形態と主觀に基づく区別がなされているが、ここでは高台の有無、頸部のくびれ等によって壺と壺を区別した。



第46図 第8号古墳出土土器拓影図(1)



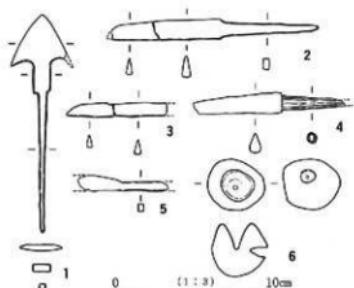
第47図 第8号古墳出土土器拓影図(2)

坏は45-21-31の10個体が図示し得た。

22・23は焼成甘く、胎土色調はにぶい褐色(7, 5YR %)、底部周縁で段を有し、口辺部器肉厚く、やや内凹外傾気味で、底部回転ヘラキリの後ナゲ調整。

24は胎土色調は灰白色(5GY %)で器肉厚く、口辺部は内凹外傾し口唇部で僅かに外反する。25は青灰色(5B %)で小さなガラス質の黒斑を有し、箱型を呈する。底部回転ヘラキリ、底部周縁

ヘラケズリが施されている。26は胎土色調青灰色(5PB %)で底部回転ヘラキリ、底部周縁ヘラケズリが施されている。口辺部器肉薄い。27・28・29は底部回転糸切り底で、火薙を有することから、多量生産の行われた坏と言えよう。30・31は高台付坏で、30は胎土色調緑灰色(5G %)で、底部周縁から口辺にかけて強い屈曲を有する。31は焼成甘くにぶい黄褐色(10YR %)で、貼り付け高台に特異な形状を示す。他の器種とも考えられる。以上、坏において底部離し技法に回転ヘラキリ、回転ヘラキリの後底部周縁ヘラケズリ、回転糸切りの3技法の坏がIV区埴籠に共存しており、坏底部の技法から7世纪末



第48図 第8号古墳出土金属器・石器実測図

~9世纪初頭まで、なんらかの目的で第8号古墳が使用されたことを物語るものであろう。

蓋は44-32-40の9個体が図示し得た。32は胎土色調灰白色(5Y %)で胡麻状に自然釉が付着、小さなガラス質の黒斑を有し、摘み部皿状で、天井部回転ヘラケズリ、かえりを有し、前田編年IV期(堤 1987)に相当する。33-37は胎土色調明青灰色~明紫灰色(5B %~5P %)であり、摘み部径が大きく皿状で、裾端部にかえりを有せず、5個体とも形状寸法・胎土共に類似しており同窯で焼かれたと考えられ、前田編年IV期にみられる。38は蓋の傾斜が少なく、胎土色調暗青灰色(5B %)で裾端部屈曲が長く、坏蓋以外の蓋とも考えられる。39-40は蓋の摘み部破片であり、宝珠形を呈する。以上蓋において前田編年をもとに考えるならば、32のかえりを有する皿状の蓋は8世纪前半で消滅し、33-37の皿状の摘みを有し、かえりを有さない蓋は8世纪前半に出現をみ、39-40の宝珠形の摘み部は8世纪代に出土を見るが、明確な宝珠形は中期以降と考えられよう。以上、蓋においても坏同様、一時期の蓋のみではなく8世纪代の形式の異なる蓋が共存しており、墓前祭の継続を物語る貴重な資料といえよう。また、44-41土師器高坏脚部は坏内部面黑色研磨が施されている。

拓影図において46-1～4は須恵器窓口縁部破片である。1は口唇部断面三角形を呈し、8本1組の櫛描波状文が2帯施文され、2・3は口唇部断面三角形を呈し、同一個体の可能性がある。4は口唇部に面取りがなされ、端部に1条の凸帶を有する。

46-7～23の須恵器破片は打圧成形によって残る叩き目文について区分を行った。平行叩き目文の残るものは5・6・7・10・11・20で、内面に同心円文の残るものは7がある。振格子状の叩き目文の残るものは9・12・14・15・16・17・18・22・23で、内面に僅かに同心円文の残る23がある。13は長方形を3つ重ねた形の叩き目文が残り、特異な例としてあげられよう。また、ガラス質の黒斑を有するものは6・9・10・14・15・17・18と多く、胎土色調は暗青灰～暗紫灰色であり石附窓址出土の須恵器に類似していることから、これらの須恵器は在地で焼かれたこと推測されよう。また、長頸棘輪被張平造三角形鐵(48-1)が出土している。

以上、本古墳の所産期は構造形式から7世紀以降と考えられるが、IV区墳墓の須恵器出土から9世紀初頭まではなんらかの形で使用されたと考えられる。
(羽田)

註(1) 著者 浩氏の御教示による

註(2) 佐久市教育委員会 1981 「石附窓跡発掘調査報告書」

註(3) 前海社 2

7) 長峯古墳群出土の金属器について

本古墳群出土の金属器は各古墳出土遺物の項で詳細に述べているため、本古墳の副葬品として傾向を述べてみようと思う。副葬品としては極めて出土が少なく、その原因が盗掘によるためか、もともと副葬品が少なかったのか現状では判断が困難である。特筆されるのは全長約100cmの直刀が第6号古墳より出土し、なお鉄が2個出土したことから2振は副葬したと考えられる。小刀は第5・7号古墳より1振ずつ出土した。鉄鏃は10本出土し、第7号古墳玄室内の7本は束になっていたと考えられ、いずれも長頸鐵であり、完形品には長頸棘輪被張無片刃箭式鐵があった。馬具は第7号古墳より轡が出土したが、衡が2本検出されていることと、引手の長さが15cmと10.7cmと違い2個の轡が副葬されていた可能性がある。
(羽田)

第11表 長峯古墳群出土金属器一覧表(1)

番号 番号	名称	遺構名	材質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	欠損状態	備考
13-1	耳環	OT1 玄室棺床面	銅	外径 3.0	内径 1.45	0.7	46.7×0.8	22.4	完形 芯に鋼延繩、銀張り耳環。No.1。
14-3	刀子	OT1 玄室棺床面	鉄	4.0 (4.0)	1.1 (1.1)	0.5			刀部残存 刃面平刃。No.2。
22-1	直刀	OT1 玄室棺床面	鉄	矛頭33 茎部13 裏部23	刃部23 茎部23 裏部23	0.9 0.5		光形	鉄はやや屈曲をもち、平刃、背平齊、背闊有し、d0.3cmの目釘孔を1孔有する。No.4。
	鉄	OT1 玄室棺床面	鉄	5.8×3.0		0.5		完形	側脚形。直刀(No.4)に装着。
	鎧元	OT1 玄室棺床面	鉄	4.7×1.6	2.1	0.1		完形	長横円形。鍔金不明。直刀(No.4)の鞘に装着。
	鉤	OT1 玄室棺床面	鉄	1.95×0.5	1.4	0.15		光形	長横円形。直刀(No.4)に装着。
	尾金具	OT1 玄室棺床面	銅					完形	2個1対で残る。鍔金不明。直刀(No.4)の鞘に装着。
	資金具	OT1 玄室棺床面	銅	4.7×2.05	0.35	0.2		完形	資金具の間に1個残存。鍔金不明。直刀(No.4)の鞘に装着。
22-2	丸元?	OT1 玄室棺床面	鉄	3.7×2.1	4.0	0.1		略光形	断面横円形。No.6。
22-3	鉄	OT1 玄室棺床面	鉄	5.3×4.0		0.4		完形	側脚形。No.7。
22-4	資金具	OT1 玄室棺床面下	銅	4.4×1.7	0.30	0.2		完形	長横円形。No.4の鞘に装着されていたものと思われる。No.5。
22-5	棘輪	OT1 玄室棺床面	銅	5.2	3.6	0.17 -0.22		光形	断面横円形を呈する。No.4の鞘に装着されていたものと思われる。No.6。
22-6	刀子	OT1 玄室棺床直下	鉄	(5.9)	刀頭G.D. 茎部G.D. 裏部G.D.	厚 0.4 0.35		刀部先端 茎部先端 裏部先端	背闊有する。
48-1	鉄	OT8 IV区墳丘面下	鉄	最長2.2 茎部2.1 裏部2.1 0.4	刃部0.4 茎部0.3 裏部0.3	0.4 0.35 0.35		完形	長頸棘輪被張平造三角形鐵。No.51。
48-2	刀子	OT8 玄室棺床面	鉄	最長2.7 茎部2.0 裏部2.0	刃部0.2 茎部0.2 裏部0.2	0.35 0.35 0.35		刀部先端僅存	刀部平刃。背闊、刃闊有し、茎部側の波浪痕(木綿縫)有する。No.2。
48-3	刀子	OT8 玄室室内	鉄	(6.2)	0.9	0.35		刀部残存	刀部平刃。
48-4	刀子	OT8 玄室棺床面	鉄	(9.4)	0.12-0.56	0.65-0.83		刀部先端 茎部先端	背闊、刃闊有し、刃部背丸。茎部側の波浪痕(木綿縫)有する。No.1。
48-5	不明鉄 製品	OT8 玄室棺床面	鉄	45.5	0.8-0.9	0.35			刀子の可能性有り。No.14。

第12表 長峯古墳群出土金属器一覧表(2)

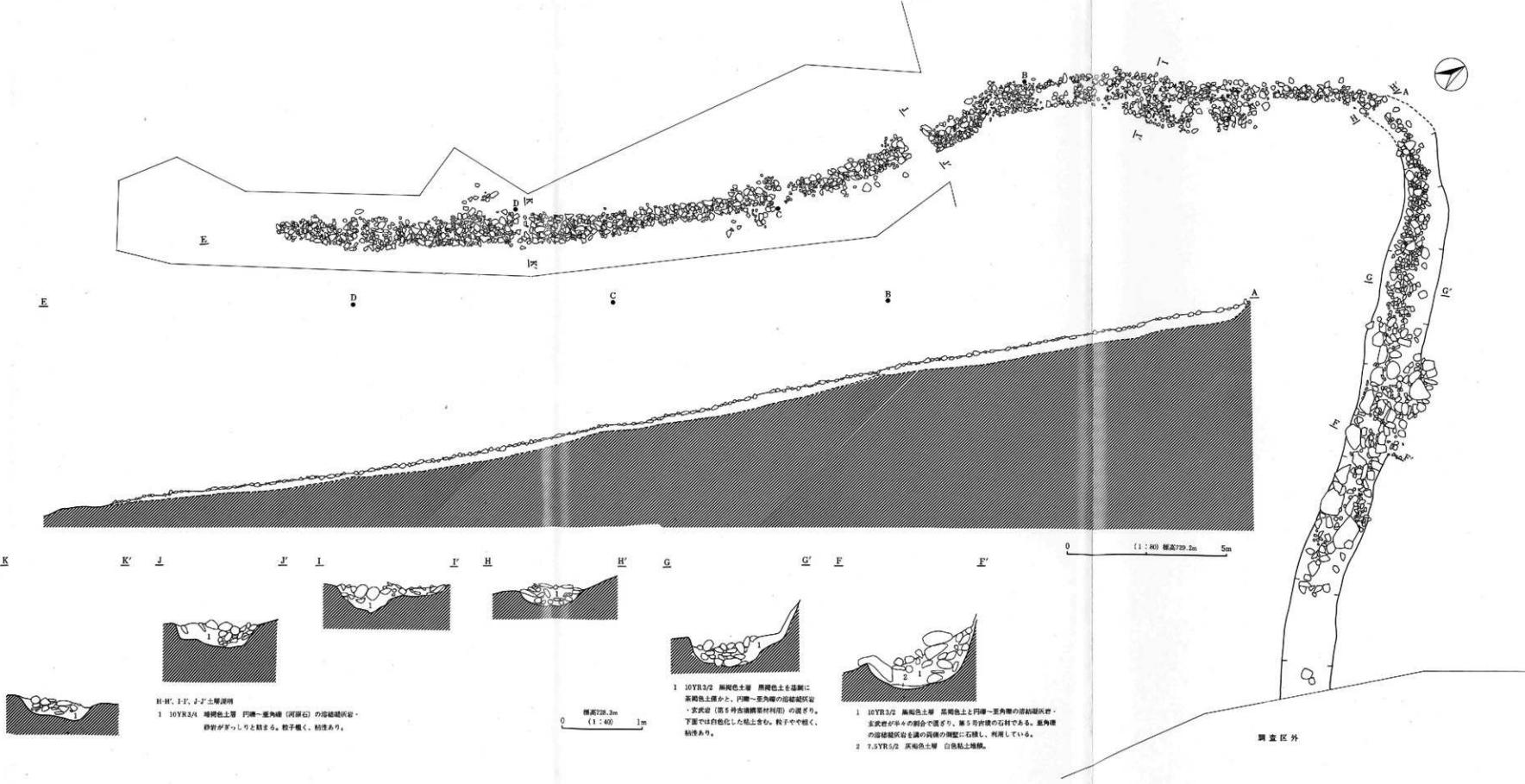
件名 番号	名称	遺構名	材質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	欠損状態	備考
29-1	小刀	OT5 玄室棺床面	鉄	刃部 7.6 厚7.1	刀身 7.5 厚0.4	刀身先端 1.35	刃部中～先端欠 基部に1孔の目釘孔有し。刃闊・背闊有する。刃部平刃。No.34。		
把元	OT5 玄室棺床面	鉄	1.5×1.2	1.8	0.2		略彎形	小刀(No.34)に接着。	
29-2	鍔	OT5 玄室棺床面	鉄	3.9	頭部 (0.65) (0.4)	頭部 0.65 厚0.4	頭部欠	堅快平造三角形鍔。	
29-3	刀子	OT5 玄室棺床面	鉄	(8.8)	(1.3)	刀身 0.65	刀部略残存	刃部平刃。No.33。	
29-4	刀子	OT5 玄室棺床面	鉄	(6.9)	刃部 0.65	刃部 0.65	刃部略残存	No.33と同一個体の可能性有り。刃闊・背闊有する。No.34。	
29-5	刀子	OT5 玄室棺床面	鉄	(7.9)	(1.1)	刃部 0.65	刃部残存	刃部平刃。No.34。	
37-10	耳環	OT7 玄室内	銅	3.05	内径 1.6	0.7×0.8	24.1	完形	芯に鋼鋸跡。紙張り耳環。
37-11	耳環	OT7 玄室棺床面	銅	3.15	内径 1.6	0.7×0.9	22.8	完形	芯に鋼鋸跡。紙張り耳環。No.11。
37-12	耳環	OT7 玄室内	銅	3.5	外径 1.4	0.05	11.4	完形	断面Φ0.9×1.0の空洞。鍍金。
37-13	耳環	OT7 玄室棺床面	銅	3.3	外径 1.6			断面Φ0.8×0.9の空洞。鍍金。	No.10。
37-14	耳環	OT7 玄室棺床面	銅	3.2	内径 1.6		16.5	完形	断面Φ0.9×1.0の空洞。鍍金。No.8。
38-1	小刀	OT7 玄室棺床面	鉄	刃部 15.5	刃部 2.2	刃部 0.6	2.4	完形	茎部と刃部元中央にΦ0.15～0.2cmの穿孔を1個づつ有する。背闊・刃闊有し。刃部平刃。No.2。
38-2	鍔	OT7 玄室棺床面	鉄	6.0	頭部 0.2	頭部 0.6	頭部 0.4	頭部先端欠	長頭鍔蓋は開無片刃削式鍔。No.12。
38-3	鍔	OT7 玄室棺床面	鉄	6.6	頭部 0.2	頭部 0.6	頭部先端欠	長頭鍔蓋は開無片刃削式鍔。No.13。	
38-4	鍔	OT7 玄室棺床面下	鉄	(8.0)	0.75-0.7	(0.4)		尾被鉢残存	長頭鍔と思われる。
38-5	鍔	OT7 玄室棺床面下	鉄	(8.65)	(0.6)	(0.4)		頭被鉢・鍔頭身 形残存	長頭闊無片刃削式鍔。
38-6	鍔	OT7 玄室棺床面	鉄	(7.1)	頭部 0.2	頭部 0.6	頭部 0.35	頭部半欠、鍔身 欠	鍔被鉢長頭鍔。No.14。
38-7	鍔	OT7 玄室棺床面	鉄	頭部 11.5	頭部 0.3	頭部 0.35	頭部 0.4	頭部半欠、鍔身 欠	鍔被鉢長頭鍔。茎部に矢柄の着装痕を有する。No.3。
38-8	鍔	OT7 玄室棺床面	鉄	(7.5)	(0.6-0.7)	(0.4)		頭部半平、鍔身 欠	鍔被鉢長頭鍔。No.9。
38-9	鍔	OT7	鉄	(3.7)	(1.8)	(0.2)		頭部無跡残存	堅快平造五角形鍔。鍔身中央Φ0.2cm穿孔1つ有す。
38-10	骨	OT7 玄室棺床面	鉄					右半欠	術(喉)両端に圓をもつ棒状(7cm)のものを2本連結。引手は術に環をもって連結、手握側の環は引手の長軸に向かって外側にやや斜角に曲がる。長さ15cm。鍔部は環狀で術と連結。2本の棒状のものが鍔部に接着されており、面堅とを連結させる底跡と思われる。Φ6.8×6.0mmの標査。No.1。
38-11	骨	OT7 玄室棺床面	鉄					左半欠	術(喉)両端に圓をもつ棒状(6cm)のものを2本連結。引手は術に環をもって連結、手握側の環は引手の長軸に向かって外側にやや斜角に曲がる。長さ10.7cm。鍔部は環狀で術と連結。Φ7×6.1cmの標査。No.1とセッタの可能性有るが、引手の長さに差がある。No.1。
38-12	釘?	OT7	鉄	(4.4)	(0.7)	(0.3)			木の繊維が釘と直交する形で残る。
38-13	釘?	OT7 玄室内	鉄	(3.0)					木の繊維が釘と直交する形で残る。
38-14	釘?	OT7	鉄	(3.4)	(0.7)	(0.3)			木の繊維が釘と平行する形で残る。
38-15	釘?	OT7	鉄	3.9					角釘で頭が潰れている。
38-16	不明 鉄製品	OT7 田舎塗	鉄						

第2節 その他の遺構と遺物

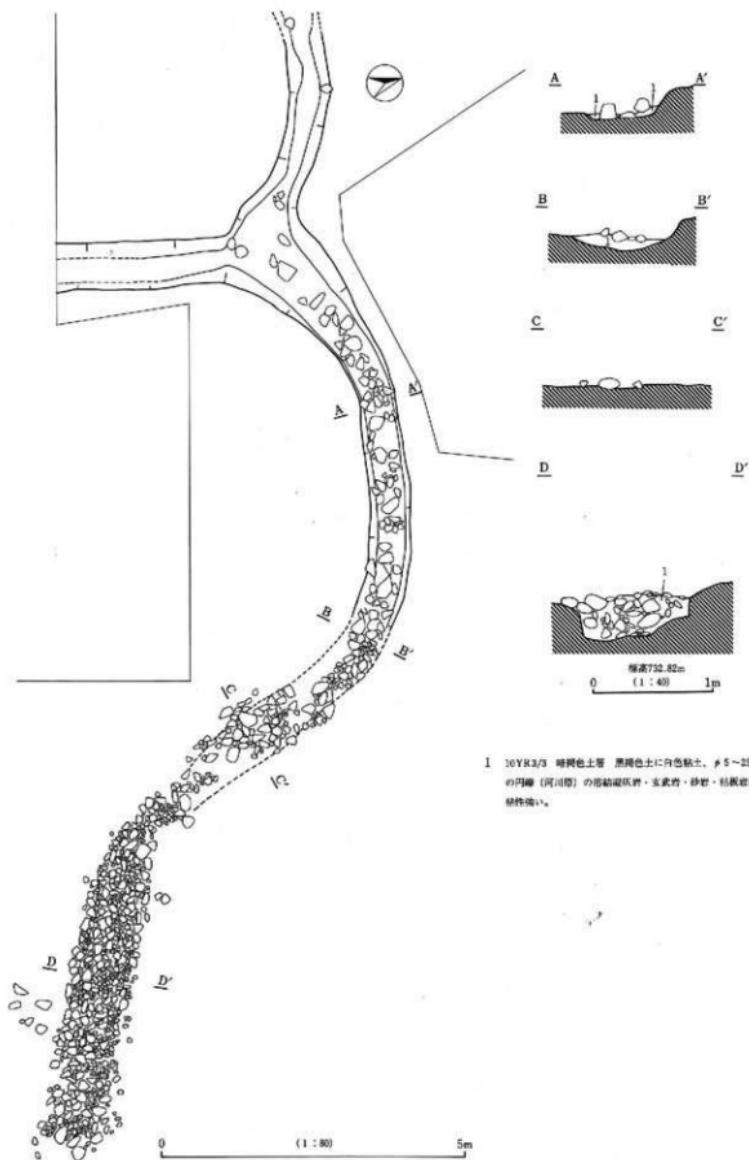
1) 磨詰め溝 (第49~52図、図版 十五)

本古墳群内より4基検出された。第1・2・3号磨詰め溝は現代の山地開墾の折の境界線とほぼ一致して走っていた。また、長峯古墳群内は強粘土層が堆積しており、暗渠排水として用いた可能性も考えられる。

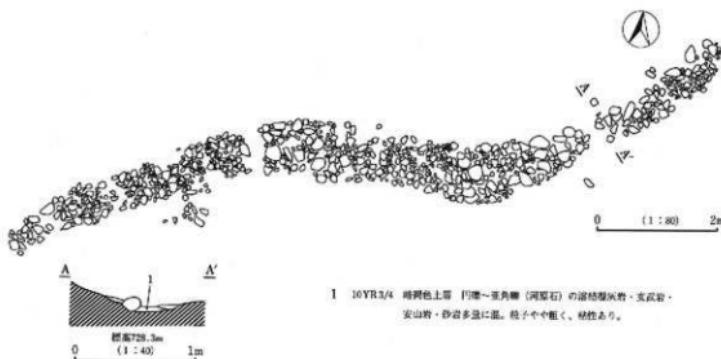
第1号磨詰め溝は約40mの長さで調査され、第7号古墳に向かって伸び、手前で直角に屈曲し、第5号古墳の



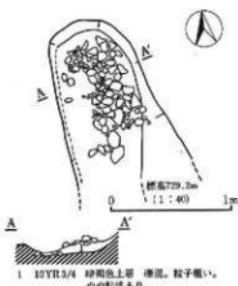
第49図 第1号詰詰溝実測図



第50図 第3号標詰め満実測図



第51図 第2号礫詰め溝実測図



第52図 第4号礫詰め溝実測図

前を東に向かって走っていた。比高差は約5mを測り、幅80~100cm、深さ20~40cmの掘り込みを持った溝であり、中には主に河原石の玄武岩、溶結凝灰岩が詰められ、第5号古墳の手前では、古墳の石も利用されていた。

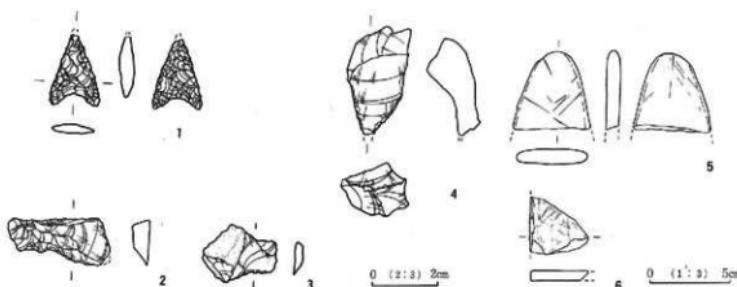
第2号礫詰め溝は約12mの長さを測り、第7号古墳の手前を走っていた。幅は約1m、深さ5~10cmの掘り込みを有し、中に玄武岩・砂岩・溶結凝灰岩が詰まっていた。

第3号礫詰め溝は第8号古墳の手前から西に約16m走り、そこから2股に分かれ、一方は南下し、他方は第5号古墳に向かって走っていた。幅は約1m、深さ5~10cmの掘り込みをもって、第8号古墳手前は ϕ 5~25cmの河原石が詰まり、2股に分かれた先は、溝の中に礫が散在する程度であった。第4号礫詰め溝は用途・性格不明である。
(羽田)

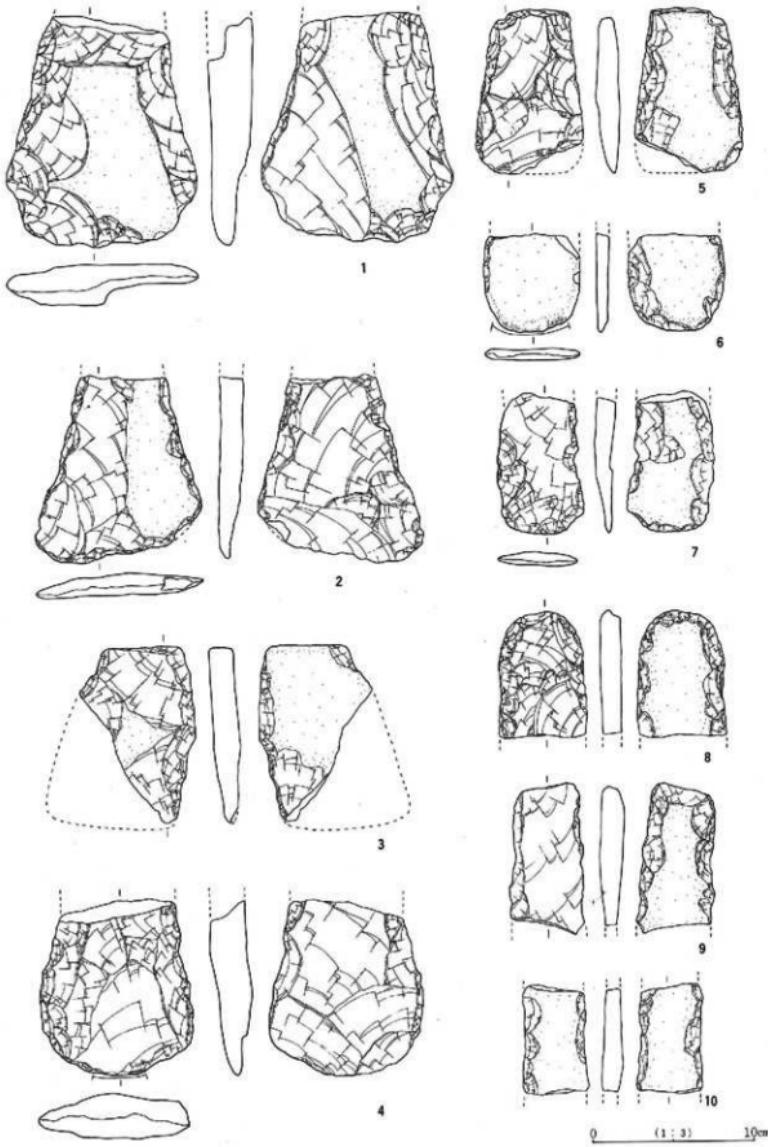
2) 長峯古墳群内出土遺物

石器（第53~55図、図版十九）

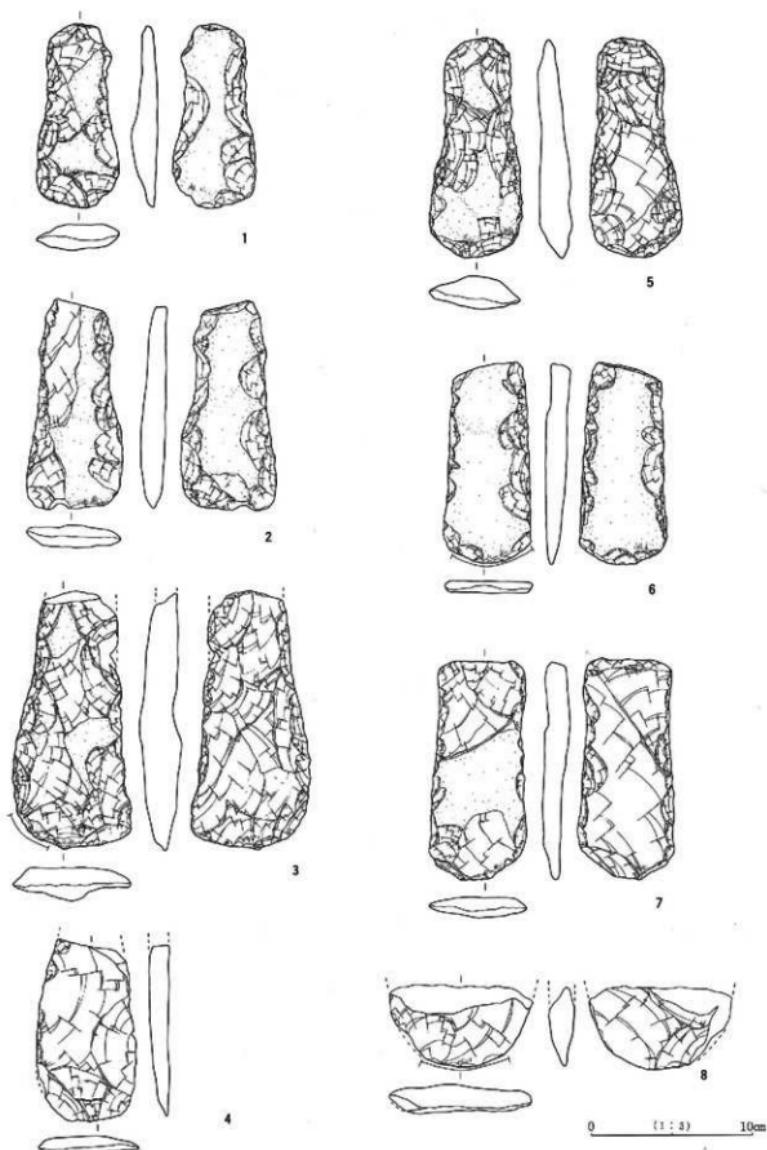
本古墳群内出土の石器は石鏃1点、使用痕のある剣片としたもの3点、砥石2点、打製石斧18点の計24点である。



第53図 長峯古墳群内出土石器実測図〈1〉



第54図 長峯古墳群内出土石器実測図(2)



第55図 長峯古墳群内出土石器実測図(3)

第13表 長峯古墳群出土石器観察表

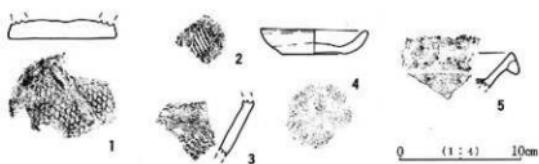
件番号	種別	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	欠損状態	備考
53-1	打製石鏃	黒曜石	< 2.2	1.4	0.4	< 6.5	先端僅欠	凹基無基盤。第1号古墳II区墳丘
53-2	使用痕ある 剥片	黒曜石	1.3	3.1	0.5	2.3		二側縁に使用痕あり、刃部角大。第7号古墳I区表土
53-3	使用痕ある 剥片	黒曜石	< 3.1	1.8	1.4	< 6.45		二側縁に使用痕あり、刃部見通し面は弧を描く。 第7号古墳I区表土
53-4	使用痕ある 剥片	黒曜石	1.8	2.3	0.25	2.75		一側縁に使用痕あり、刃部断面は内凸気味。 第7号古墳I区表土
53-5	砥石	砂岩	< 4.8	4.8	0.9	< 26.95	半分欠損	正・裏・片面間に擦過痕あり。手持り砥石。 第1号古墳II区表土
53-6	砥石	泥岩	< 3.4	< 3.6	0.6	< 13.5	一部残存	正面に斜位に細かい擦過痕が彌散。鉄器に使用か? 正・裏・片面に擦過痕あり。
54-1	打製石斧	玄武岩	14.0	11.8	2.7	< 498.05	基部欠	彫形。円刃片刃形面で擦耗。刃こぼれ有り。表・裏面に擦耗状の自然面を残す。第7号古墳II区表土
54-2	打製石斧	玄武岩	11.2	10.0	1.4	< 217.9	基部欠 刃部欠	彫形。偏刃片刃形面。正面に擦耗状の自然面を残す。 第6号古墳IV区表土
54-3	打製石斧	玄武岩	10.8	6.7	1.5	< 139.5	刃部・左側 基部欠	表・裏面に自然面を残す。第1号古墳II区表土
54-4	打製石斧	玄武岩	10.8	9.3	2.3	< 328.3	基部欠	円刃片刃形面で、磨耗底著しい。第1号古墳II区表土
54-5	打製石斧	玄武岩	9.8	6.5	1.4	< 147.55	刃部半欠	彫形。裏面に自然面を多く残す。刃部に刃こぼれ有り。 第8号古墳II区表土
54-6	打製石斧	砂岩	< 6.0	5.8	0.7	< 53.0	基部欠	円刃片刃形面で擦耗痕あり。表・裏面に自然面を多く残す。第1号古墳II区表土
54-7	打製石斧	玄武岩	< 8.6	4.9	1.2	< 71.4	基部欠	彫形。円刃片刃形面。裏面に自然面を多く残す。 第1号古墳IV区表土
54-8	打製石斧	玄武岩	< 7.7	5.4	1.2	< 104.25	刃部欠	裏面に自然面を多く残す。第6号古墳II区表土
54-9	打製石斧	玄武岩	< 9.3	4.6	1.5	< 74.7	刃部欠	彫形。裏面に自然面を多く残す。第7号古墳II区表土
54-10	打製石斧	玄武岩	< 6.5	3.8	1.3	< 54.2	刃部欠	彫形。裏面に自然面を多く残す。第1号古墳II区表土
55-1	打製石斧	玄武岩	11.3	5.1	1.7	< 106.4	基部僅欠	彫形。円刃片刃形面で刃こぼれ有り。裏面に自然面を多く残す。安山岩製よりも有り。第8号古墳II区表土
55-2	打製石斧	玄武岩	13.0	5.8	1.5	129.85	完全	彫形。円刃片刃形面で刃こぼれ有り。裏面に自然面を多く残す。安山岩製よりも有り。第7号古墳II区表土
55-3	打製石斧	玄武岩	< 15.8	7.1	2.5	< 306.25	基部僅欠	彫形。裏面に自然面で刃こぼれ有り。裏面に自然面を多く残す。安山岩製よりも有り。第7号古墳II区表土
55-4	打製石斧	安山岩	< 11.2	6.1	1.2	< 121.75	基部欠	彫形。円刃片刃形面。裏面に自然面を残す。裏面に刃部僅欠に抉り有り。第1号古墳II区表土
55-5	打製石斧	玄武岩	13.5	5.6	2.0	174.5	完全	彫形。裏面に自然面を多く残す。第7号古墳II区表土
55-6	打製石斧	玄武岩	12.2	5.3	1.3	127.1	完全	彫形。裏面に自然面を多く残す。第7号古墳II区表土
55-7	打製石斧	玄武岩	13.6	6.0	1.5	297.1	完全	彫形。円刃片刃形面で刃こぼれ有り。裏面に自然面を多く残す。第6号古墳II区表土
55-8	打製石斧	玄武岩	< 4.5	8.8	1.5	< 73.65	刃部残存	円刃片刃形面で擦耗。刃こぼれ痕著しい。 第6号古墳II区表土

石鎚(53-1)は黒曜石製で先端部を僅かに欠損するが、基部にしっかりした抉りを有する凹基無基盤である。使用痕のある剥片としたものは53-2~4で、調整加工により作出された刃部は持たないが、使用痕と考えられる細かい刃こぼれの存在により石器の範疇に含めたものであり、本資料は全て黒曜石の剥片を使用している。53-2は正面図左側縁を除く側縁に刃こぼれが観察でき、左下側縁の一部には僅かに加工が施されている。これらの刃部角は大きく、搔器様の使用法が考えられる。53-3は略三角形の左右側縁に、53-4は右下側縁にそれぞれ使用痕が観察でき、刃部角は小さく、削器様の使用法が考えられる。

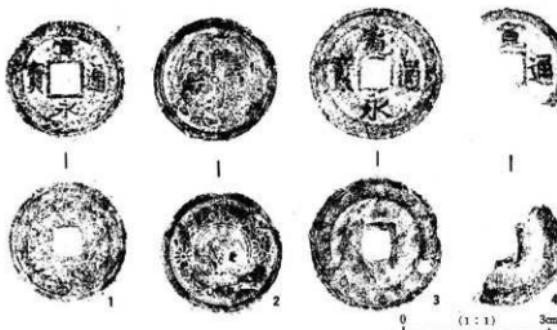
砥石53-5は半分欠損しているが、断面偏平橢円形の小振りの砂岩を使用しており、正・裏面に太く深い擦過痕と細く深い擦過痕が観察でき、右側面も僅かに使用されている。53-6は薄手板状を呈すると考えられる泥岩を使用しており、正面に斜位の細く深い擦過痕が顕著である。使用痕から考えて、鉄器のような鋭利なものに使用されたと想定できる。

打製石斧には、撥形(54-1~4)と短冊形(54-5~10、55-1~7)が在り、撥形を呈するものは他に比してその大きさが目立つ。刃部を観ると全て片刃で、55-6以外は外刃が内彎しており、その正面図は偏刃(54-2)、直刃(55-2)、円刃(54-1・3~7、55-1~5・7・8)の三形態に分けられ、円刃が圧倒的に多く、そのほとんどに使用痕と考えられる磨耗痕・線状擦過痕が観察できる。

材質は砂岩製の54-3・6、安山岩製の55-4を除く全てが玄武岩製で、板状剝離した石核の周縁に加工を施しただけのものが大半である。



第56図 長峯古墳群内出土土器実測図及び拓影図



第57図 長峯古墳群内出土貨幣拓影図

辺遺跡に關係する縄文時代の遺物として解するのが自然であろう。但し53—6 の砥石は使用痕から觀て、鐵器出現以降のものと考えておきたい。

陶磁器（第56—4・5）

56—4 は第7号古墳I区墳丘表土中より出土したかわらけであり、ロクロ整形による皿で、底部は回転糸切りである。56—5 は第8号古墳墳丘上南斜面より出土した常滑の口部資料であり、内面に縦位の刻目を持ち、擂鉢になると考えられる。

貨幣（第57図）

1・3・4 は寛永通宝であり、2 は「大正十三年」の銘を持つ一錢銅貨である。1 は長峯古墳群内で表面採集されたもので、2 は第1号古墳I区表土、3 は第7号古墳石室内、4 は第6号古墳内より出土したものである。

これら中世以降の遺物は、古墳盜掘時に残されたものか、あるいは露出していた塚に対する何気ない人的心理に伴う供物として解しておきたい。

（藤原）

これらの石器は全て古墳墳丘上の投げ込まれた浮石中に混在するか、長峯古墳群内で表面採集されたもので、古墳との積極的な関連性は極めて低い。また、第1号古墳より出土した網代底の残る底部（56—1）、単節LR 繩文を地文にス線により縦位区画された胴部片（56—2）、磨消繩文の施された胴部片（56—3）などの繩文土器片や、長峯古墳群周辺に位置する長峯遺跡、大間遺跡、内山安坂遺跡、内山香坂A 遺跡などの繩文時代遺跡の存在も考慮すると、長峯古墳群内出土の石器は直接古墳に関与せず、周辺遺跡に關係する可能性がある。

第IV章 調査のまとめ

第1節 遺構

今回調査対象になった古墳は、昭和59年佐久市教育委員会で行った長峯古墳群の分布調査による368—1～7号古墳である。そのうち368—2・3号古墳は調査の結果、古墳跡とは認められなかった。368—4号古墳は確認できなかった。368—5号古墳は368—7号古墳の東側に近接した位置から検出され、分布調査の位置より、南に約15mずれていた。尚、新規に8号古墳が5号古墳の東側約15m離れた農道南側より検出された。また、7号古墳より真南に約140m離れた除外地より天井石の露出した古墳が新規に確認された。以上、五古墳について調査を行ったが、盃掘・山地開墾・長道新設等により破壊をうけており、完存古墳は現存しなかった。ここでは遺構を中心につらつつかの特徴を示す。

まず、長峯古墳群の古墳分布を地形的に分けると2つに分けられる。

A類一馬蹄状に尾根の広がる、平坦地からみて左側最深部に位置する古墳。

第5・7・8・9号古墳。

B類一馬蹄状に尾根の広がる中央に僅かな隆起を有し、小さな沢になっている両側で、平坦地からみて右側最深部に位置する古墳。

第1・4・6号古墳。

しかしながら墓道の検出されなかった現状では、各古墳の因果関係は憶測の域を脱し得ない。

次に、外部構造からの形式分類を行ってみると、第1・5・6・7・8号古墳の計測値は主軸長6.56～10.03m直交軸長7.50～11.56mの小さな円墳である。墳丘形態を細分すると2型態に分類できる。

A型態—古墳正面（墳丘III、IV区外周）に外護列石風の石積みが残り、外周と石室裏込めとの間に土を主体とした封土。第5・7・8号古墳。

B型態—封土上に土と積石塚風の礫を詰めた墳丘。第6号古墳。

いずれも、傾斜面上の古墳構築であるため、傾斜の強い部分が施され、墳丘の崩落を防ぐ構築方法と思われるが、この構築方法の違いは、時期の差・氏族の違い、単なる構築上の問題なのか、内部構造・遺物とも考え合せ留意したい。以上、外部構造において少差はあるが同形式であり、また、どの古墳も周溝を持たなかった。

内部構造及び石室裏込めについては、内部形式はいずれも横穴式両袖型玄門付石室である。石室形態を細分すると、奥壁において2形態ある。

A形態—1枚の板状の石を主に用いる。第1・5・8号古墳。

B形態—2枚以上の板状の石を縦積みにして用いる。第6・7号古墳。

裏込め方法を細分すると3分類できる。

a類—亜角礫の大きい石を外側に、中に石と土の混ざりをもって被覆。第5・6・8号古墳。

b類—亜～角礫の頭大の石と握り拳大の円礫（河原石）とを互層に積んで被覆。第7号古墳。

c類—亜～角礫の石を無作為に積んで被覆。第1号古墳。

棺床面について2分類できる。

a類—亜～角礫の石を敷き粗い平坦面を作り、その上に玉石を敷いて棺床面とした二重構造。

第1・6・7・8号古墳。

b類—亜～角礫の石を敷いて棺床面とした。第5号古墳。

第14表 長峯古墳群調査古墳一覧表

古墳名	第1号古墳	第6号古墳	第5号古墳	第7号古墳	第8号古墳
外 部 構 造	墳形 主軸長 (m) 面積 (m ²)	円墳 9.10 7.94	円墳 6.56	円墳 6.88	円墳 10.03 7.88
	外周形態	板石円形状に配置。	墳丘I、IV区を円形の板石風巻。 板石円形状に配置。	墳丘IV区2段石積、外護列 石風巻。	墳丘II、IV区2段石積外護 列石風巻。 北西沢区2段石積、外護列石風 巻。板石円形状に配置。
	封土	心土	心土表石	心土	心土
	備考	周邊なし。	前部の施設の可能性有 り。周邊なし。	周邊なし。	周邊なし。
石室 形態	形式 主軸方位 平面形 断面形 奥壁 天井石 玄門	横穴式兩袖型玄門付石室 N-15°-W 羽子板状 箱状 鏡石1枚、滑結嵌灰岩 滑結嵌灰岩(1)枚 滑結嵌灰岩(4)枚 滑結嵌灰岩2枚	横穴式兩袖型玄門付石室 N-4°-W 羽子板状 箱状 鏡石1枚、滑結嵌灰岩 滑結嵌灰岩(1)枚 滑結嵌灰岩(4)枚 滑結嵌灰岩2枚	横穴式兩袖型玄門付石室 N-5°-W 羽子板状 箱状 鏡石1枚、滑結嵌灰岩 滑結嵌灰岩(1)枚 滑結嵌灰岩(4)枚 滑結嵌灰岩2枚	横穴式兩袖型玄門付石室 N-1.5°-W 羽子板状 箱状 滑結嵌灰岩2個 滑結嵌灰岩(1)枚 滑結嵌灰岩(4)枚 滑結嵌灰岩2個
	壁石 玄門	滑結嵌灰岩 玄門より前方	滑結嵌灰岩1個	滑結嵌灰岩2個	滑結嵌灰岩1個
	蓋石				
	奥壁				
	天井石				
	玄門				
	壁石				
	玄門				
	蓋石				
	奥壁				
内 部 構 造	棺床面 支承骨 室高 玄門幅 支承石 奥壁高 奥壁厚 奥壁深	河原石敷石 河原石敷石下、亜角礫の 組い平坦面を作る。	河原石敷石 河原石敷石下、亜角礫の 組い平坦面を作る。	亞角礫の滑結嵌灰岩と河 原石用い、丁寧な平坦 面を作る。	河原石敷石 河原石敷石下、亜角礫 の組い平坦面を作る。
	石室 横 幅	(3.99) (3.85) (3.35)	<3.00> <3.66>	<3.57> <4.48>	<4.73> <4.08>
	室高 (m)	3.99 3.85 3.35	1.95 2.15 2.25	2.15 2.35 2.73	2.15 2.35 2.95
	玄門幅 (m)	1.37 1.43	1.30 1.21	1.30 1.53	1.37 1.97
	支承石 (m)	<0.99>	<1.59>	<1.18>	<1.58>
	奥壁高 (m)	1.22 1.09	0.84	1.25 1.16	1.15 0.98
石室 構築法	奥壁 側壁 横方	滑結嵌灰岩 玄武岩 河原石	滑結嵌灰岩 玄武岩、僅かに安山岩 河原石、河床礫	滑結嵌灰岩 玄武岩、僅かに安山岩 河原石	滑結嵌灰岩 玄武岩、僅かに安山岩 河原石
	加工	山石主体、僅かに割り石	山石主体、割り石	山石主体、割り石	山石主体、割り石
	側壁	丸壁 側壁 下段横積、上段横 積。	丸壁 側壁 下段横積、中段横 積、上段横 積。	丸壁 側壁 下段横積、上段横 積及び乱積	丸壁 側壁 下段横積、上段横 積及び乱積
	横方				
石室 内 装	密 度	亞角礫滑結嵌灰岩とに じぶ い黄褐色土色。	疊平な亞角礫の滑結嵌灰岩と 岩を外側に、中に疊し、黄 褐色土と亜角礫の滑結 嵌灰岩混。	亜角礫の滑結嵌灰岩と 黒褐色土色。	亜角礫の滑結嵌灰岩を 外側に、中に疊し、黄 褐色土と亜角礫の滑結 嵌灰岩混。
	開塞方法	疊積込み。	疊積込み。	疊積込み。	疊積込み。
備 考			棺床面、及び 棺床面下火熱を受けてい る。		
	指抜面河原 石20個提出 石質	砂岩14、輝緑岩2、滑結 嵌灰岩2、玄武岩1、真 岩1	砂岩10、玄武岩7、粘板 岩2、滑結嵌灰岩1		砂岩8、玄武岩7、滑結 嵌灰岩4、便砂岩1

以上、内部構造において大概類似しており、7世紀代の群集墳の特徴を表わしているが、奥壁使用の石の個数は時期区分の目安になると思われる。

古墳構築用の石材については、外周列石及び石室において、第1・5・6・7・8号古墳いずれも溶結凝灰岩が主に使われている。溶結凝灰岩は板状節理の発達し、軟質であることから、特に石室奥壁、側壁、袖石、楣石、樋石、天井石等に自然石(山石)、あるいは割り石を加工して使用している。この石の産地は内山峠の奇岩を作っている石であり、荒船山に影響された所ではどこにでも産し、長峯古墳群の周辺では露頭している所もあり、石材としての入手は容易であったと考えられる。棺床礫の玉石は河原石であり、滑津川(内山川)からの持ち込みと考えられるが、長峯古墳群に続く尾根、佐久平カントリーのクラブハウスの所在する、山の前面からは砂礫層が10m程堆積しており、溶結凝灰岩・玄武岩の円礫と砂の混ざりで、第6号古墳I・IV区塊丘積石塚風に積まれた礫層に類似していることから、古墳構築用材として使用したこととも考えられ、他の周囲の古墳群とも考え方留意したい。以上のことから、本古墳の造営に当たり、他地域からの搬入礫がないことから、連断ではあるが、この古墳群を造営した氏族は滑津川(内山川)下流の平坦地を生活の場とした人々と考えられよう。

石積み方法は第1・5・6・7・8号古墳とも同様で、墳丘外周は横積み・乱積みであり、石室玄室内1段目は縱積み、2段目は横積み、3段目は乱積みとなる傾向が看取できる。

尺度法においては、基本尺をどのように定めたかが問題になり、また時期決定の手懸かりになると思われるが、五古墳とも完存の調査ではなく、築造時における墳幅の確認が困難であり、第14表に記載した数値は我存値であることから、築造時の墳幅とどれだけの差をもつか判明できず、墳丘の規模からは、いずれの基本尺を使用したか判明できなかった。石室内の数値においても、一番築造時の旧状を留めている玄室長・玄室幅について調べたが基本尺を見い出すことはできなかった。以上のことから、從来佐久地方において7世紀以降の古墳が高麗尺使用とする説に、大尋・小尋の尺度、大化の薄葬令とも考え合せ疑問を持つ次第である。

以上、長峯古墳群の古墳築造時期は7世紀代以降と考えられるが、細かく新旧関係を究明するまでには至らなかつた。

註(1) 佐久市教育委員会 1972 『佐久市岩村田東一本柳古墳墓急発掘調査報告』

註(2) 第16号長峯古墳群調査古墳一覧表 参照。白倉盛男氏と抽出した20個について石質を調べたが、砂岩の円礫は含まれない。

註(3) 古墳構築の使用尺度には、東・前横尺23.1cm 東隕尺35cm、西脇尺24cm、高麗尺36.4cm、北周・南・庶尺29.6cm、大尋160~164cm

小尋150~154cmなどがある。

第2節 遺物

各古墳出土の遺物については、既にそれぞれ各古墳の項に記してある通りである。副葬品としての遺物が少なく、被葬者の時期を決定するには不充分であるが、第7号古墳石室内出土の鉄鎌38-2~8・馬具(轡)38-10・11は時期決定の資料になりうると思われる。ここでは耳環・鉄鎌・轡、第8号古墳墳麓出土の須恵器を中心まとめてみたい。

耳環については、分析結果が付録で細かくなされており、銅地銀張りの13-1、37-10・11と管状の銅に金めっきの施された37-12・13・14の2種類が出土した。管状の銅に金めっきの施された類例として、佐久市内では東一本柳古墳から1点出土しており、東一本柳古墳の所産期は古墳終末期に位置づけている。

鉄鎌については、平根鎌が第5号古墳後道内より29-2と第8号古墳IV区塊麓より48-1の2点が出土し、鎌身部に穿孔の施された、古式の鉄鎌38-9が第7号古墳より1点出土した。他は第7号古墳玄室内より長頭鎌38-2~8の7点が出土し、その形式は長頭鎌被開無片刃箭式と思われる。この形式は埼玉県内出土鉄鎌各期の年代V期の片刃箭式から端刃片刃箭への移行する時期と思われる。また、土屋長久氏は「信濃佐久平古氏族の

性格とまつり」の中で信濃においては片刃箭式の鐵は古墳時代終末期に近い古墳からの出土としており、以上のことから38—2～8は7世紀中葉～後半以降に作られたものと考えられよう。

轡について、第7号古墳玄室内出土の38—10・11は鏡板が円環式であり引手・衡共に断面形は橢円形であった。佐久市内で円環式轡は大沢小学校敷地より2点、前山西東古墳より1点、跡部尽田古墳より1点、百染古墳より1点の既出資料があり、1976年佐久市教育委員会によって調査された家地頭第1号古墳より断面形が方形の円環式轡が出土している。また良好な資料として小諸市与良芹沢（櫛下）古墳より3点円環式のものが出土している。以上轡においても実用性が強く、装飾的色合いの馬具が副葬されていないことは終末期の轡と考えられよう。

土器について、本古墳は石室内の出土が極めて少なく、第5号古墳28—4以外は小片であり、後期古墳の副葬品としての特徴を表わしている。ここで特筆されるのは、第8号古墳IV区埴籠に散在している須恵器の出土状況であり、この類例としては、下前田原古墳群第1・2号墳の出土状況が似ている。⁽³⁾ また、外周列石の形状にも類似性がある。

その器形については第8号古墳の項に記してあるが、個体数約40個以上を数え、器種には長頸瓶・短頸瓶・壺・坏・蓋等がある。坏底部の形態から回転ヘラキリの後再調整の45—22・23、回転ヘラキリの後、底部周縁ヘラケズリの45—25・26、回転糸切りの45—27・28・29の3形態が共存しており、蓋においても、つまみ部皿状でかえりを有する45—32、つまみ部皿状でかえりを有さない45—34～37、平扁な器形でかえりを有さない45—38、つまみ部宝珠形の45—39・40と4形態に分類でき、これらは所産期を異にするものあり、それらが共存していることは、第8号古墳は7世紀末から9世紀初頭にかけなんらかの目的を持って使用されたことを促すものであり、盗掘をうけていることから追葬の確認はできなかったが、器種構成の上でも、土師器が45—41の高坏のみであり、煮沸用土器の出土をみないこと等から総合的に墓前祭を行ったと思われる今後の問題にしたい。

次にこれらの須恵器の搬入経路を類推した時、全国的流れとして7世紀後半には地方窯が出現する時期であることから、胎土・粒子等を観察した所、長頸瓶44—2・3・4、甕44—21等は暗赤灰色～暗青灰色と暗く、ガラス質の黒斑が付着しており石附窯址の出土須恵器と類似性が認められ、北御牧村八重原の古窯址とも考え合せ今後の問題にしたい。また、胎土灰白色で粒子細かく、縁がかった自然釉の付着している美濃須衛窯の長頸瓶が第6号古墳埴籠から20—1、第8号古墳IV区埴籠から44—1、それと器種不明の破片が第6号古墳玄室内棺床面から出土していることは、美濃須衛窯が佐久に入ってきたことを物語るものである。なお、8世紀以降の佐久では、土師器窯において「武藏型」の甕が主流を占めるが、須恵器蓋のつまみ部皿状でかえりのない45—33～37と類似している蓋が南多摩窯址群M1号窯で焼かれており、M1号窯址の土器を8世紀第II四半期の土器としていることから、土師器窯同様に関東地方のつながりを知るよい資料と言えよう。

以上、長峯古墳群の五古墳について、遺構・遺物について考察してみたが、古墳築造の年代を決定するには至らず、構造上から7世紀以降、遺物から古墳時代終末期まで被葬（追葬）され、なんらかの形（墓前祭）等によって9世紀初頭まで使用されたのが長峯古墳群の性格と位置づけたい。

註(1) 田中正夫・黒澤芳之 1983 「第2章 埼玉における古墳出土の鉄器の基礎的型式分類と年代観」『研究紀要』

註(2) 中村 雄 1985 「須恵器による編年」『季刊考古学 第10号 古墳の編年を総括する』

註(3) 土屋久 1975 「奈良ある古墳の一例——前田原古墳群——」『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』

註(4) 佐久市教育委員会 1981 「石附遺跡発掘調査報告書」

第3節 長峯古墳群周辺における後期古墳について

佐久市において、古墳時代後期の古墳及び古墳群と思われる分布を佐久市遺跡詳細分布調査報告書から観た時、地形から大きなグループとして6つに分けてみた。

A群一平尾山山系に位置する古墳・古墳群。横根古墳群、平古墳群、矢口古墳群、矢沢古墳群、城古墳群、丸山古墳群。

B群一志賀・香坂川流域に位置する古墳・古墳群。瀬戸孤塚古墳群、星敷古墳群、中条峯古墳群、氏神古墳群、入大久保古墳群、小倉塚古墳群、本郷古墳群。

C群一滑津川流域に位置する古墳・古墳群。東久保古墳群、東姥石古墳群、月崎古墳群、西和田古墳群、長峯古墳群、大間古墳群と点在する7基の古墳。

D群一塚原泥流によって「流れ山」の形成される平坦地の古墳・古墳群。藤塚古墳群、姫子石古墳群、家地頭古墳群、大豆塚古墳群、下大豆塚古墳群⁽¹⁾、東池下古墳群、鶴林古墳群。

E群一湯川の下流、河岸段丘上に形成された古墳・古墳群。上鳴瀬古墳群、北西ノ久保古墳群⁽²⁾、東一本柳古墳⁽³⁾。

F群一中沢川流域の古墳・古墳群。釜塚古墳、墓陵古墳、坪内古墳。

その他、上記古墳・群集墳より先行する6世紀から7世紀初めの築造と考えられる、大型の単独墳が安原大塚、三河田大塚等として点在している。群集墳は千曲川に注ぐ支流に集中し、規模は径10m以下の小円墳が多く、10基内外の小グループを作り、特に東部山麓に集中する傾向が看取できる。また、群集墳とは離れ東一本柳古墳、蚊月古墳⁽⁴⁾、F群等散在的に分布している。しかしながら調査墳が少なく、集落址・生産地・所産期・変遷等今後の問題にしたい。

その中で、本調査の長峯古墳はC群に属し、上記の古墳群の他に塚田古墳、觀音堂古墳、松井東古墳、萩元古墳、下屋敷古墳、上屋敷古墳、後家山古墳等昭和33年の調査によると約43基の古墳が確認され、後期古墳の密集する地域である。今までに調査されたのは、昭和42年佐久平ゴルフ場古墳群調査により、東姥石古墳群より6基、月崎古墳群より16基が確認され、いずれも盗掘されており、径6~10mの小円墳の横穴石室を有し、石材は地元から産出される溶結凝灰岩が主に使用されていたと報告されている。昭和49年平賀後家山古墳が調査され、径17.4mの横穴石室を有する円墳で、副葬品として直刀片(5)・鉄鎌(12)・刀子(2)・耳環(1)・切子玉(8)・勾玉(7)・ガラス小玉(11)が出土し、平賀地区古墳群の中核的存在を示していると報じ、既出資料として明治22年、本古墳群より直刀・小刀・貴金具・鉄鎌(10)・銅鏡・耳環・須恵器・土師器、大間古墳群より刀類・鉄鎌・勾玉・切子玉・丸玉・耳環が出土したとされ、さらに提瓶が表採されている。これらがC群の調査例と既出資料であり、古墳群の解明には群のすべてを調査した上でなければ総括できないが、本調査をもとに推察してみると、東姥石古墳群・月崎古墳群の築造期は内部構造、規模、小グループの群集墳であることから長峯古墳群の築造時期と大差はないと考えられる。後家山古墳については規模が大きく、C群の先端、平坦面に広がる山麓に位置していることから、東一本柳古墳の様な単独的様相を示し、また、平坦地に点在している上屋敷古墳、下屋敷古墳にも同様なことが推察され、群集墳とこれら点在する古墳との関係は留意したい。

次に古墳を考えた時、集落址、生産遺跡の3者を総括し検討しなければなるまい。そこでC群の集落址はどこにあるかを推測すれば、昭和57・58年と調査された滑津川の下流、平坦地に注ぐ北側に通村遺跡があり、ここから古墳時代の住居址が273棟検出され、集落の変遷を3区分している。Ⅰ期はムラの初期とし77棟。Ⅱ期は安定期とし91棟、Ⅲ期は大化の改新等により国家機構の変化が地域に及んだ時期とし33棟検出区分している。この集落の変遷がC群の古墳にどのような変化を生じたかは今の段階では不明であるが、C群の性格を知る手懸りになると思われる。

(羽毛田)

註① 佐久市教育委員会 1976 『家地頭第1号古墳発掘調査報告書』

築造年代は、内部主体及び墳丘の構造から7世紀中葉と推定されている。

註② 佐久市教育委員会 1983 『下大豆塚1号・2号古墳』

調文中において、「2号墳では、7世紀代とみられる尖根笠被蓋矢式や尖根笠被片矢式の鉄鎌が出土しており……更に

先述した矩形を呈する壙を伴うアーチ型、高麗尺を単位とする石室の規模などを考え合せると、2号古墳の築造年代は、7世紀中葉

後葉を想定することができる。1号古墳に関しては……石室の形状・規模から考えると2号古墳とほぼ近接した築造年代が

与えられるだろう。』としている。

- 註(3) 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1987 「北西の久保—南部台地上の調査—」
第2号古墳の築造年代は、「立地・形状・副葬品等から7世紀後半と推定される。」としている。
註(4) 佐久市教育委員会 1972 「佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告」
註(5) 1969 佐久市教育委員会によって調査された。大川 清氏により、「佐久の単独塚の北限である。」という指摘がなされている。
註(6) 平賀村誌刊行会 1969 「平賀村誌」
註(7) 八幡一郎 1978 「南佐久郡の考古学的調査」
註(8) 1959 佐久市教育委員会によって行われた佐久市遺跡詳細分布調査の際に、大間古墳群より表採された。
註(9) 佐久市教育委員会 1985 「膳村遺跡 道標編」

引用参考文献

- 佐久市教育委員会 1967 「佐久平ゴルフ場古墳群調査報告書」
佐久市教育委員会 1972 「佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告」
佐久市教育委員会 1973 「佐久市下田野原古墳群商術免耕調査概報」
佐久市教育委員会 1976 「地図第1号古墳発掘調査報告書」
佐久市教育委員会 1980 「佐久市後宮山古墳調査報告書」
佐久市教育委員会 1981 「石松遺跡発掘調査報告書」
佐久市教育委員会 1983 「下大豆塚第1号・第2号古墳」
佐久市教育委員会 1984 「佐久市遺跡詳細分布調査報告書」
佐久市教育委員会 1985 「膳村遺跡 道標編」
佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1987 「北西の久保—南部台地上の調査」
御代田町教育委員会 1987 「前田遺跡」
平賀村誌刊行会 1969 「平賀村誌」
長野市教育委員会 1981 「長野 大室古墳群分布調査報告書」
長野県教育委員会 1983 「長野県史 考古資料編・主要遺跡（東北篇）」
長野県教育委員会 1984 「長野県史 考古資料編・主要遺跡（中南信）」
群馬県教育委員会 1981 「群馬県史 資料編3 原始古代3 古墳」
群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983 「大沼遺跡 金山古墳群」
財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983 「上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告—VII—三ヶ尻天王・三ヶ尻林（1）」
財团法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983 「埼玉県における古墳出土遺物の研究—鉄鏡について—」「研究記要」
石井 昌国 1979 「古代の刀剣」「日本古代文化の探求 鉄」
石野 博信 1984 「古墳時代史 9 古墳の終末」「季刊考古学 第9号 墓室の形態とその思想」
石野 博信他 1985 「季刊考古学 第10号 古墳の編年を結論する」
東森 紹・伊藤 男輔 1985 「遺物が語る大和の古墳時代」
若崎 卓也他 1986 「季刊考古学 第16号 古墳時代の社会と変革」
大塚 初重 1963 「後期古墳の研究」「信濃大室古墳群」
大塚 初重・小林 三郎・小平 秀夫 1968 「横石塚調査」「信濃 長原古墳群」
大塚 初重他 1983 「季刊考古学 第3号 古墳の謎を解剖する」
大塚 初重・小林 三郎 1984 「古墳辞典」
大塚 初重 1951 「信濃國の古墳群の性格」「上代文化」第21号
神村 透 1970 「大室古墳群北谷支群緊急発掘調査並報告書」
神津 藍 1929 「北御牧村八重原の製陶址」「信濃考古学会誌」第1号
後藤 守一 1939 「上古時代鉄鏡の年代研究」「人頭字記説」
田辺 昭三 1982 「復活器大成」「角川書店」
土屋 長久 1970 「信濃佐久平の後期古墳群について」「信濃 III」22-12
土屋 長久 1975 「信濃佐久平古氏族の性格とまつり」
堤 隆 1987 「佐久地方における奈良時代を中心とした土器様相」「長野県考古学会誌 55・56号 シンポジウム特集号
信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相」
前岡 実知雄 1984 「律令官人の墓」「季刊考古学 第9号 墓室の形態とその思想」
丸山 寛平 1984 「古墳群の変遷」「季刊考古学 第9号 墓室の形態とその思想」
水野 正好 1981 「群衆墳の構造と性格」「古代史免耕6 古墳と國家の成り立ち」 講談社
八幡 一郎 1978 「北佐久郡の考古学的調査」「南佐久郡の考古学的調査」

付編

佐久市長峯古墳群第1号古墳出土人骨について

聖マリアンナ医科大学教授 森本 岩太郎

I はじめに

佐久市大字内山字長峯所在の長峯古墳群第1号古墳は7世紀に属する古墳であるという。昭和62年4~7月の発掘調査において、その両袖付き横穴の玄室内から複数個体の人骨が発見され、取り上げられた。筆者は佐久埋蔵文化財調査センターからの依頼によりこの人骨を調べたので、ここに報告する。

II 人骨の出土状況

玄室の広さは幅約1.5m・奥行き約2.5mであり、玄門を南南東に向いている。発見された人骨は、向かって左手の壁際に沿って成人骨1体分(第1号人骨)、玄門を入ってすぐの所に成人骨2体分(第2・3号人骨)、計成人骨3個体分である。第1号人骨(成人女性)は頭蓋片と大腿骨片だけしか残っておらず、それらの配列も解剖学的に必ずしも自然ではないが、頭蓋片が奥壁近くにあり、大腿骨片が入口と奥壁の中間ぐらいの所に存在するので(図1)、仮にこれが追葬の際に壁際に片寄せられたものであるとしても、埋葬当初においては頭が奥で足が手前の伸展位で玄室内に納められたものと推測される。

第2号(壮年期後半の男性)・3号(壮年期前半の女性)の両人骨は、玄門を入ってすぐの玄室内に、頭が向かって右手、足が左手にくるように重ねて置かれているので、明らかに追葬されたものと思われる(図1)。第2号男

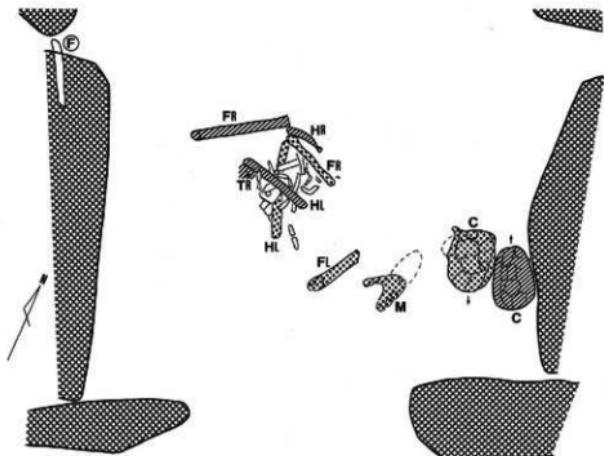


図1. 玄門付近の玄室内における第2号人骨(小点)と第3号人骨(斜線)の配列。C.頭蓋; F.大腿骨; H.上腕骨; M.下顎骨; T.脛骨。記号末尾のLは左側を示す。頭蓋につけた矢印は頭面の向いている方向。○印の付いたものは、第1号人骨に属する人骨の一部。

性頭蓋は顔面を手前に、また第3号女性頭蓋は顔面を奥に、それぞれ向いている。兩人骨の配列はやや乱れているが、おおむね解剖学的に自然に近い。第2号はおそらく下肢を軽く曲げた左側臥屈位で顔を手前に向け、また第3号も下肢を軽く曲げた右側臥屈位で顔を奥に向け納められたものと思われる。第2号の左上腕骨が第3号の左上腕骨より深い所にあるので、追葬は第2号男性が先で、第3号女性が後であると推定される。追葬の時期は明確でないが、この古墳が例えれば家族墓として使用されていた当時の追葬であるとも言えるし、またずっと下がった後の時代に例えば無縁の行路病者（行き倒れ）を便宜的にそこに納められたとも想像できる。第1号人骨は追葬に際して片寄せられたと思われる配列をとっており、それが当時は普通のこととされている。しかし、第2・3号が玄門の近くに置かれているところをみると、それ以前に玄室内の奥深くに埋葬されていた遺体（または人骨）の片寄せ作業を行っていないのではないかと思われる。その後にそこに納められた可能性のほうが高いと言えよう。第3号は第2号より人骨の保存状態が良いが、第3号は第2号よりも若干浅い所にあった。第2・3号が重ねて同時に納められた可能性もあるし、あるいはまず第2号が納められ、遅れて後から第3号が追加的に納められた可能性もあり得る。そのへんの事情は判然としないが、得られた人骨の形質上の特徴（IIIで記載する）からは両様に考えても特に矛盾は生じない。

玄室内から副葬品として金張りの耳飾（銀環）が伴出しているが、これは第1号人骨、または残存人骨はないにせよその前後に埋葬された人物に伴うものと思われる。またウマの頭蓋と歯の破片も玄室内で発見されたが、これは故人の愛馬と一緒に埋葬したものか、あるいは後世になってこの玄室を「馬頭鏡世音」代わりに使用したものか、についてもよく分からぬ。

III 人骨所見

成人3体の人骨は既てしていないが、共通して保存状態が不良であり、欠損部分が多く、復元したものも形が歪んでいる。したがって、頭蓋はもちろんのこと、四肢長骨に至るまで殆どその計測は不可能である。また特記すべき外傷や疾病は見当たらない。

(a) 第1号人骨（図2）

左手の壁際に沿って発見された成人女性人骨1個体分である。頭蓋冠の小破片数個と右大腿骨体片・左右不詳の大脛骨体片各1個がある。骨質は比較的薄く、骨体が細い。右大腿骨体片についてみると骨体上部は偏平であるが、ピラステルの形成は見られない。

(b) 第2号人骨（図3・4）

玄門を入ってすぐの所で発見された壮年期後半の男性人骨1個体分である。頭蓋片と左上腕骨体・左右の大脛骨体の一部がある。頭蓋片を集めて復元してみると、頭蓋冠の後半部と右前半部、および顔面頭蓋の正中線に沿う一部が不完全に残っていることが分かる。しかし各骨片の変形が修正できないので、頭蓋の計測は無意味である。この頭蓋は前額部が後方へ傾斜し、外後頭隆起および歯槽弓が比較的大きく、眉間ならびに眉弓が突出し、下頬角が外反するなど、男性頭蓋としての特徴を備えている。頭蓋冠の主縫合を見ると、内板では完全に閉鎖しているのに、外板ではまだ開いている部分が多い。歯および歯槽の状態を次に示す。

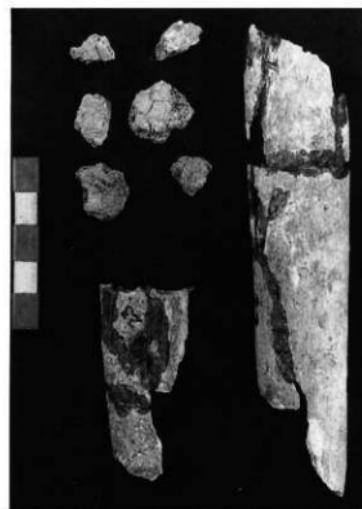


図2. 第1号人骨の頭蓋片(左上)と大腿骨



図3. 第2号人骨の頭蓋右前面観

$\times 7 6 5 4 3 \times \times$	$\times \times 3 4 5 6 \times \times$
8 ● 6 5 × 3 × ×	× × × ○ ○ ○ ● ●

ただし、数字は歯存する永久歯、○印は歯槽開放、●印は歯槽閉鎖、×印は欠損のため状況不明のことをそれぞれ示す(以下の場合も同様)。歯の咬耗度は上顎の左大臼歯と右第1小白歯と、下顎右大臼歯がBroca2度、その他の歯が同3度であり、骨年令に比べて歯の咬耗が著しく進んでいる。オトガイ孔は右1個・左2個認められる。

上腕骨の三角筋粗面・大腿骨の粗線などの筋の付着部の発達は良い。上腕骨体中央部の横断示数は82.6、また、大腿骨体中央部の横断示数は96.7で、ビラステルの形成は認められない。大腿骨体上部は比較的偏平である。

(c) 第3号人骨(図5・6)

玄門を入ってすぐの所で発見された壮年期前半の女性人骨1個体分である。頭蓋片と椎骨・左右の肋骨・上腕骨ならびに右の鎖骨・尺骨・謫骨・大腿骨・膝蓋骨・脛骨・腓骨・距骨・蹠骨などの骨片が残っている。

頭蓋については頭蓋冠片のほか若干の頸骨片などがあり、それらを接合して幾つかの大きな破片群にまとめるることはできるが、欠損部も多いので、さらにそれを連続させて丸い形の頭蓋に復元することは難しい。この頭蓋は前額部が垂直に近く、外後頭隆起や歯が小さく、骨質が薄く、女性としての特徴を備えている。頭蓋冠の主縫合は内・外板とも開いている。上顎の歯および歯槽の状況は次の通りであるが、下顎の歯については歯存するものが無ないので全く不明である。

$\times \times \times 5 \times \times \times$	$\times \times \times 4 5 6 7 8$
---	----------------------------------

歯の咬耗度は前歯がBroca1度、後歯が同2度である。

椎骨については第2頸椎、第8~12胸椎、第1~2腰椎などの破片が残っている。左右の肋骨片は長短合わせて30個あまりの破片がある。

右鎖骨は円錐韌帯結節を含む小破片である。左右の上腕骨は骨体の大部分があり、三角筋粗面の発達は良いが骨体は細い。上腕骨体中央部の横断示数は左右とも83.3である。右尺骨体は尺骨粗面を含む骨体上部である。右大腿骨体上部は横断示数が69.0を示して過広型に属し、骨体中央部の横断示数は100.0を示してビラステルの形成は認められない。右膝蓋骨は上外側部だけが残っている。右腓骨体は外果に近い部分で、短いものである。右距



図4. 第2号人骨の上腕骨(右端)と大腿骨

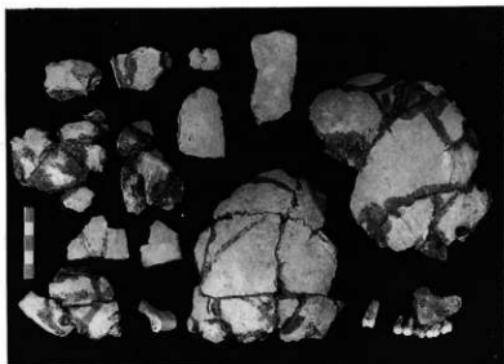


図5. 第3号人骨頭蓋の主要骨片。前頭部（中央下の大きな破片）、左顎頂・側頭部（右上の大規模な破片）、上顎の齒（右下）などが見られる。



図6. 第3号人骨の椎骨（左1列目と左から2列目の上端）・腰骨（左から2列目）・大脛骨と腓骨（中央の列）・上腕骨（右から1・2列上）・尺骨（右1列目下から2番目）・距骨と蹠骨（右下）。

骨滑車の蹠面については欠損のため観察できないが、距骨体副外面（Sewell）が大きく、踵骨の後距骨関節面の前外側部には発達した前方伸展が認められるので、この女性は生前に蹠面する習慣をもっていたものと推定される。

IV まとめ

佐久市所在の7世紀に属する長峯古墳群第1号古墳玄室内から出土した人骨は成人男性1体・女性2体、計3個体分である。このうち女性1体（第1号人骨）は当初からこの古墳に埋葬され片寄せられたものと考えられるが、他の男女各1体（第2・3号人骨）は後の時代に玄門付近の玄室内に埋納された可能性が高い。第2号男性人骨は、骨年令にくらべて歯の咬耗度が進んでいる。第3号女性人骨は生前に蹠面する習慣をもっていたと思われる。

長野県佐久市長峯古墳群出土の馬歯・馬骨

群馬県立前橋第二高校教諭 宮崎 重雄

本稿で用いた基準は以下の基準による。

- 1) 解剖用語は、日本獣医学会の「家畜解剖学用語」による。
- 2) 臼歯の咬合面の名称は SIMPSON (長谷川・原田)「馬と進化」による。
- 3) 計測法は主に直良・DUEERST⁽¹⁾ を参考にした。
- 4) 日本在来馬の分類は林田によった。
- 5) 計測器具は、三叠加製の 1/16mm のノギスを使用した。

1 第1号古墳 No.13

出土したのは、上顎乳臼歯と永久歯とそれを支えているわずかの口蓋突起である。

乳臼歯は左右とも第2乳臼歯から第4乳臼歯まで、永久歯は第1後臼歯と第2後臼歯が残存し、その他に未萌出の第2前臼歯～第4前臼歯、第3後臼歯の破片が存在する。

左上顎第2乳臼歯

近心側にわずかに欠損があり、歯根部には吸収窩が見られる。

左上顎第3乳臼歯・第4乳臼歯

完存する歯で、吸収窩が見られる。

左上顎第1後臼歯

完存する歯で、歯冠長が咬合面に近くなるにつれて、増している。

左上顎第2後臼歯

遠心側と口蓋側に欠損がある。咬耗は前錐で始まったばかりである。

右上顎第2乳臼歯

頬側の歯冠部エナメル壁と近心側のエナメルを欠損する。

右上顎第3乳臼歯

頬側の歯冠部エナメル壁を欠損する。口蓋突起で第4乳臼歯とつながっている。萌出途上の第3前臼歯が歯根部に存在する。

右上顎第4乳臼歯

ほぼ完存する。口蓋側歯根が口蓋側へ大きく張り出しているのが観察される。

右上顎第1後臼歯

ほぼ完存する歯で、歯冠長が咬合面に近くなるにつれて増している。

右上顎第2後臼歯

遠心側にわずかに欠損がある他はほぼ完存する。咬耗は前錐で始まったばかりである。

この馬は、歯の萌出状況から1歳数ヶ月の幼齢馬と判断される。性別は不明である。

比較・考察

計測値・比較表において、他馬と比較してみると、この馬は、第3乳臼歯が佐久市池畠遺跡出土の馬歯に酷似し、第4乳臼歯でも同遺跡馬に最も近い計測値を示す。また奈良～平安時代馬の群馬県大久保A 遺跡出土の馬歯とは隔たりが大きく、それよりもむしろ現生のサラブレッドの方に近い値を示す。両乳臼歯とも歯冠長幅指数が

大きいのが注目される。特に第4乳臼歯では歯冠長が26.9と小さめなのに対し、歯冠幅は22.2と比較的大きいため、長幅指数も82.5と際立った大きな値を示す。第1後臼歯は泡畠馬より歯冠長が少し小さいが、歯冠幅が大きいため、長幅率が79.9と泡畠馬に比べかなり大きくなっている。サラブレッドに比べると歯冠長・歯冠幅とも小さく、長幅率だけがやや上回る。第2後臼歯も泡畠馬に近く、サラブレッドよりはだいぶ小さい。

2 第1号古墳 No.12

7片以上からなるウシ(?)の臼歯片で、歯冠高は26.0mmを測る。焼成を受けていない。

3 第5号古墳 No.2

保存全長26.6mmの四肢骨片を含む数片の骨片で、熱によって亀裂が生じている。加熱された熱は800°C前後が予想される。

謝辞

本稿を草するにあたり、サラブレッドの頭骨標本を貸与してくださった日本大学松戸歯学部の三島弘幸博士にお礼申し上げます。

表1 長峯古墳群第1号古墳No.13の乳臼歯及び臼歯計測値・比較表(単位mm)

標本	部位	第2乳臼歯	第3乳臼歯	第4乳臼歯	第1後臼歯	第2後臼歯
長峯古墳群	右	歯冠長 × 幅 × 高 長幅率	32.2+ 17.4+ 18.0+ 12.5	26.6 21.8 23.3 63.5	27.0 16.4 76.3 80.7	28.5 81.8
	左	歯冠長 × 幅 × 高 長幅率	29.5+ 19.7+ 22.2 12.6 81.3	27.3 22.2 18.0 82.5	26.9 22.2 77.3 79.9	29.3 23.4 76.6
	(6) 泡畠	歯冠長 × 幅 × 高 長幅率		27.7 22.4 13.0 80.9	28.2 22.4 19.4 79.4	30.6 21.8 79.7 71.2
	(7) 大久保	歯冠長 × 幅 × 高 長幅率		30.4 20.4 (-) 67.1	32.1 19.4 60.4	32.1 59.6 83.5
サラブレッド		歯冠長 × 幅 × 高 長幅率		29.8 24.0 13.0 80.5	30.0 24.0 13.8 80.0	33.0 25.6 77.6 75.9

(サラブレッドは、日本大学松戸歯学部三島弘幸博士所蔵のもの)

引用文献

- 日本獣医学会 1978 『家畜解剖学用語』 日本中央競馬会弘済会
- SIMPSON, G. 1951 「Horses」 Oxford University, Press, New York (長谷川善和・原田俊治 1979『馬と進化』どうぶつ社)
- 直良 信夫 1984 『日本馬の考古学的研究』校倉書房
- DUERST, U. 1926 「Vergleichende Untersuchungs-Methoden am skelett bei Säugetieren」 Handbuch der biologischen Arbeitsmethoden, 7.2, pp.125~30
- 林田 重幸 1978 『日本在来馬の系統に関する研究』 日本中央競馬会
- 宮崎 重雄 1986 『長野県佐久市泡畠遺跡出土の馬と牛の骨について』『泡畠・西御堂』
佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 宮崎 重雄 1986 『吉岡村大久保A遺跡出土の馬歯・馬骨』『大久保A遺跡一II区』吉岡村教育委員会・
群馬県教育委員会・日本道路公団

長峯古墳群第1・7号古墳出土耳環のX線マイクロアナライザーによる定性分析

長野県工業試験場素材部第1部主任研究員 狩野 善典

1 試料の洗浄

200mlビーカーに水200ml、ママレモン1滴を加え試料を入れ超音波洗浄装置により5~6分間洗浄して、表面の汚れを除き、水洗後エチルアルコールに1~2分浸漬し、ヘアードライヤーの熱風で乾燥した。但し、第7号古墳出土の37-13は上記の方法で洗浄をしなかった。

2 試験器名

島津EpMA810を用い、X線マイクロアナライザーによる定性分析を行う。

3 分析結果

第1表 長峯古墳群第1・7号古墳出土耳環分析表

第1号古墳出土耳環 13-1			第7号古墳出土耳環 37-10			第7号古墳出土耳環 37-11			第7号古墳出土耳環 37-12			第7号古墳出土耳環 37-13			第7号古墳出土耳環 37-14						
主成分	Ag	Au	Ag			Au			Au			Au			Au						
表 不純物	Hg	Cu	Zn	Cu	Ag	Hg	Cu	Au	Cu	Ag	Hg	Cu	Ag	Hg	Zn	Cu	Ag	Hg	Zn		
汚染物	Si	Al		Si	Cl		Si	Cl	—			Si	—		Si	—					
厚さ	50~60μm			50~60μm											2.06μm以下						
方法	AgとAuがアマルガム法によるめっき。 2種の合金のつぶれ。			Ag7+タルガム層によるめっき。 Ag7+タルガム層によるめっき?			Ag7+タルガム層によるめっき? α(2種の合金上にAg ₂ -Zn等のアマルガムを施すし、その上に金層(厚さ1~2μm)を置いて仕上げる。)			Ag7+タルガム層によるめっき。 α(2種の合金上にAg ₂ -Zn等のアマルガムを施すし、その上に金層(厚さ1~2μm)を置いて仕上げる。)			Ag7+タルガム層によるめっき。 α(2種の合金上にAg ₂ -Zn等のアマルガムを施すし、その上に金層(厚さ1~2μm)を置いて仕上げる。)			Ag7+タルガム層によるめっき。 α(2種の合金上にAg ₂ -Zn等のアマルガムを施すし、その上に金層(厚さ1~2μm)を置いて仕上げる。)			Ag7+タルガム層によるめっき。 α(2種の合金上にAg ₂ -Zn等のアマルガムを施すし、その上に金層(厚さ1~2μm)を置いて仕上げる。)		
主成分	Cu		Cu		Cu		Cu		Cu		Cu		Cu		Cu(厚さ0.5mm以下)						
地 不純物	Pb		Au	Ag		Au		—	—	—	—	—	—	—	—						
金 汚染物	Si		Si	Al	Cl	Ca	Fe	—	—	—	—	—	—	—	0						
備考	近赤、純銅に近い。酸化が著しい。									空洞、純銅に近い。酸化が著しい。											

4 まとめ

第1・7号古墳出土の耳環を2形態に分類し、A類は地金が延棒のもの、B類は地金が空洞のものとした。

A類——13-1、37-10・11

○超音波洗浄によっても、汚れは完全に除くことは不可能であった。したがってSi・Ca・Al・Clなどは埋蔵中に汚染されたものとした。

○表面の含有成分はAu・Cu・Zn・Hgを含み、Hgを含んでいることからアマルガム法によるめっきと考えられAu・Cu・Zn等はHgに含まれていたものか、めっき法と関係があると考えられる。

○めっきは銀を主成分とする13-1、銀と金の合金である37-10・11がある。

○地金は純銅に近く、現状では酸化が著しい。

B類——37-12・13・14

○金を主成分とし、1~2μm程度の厚さである。めっき面にはCu・Ag・Zn・Hgがほぼ均一に分布している。

○めっきの方法はアマルガムが使用された事は確実と思われる。

○技法として2方法考えられる。

1) 金アマルガムの塗布

2) 金箱をアマルガムで張り付ける。

○地金は純銅に近く、現状では酸化が著しい。

第2表 第7号古墳出土37-12・13・14成分分析表

成 分	Cu	Au	Ag	Hg	Pb	Zn
37-12	表面	+	++++	+	+	-
	地金	++++	-	-	-	-
37-13	表面	++	++++	++	+	-
	地金	++++	-	-	-	-
37-14	表面	++	++++	++	+	-
	地金	++++	-	-	-	-

図1 13-1 めっき表面
(SEM×600)

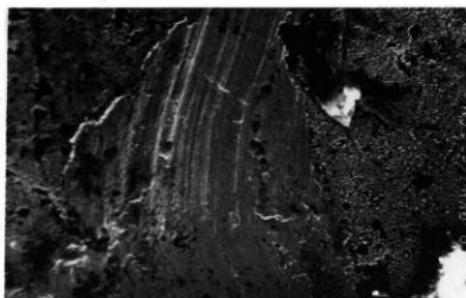


図2 13-1 めっき断面
(SEM×300)

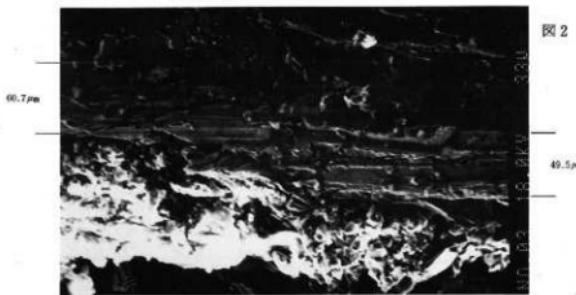


図3 37-11 めっき表面
(SEM×300)

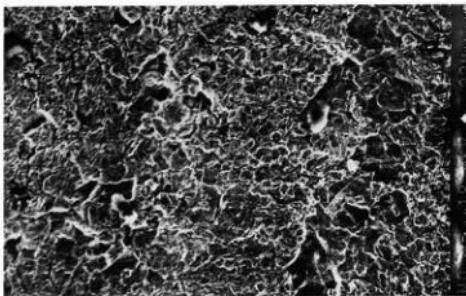


図4 37-11 めっき断面
(SEM×100)



図5 37-10 めっき断面
(SEM×300)



図6 37-14 めっき断面
(Au層の厚さ推定2μm)
(SEM×300)



図7 37-14 地金分析表面
(SEM×300)

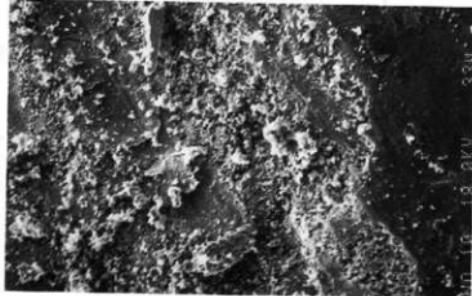
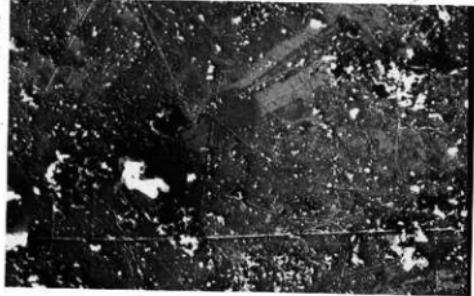


図8 37-13 めっき表面
(SEM×300)



後記

今回、佐久市開発公社が行う宅地開発事業が本古墳群内において計画され、その予定地内に7基の古墳が存在していることから、古墳の破壊・埋滅が余儀なくされる事態となり、記録保存する必要性が生じ、これに伴ない緊急発掘調査を行うことになりました。

本調査において、調査各段階での御配慮をいただいた佐久市教育委員会・調査に関係ある皆様方の御理解と御協力によって調査を充実したものにすることができたことを心から御礼申し上げます。また、3月の梅が咲く頃より、土用の炎熱の中を現地調査に、続いて整理調査にと長い間参加してくださった協力者の皆様の熱意と、調査段階に於て、御指導・御助言を賜わりました県教育委員会文化課小林秀夫先生、県埋蔵文化財センター丸山敏一郎先生はじめ各位の御協力により、ここに報告書を発行できることを改めて感謝の意を表する次第です。

佐久市教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査報告書によると、長峯古墳群の周辺には、東側に隣接する大間古墳群（7基）・南西に西和田古墳群（3基）・月崎古墳群（19基）・東姥石古墳群（5基）等が確認されています。長峯古墳群の古墳を含め縦横に横穴式古墳であり、開口され盗掘が行われ、墳丘は崩廻し、天井石・側壁石は露出し、或いは天井石が持ち出されたり、その破壊は著しいものであります。

本調査で検出された古墳遺構は5基・礎詰め構状遺構4基でした。盗掘されてはいたが、詳細綿密な調査により、第1号墳より、人骨3個体・獸骨・耳環1・刀子1を、第5号墳より骨粉・鉄鎌1・刀子3・須恵器・土師器を、第6号墳より骨粉・直刀1・他刀装具・刀子1・須恵器を、第7号墳より小刀1・鉄鎌8・馬具（轡）1・ガラス小玉2・切子玉2・管玉1・勾玉2・丸玉1・耳環5・須恵器を、第8号墳より骨粉・獸骨（齒）・刀子3・鉄鎌1・土師器・須恵器等を出土し、また、古墳の構築・石室等の検証もされ、重要な資料を得ることができ、佐久市地域内に於ける群集墳の一端が明らかにされたことは意義深いことであります。

本古墳調査を行った者として、被葬者と古墳・古墳時代の集落遺跡との関係解明の課題を持ちながら、地域に存在する諸遺跡との関係等、地域の原始・古代の生活をひき続き研究しなければならない責任を負っており、その意味からも今後更に各位の御指導を賜わり、本報告書を古墳総合調査の足掛りとしたい所存です。

黒岩 忠男



長峯古墳群付近航空写真（東洋航空事業株式会社撮影 C8-14）



長峯古墳群航空写真（昭和測量社撮影）



1. 長峯古墳群遠景（南方より）



2. 長峯古墳群遠景（西方より）



1. 第1号古墳全景（南方より）



2. 第1号古墳調査前（西方より）



3. 第1号古墳（北方より）



4. 第1号古墳I区画込め及び外周列石（北東より）



5. 第1号古墳石室（南方より）



1. 第1号古墳玄室内棺床（南方より）



2. 第1号古墳玄室内石床撤去後（南方より）



3. 第1号古墳玄室内人骨・散骨出土状況（南方より）



4. 第1号古墳鏡蓋骨出土状況（西方より）



5. 第1号古墳耳環出土状況（北方より）



1. 第6号古墳全景（南方より）



2. 第6号古墳調査前（南方より）



3. 第6号古墳井石（北方より）



4. 第6号古墳玄室内棺床（南方より）



1. 第6号古墳玄室内棺床櫛除去後（北方より）



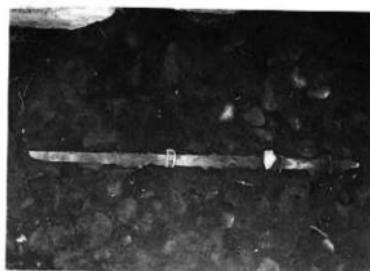
2. 第6号古墳石室（南方より）



3. 第6号古墳石室断面（南方より）



4. 第6号古墳直刀出土状況（南方より）



5. 第6号古墳直刀出土状況（東方より）



6. 第6号古墳全景（北方より）



1. 第8号古墳全景（南方より）



2. 第8号古墳調査前（南方より）



3. 第8号古墳調査前（西方より）



4. 第8号古墳玄室内棺床（北方より）



1. 第8号古墳玄室内棺床（東方より）



2. 第8号古墳玄室内棺床礫除去後（西方より）



3. 第8号古墳墳丘側断面（東方より）



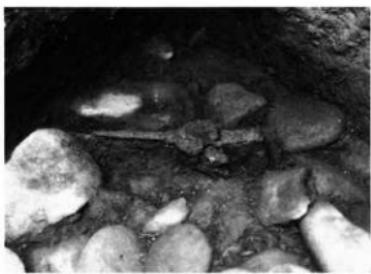
4. 第8号古墳墳丘北側断面（北西より）



5. 第8号古墳石室（南方より）



6. 第8号古墳玄門（北方より）



1. 第8号古墳遺物出土状況（北方より）



2. 第8号古墳遺物出土状況（南方より）



3. 第8号古墳IV区埴輪遺物出土状況（北方より）



4. 第8号古墳IV区埴輪遺物出土状況（南方より）



5. 第5号古墳全景（南方より）



1. 第5号古墳石室内部崩落状況（北方より）



2. 第5号古墳石室（南方より）



3. 第5号古墳石室内部概床（北方より）



4. 第5号古墳石室（南方より）



5. 第5号古墳遺物出土状況（北方より）



6. 第5号古墳遺物出土状況（東方より）



1. 第7号古墳全景（南方より）



2. 第7号古墳石室内棺床（北方より）



3. 第7号古墳玄室内棺床除去後（北方より）



1. 第7号古墳石室（南方より）



2. 第7号古墳墳丘西側裏込み（西方より）



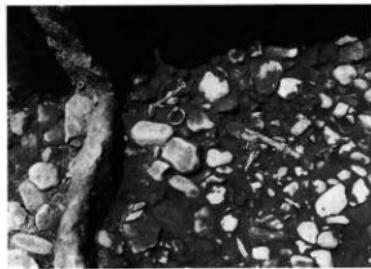
3. 第7号古墳墳区外周列石（南方より）



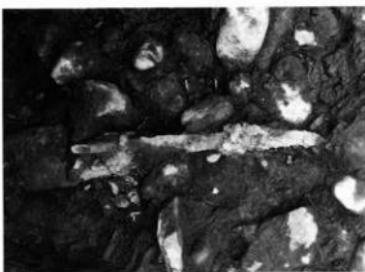
4. 第7号古墳IV区外周列石（南方より）



5. 第7号古墳前底部集石（南方より）



6. 第7号古墳遺物出土状況（東方より）



1. 第7号古墳小刀出土状況（南東より）



2. 第7号古墳鉄鏃出土状況（北方より）



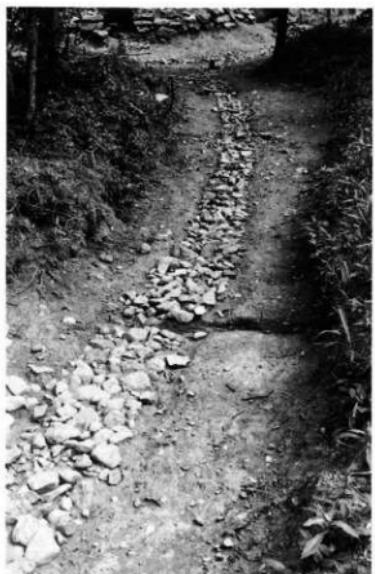
3. 第7号古墳耳環出土状況（東方より）



4. 第7号古墳壺出土状況（北方より）



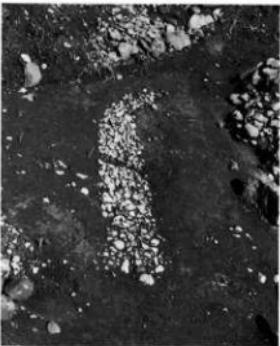
5. 第5・7号古墳（南東より）



1. 第1号礫詰め溝（南方より）



2. 第1・2号礫詰め溝（東方より）



3. 第3号礫詰め溝（東方より）



4. 第3号礫詰め溝（南方より）



5. 第4号礫詰め溝（東方より）



6. 第5・7号古墳、第1号礫詰め溝（南東より）



1. 第6号古墳出土土器



2. 第6号古墳出土土器



3. 第5号古墳出土土器



4. 第5号古墳出土土器



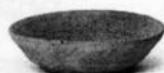
5. 第8号古墳出土土器



6. 第8号古墳出土土器



7. 第8号古墳出土土器



8. 第8号古墳出土土器



9. 第8号古墳出土土器



10. 第8号古墳出土土器



11. 第8号古墳出土土器



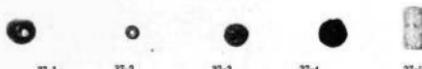
12. 第8号古墳出土土器



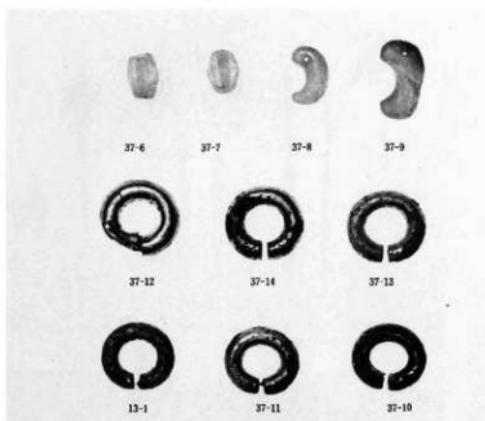
13. 第8号古墳出土土器



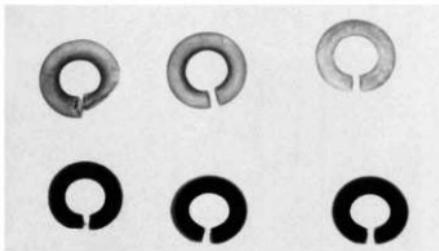
1. 第8号古墳出土土器



2. 第7号古墳出土玉佩



3. 第1・7号古墳出土玉佩・耳環



4. 第1・7号古墳出土耳環・X族穿孔耳環



5. 第6号古墳出土直刀



1. 第6号古墳出土刀裝具



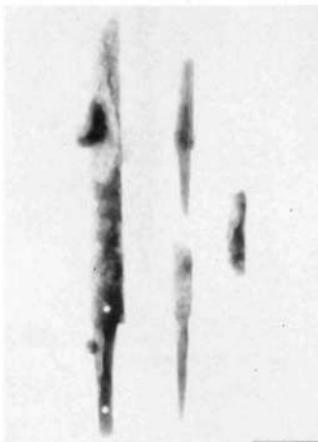
2. 第7号古墳出土物



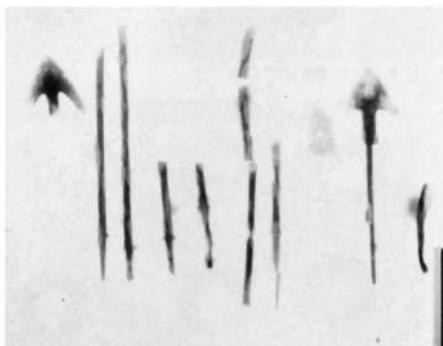
3. 第5・7・8号古墳出土小刀・刀子



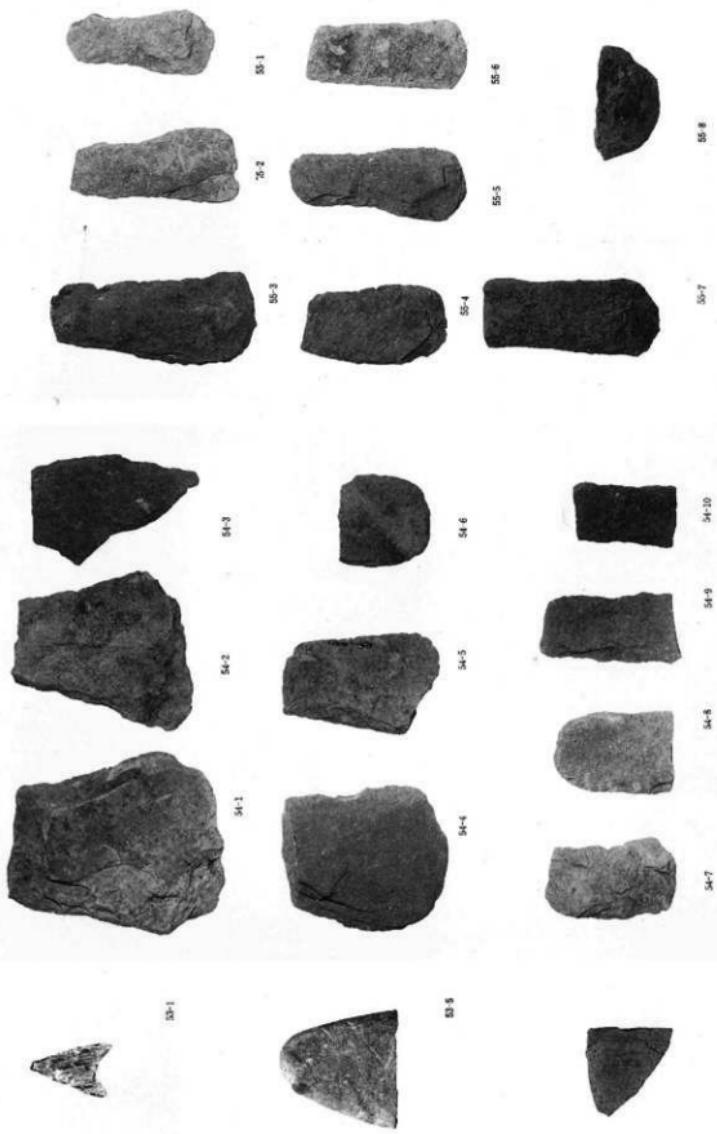
5. 第5・7・8号古墳出土鉄鏃



4. 第5・7・8号古墳出土小刀・刀子X線写真



6. 第5・7・8号古墳出土鉄鏃X線写真



1~5. 关家古村出土石器

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第1集	「西園・竹田寺」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第2集	「池畠・西御堂」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第3集	「芝　　園」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第4集	「新　町　日」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第5集	「宿上屋敷、下川原・光明寺」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第6集	「洪瀧・墨敷戸・西片ヶ上・曲尾川・曲尾工」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第7集	「高野町・西大久保」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第8集	「北西ノ久保」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第9集	「梨　の　木」
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第10集	「菅田畠・新町畠・宮の上・中曾根・藤塚」

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第11集

長野県佐久市長峯古墳群発掘調査報告書

1988年3月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター

発行者 長野県佐久市教育委員会

印刷所 株式会社佐久印刷所
